

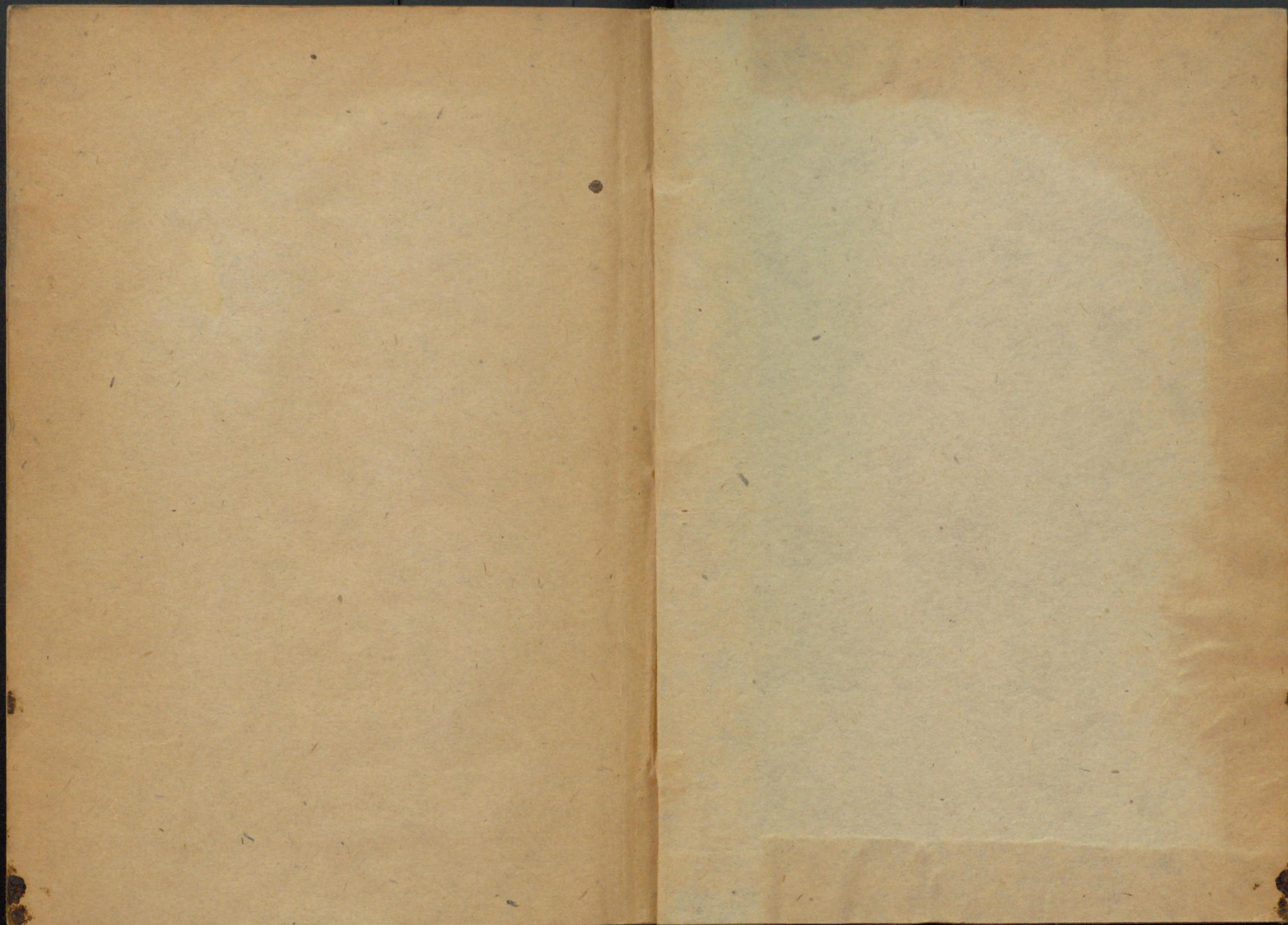
619-283



1200501537408

9

283





がんだん
おのひつ

隨筆

厚日堂
著

ざんせい
あらはす

竹村書房
刊行

ハ里空の午洗ふ梅の花



619-283.

慈眼山隨筆目次

涅槃西風

(春)

鶯、定紋、呼鈴、勳章、春の理髮店、綬鶏日誌、繪書と批評、藍染川、煤と鶴、松と椎の城、發句道の新人、名苑、古拙と清瘠。

蕤賓

(夏)

あやめ祭、若葉の祭、夏祭、歌集「白南風」を読む、三度の飯より文學が好き、批評家、紙の龍、しろねずみのこと、ほじろ卵をうむこと、えひごりうなぎのこと、へびのこと、詩よきみとお別する、まめなること、女心、山だより——一、山中酒仙二、百合の花粉三、猫女の圖——齒痛音楽、書物雜感、葭と蘆、記憶は化粧を、博物館、日録。

曝涼

(秋)

原稿遺失、齡、寢衣、巻、自轉車、鬪犬、小諸の町——一、山二、簞笥二、キス四、暇のない人五、二本のラケット六、子供を怒つていいか——五位鶯、文藝時評——一、山中に文學なし二、大衆物、轉向の問題三、女人と文學四、情慾と文學五、小説と面白さ六、時評家さまざま七、人生こまぎれ八、づぼらな作品を——十月の日記、下手物と古材、劇について。

三冬月

(冬)

芥川龍之介と詩、中野重治君におくる手紙、自然と運命、徳田秋聲氏と僕、詩への告別に就て荻原君に答ふ——一、牡蠣の料理二、白鳥の死三、僕の詩がどこでどう滅びたか四、文學青年の生立——人生の極北、時計、十一月の日記、晴れやかな一瞬、加久井炭——一、剪枝鋏二、水指三、龍安寺四、うすゆき五、茶六、梅もどき七、豪傑八、風流の處刑——

涅^ね

槃^{はん}

西^に

風^し

釋尊入寂の日に吹く西風、そのあとさき
一週七日間吹く風をいふ也。これより
春めく。

鶯

毎朝、氣象通報を聞いてから朝の食事をする例になつてゐたが、女の人のアナウサーが報告する朝は、庭さきで鶯の聲をきくよりも愉快であつた。たいへんに美しい聲ではなかつたが、聲の奥の方に甘さが漂ひ、その甘さのなかにどこか子供ばいどしさがあつた。僕に暇のある午後三時四十分の氣象通報の時間は、わざわざ茶の間に出かけて行つて、南大洗から能登の輪島、信越、熊本の果までの氣象報告を聞くことがあつたが、それは一つには彼女の聲が美しいためであつた。

春の寒い朝に彼女は放送中、咳を二つし、風邪聲を出してゐた。すぐ近くの竹村俊郎に散歩の途中で行き合つて碌々話もしないうちに、菜の畠を隔てて大きな聲で、「彼女は今朝の放送で咳を二つしたが聞いたか。」と僕はだしぬけに云つた。「どうも風邪をひいたらしいな、咳は二つとも聞いた。」竹村がさう云つたので僕は安心して、家にかへると、竹村も咳を二つとも聞いたさうだと、何のことやら譯の分からんことを、僕は家の者に話をしてゐた。僕が放送に同情をもつやうになつたのは、僕が放送したにがい経験からであつた。流行

唄ばかりの晩の時間に、女中は市丸といふ女のひとの聲はつくり聲だと言つたが、旨いことをいふと思うた。しかし氣象通報の彼女の聲はつくりごゑではなく、市丸や勝太郎などといふ人の聲よりも人間らしい、生きてゐる聲であつた。

ひとしきり氣象通報の文句に「お天氣はまだ愚圖つきます。」といふ愚圖といふ言葉があつて、不愉快な言葉だと思つて放送局の人にたづねると、それは報告書にさう書かれてあるので彼女の言葉ではないといふことが分かつた。實さい僕はお天氣のよい日とわるい日とは、仕事のすすみ方に關係するほど晴天の日がよかつた。頭も輕快だつた。だからけふは一日曇りであるとか、雨はなほ明日までつづきませうとかいはれると、氣が重かつた。雨は今晚も續きますが明朝になると南西の風で晴になりませうといはれると、きふに元氣になり春の朝の美しさが眼に見えるやうであつた。實際、雨のふる日は女の人の顔いろに冴えたところがなく、子供でさへ皮膚が濕つて見えた。晴れた朝は書き物をしてゐてもびしびしと進んで行つて、雨の日はじくじくと考へることも、あと退さりするほど捗々しくなかつた。ただ、雨のふる夜なぞよく睡れるのは心が落着くためであらう。

この間、町を歩きながら誰か女の人が高い聲でしゃべつてゐるのが、どうも聞き覚えのある聲だと思つても、すぐ思ひ出せなかつたが、歩けば歩くほどその聲が町々からきこえて來るので、ははあ、氣象通報の婦人だわい、道理でよく聞きなれた聲だつたと、ひとりで微笑ながら歩いたことがあつた。同じい氣象通報の高橋邦太郎氏もだいたい慣れて來たが、依然素人くさいところがあつて、その素人めいた純な率直一方で打つかるところが、快よい感じをつたへてくれた。ラヂオでも文學でもそのままの木地で打つかることが、たとへ、旨さがなくとも聽く方になごやかな氣持を受け入れるので、やはり同じい道だと思はざるをえなかつた。ラヂオは聲の仕事であるが、やはり氣質の仕事であるべきであつて、氣質で打つかつた方がいい効果があるやうに思はれた。

定 紋

或夏の暑い日のこと、嘉村磯多君が青い汗を額ににじませて「不同調」の原稿を取りに來られた。原稿は読み返しさへすれば、いいくらゐになつてゐたから、嘉村君に書齋に通つて貰つた。午前の十一時ごろだつた。

その前に嘉村君から厚い原稿を見てくれと預かつてゐたので、それをも一緒に返した。こまかくぎしぎし詰込んで書いた原稿で、ひどく読みづらかつた。僕は句語の長いことを

注意したきりあとは何もいはなかつた。只、嘉村君がかへつたあとで、あの人も小説をか
くのかと多少氣味がわるかつた。悲しみに泌み透つてゐるやうな人の書くものは恐かつた。

暑き日や磯多がくぐる葛の門

かういふ句が口へのぼつた。

それからあと小説のことは一さいしやべらなかつた。或る年の五月、まだカジノ・フオ
リが浅草水族館にあつた時分に、僕も見物しに行き偶然に椅子のはじのあいたところに腰
をおろし、扱すこし落着いて見ると、となりに嘉村磯多君が背中をまるめ、頭髮を少しほ
やぼやにして見物してゐた。「たいへんなところで會ひましたな、こんなところに貴方も
來るんですか。」と僕も嘉村君とカジノ・フオリとの對照の不自然さを感じてさういふと、
「ひやあ、……」と言つて嘉村君は席をあげて呉れて、あとに何ともいはなかつた。

佐左木俊郎氏の告別式に、やはり椅子のはじが一つあいてゐたので、そこに遅れて行つ
た僕はそこそこに腰をおろし、氣をしづめてゐると隣で挨拶をする人があつた。見ると嘉
村磯多氏が膝の上に手をかさねて、何時かカジノ・フオリで邂逅つた日と同じいやうに畏
まつて座つてゐた。「あの方が佐左木君の奥さんですか。」と僕は白衣の痛ましい細身の
夫人をさしてたづねたが、「さうです。」と嘉村君は低い聲で言つてすぐ俯向いて、神妙に
してゐた。氣立の善い佐左木君のことを考へてゐると、新潮社の明るい應接室にゐて何時
も相手に不愉快をあたへない話振りを思ひ出した。このごろ國から古刀を一本携つて來た
が、刀といふものは氣のおちつくものですね、と僕にその刀を見ないかといふのであつた。
その内拜見することを約束したが、いまから考へると美しい刀身に心を向ける佐左木君と、
その死期とのあひだに僕は何か因縁して考へて見たいやうな氣がした。それほど佐左木君
の心も澄んでゐた時期であつたかも知れないのだ。死ぬ前には人に依つて趣味が豹變する
ことがあるからである。

それから後に有樂町の東寶前の建築中の通りで、ひどい風のなかで僕は嘉村君とすれち
がつた。嘉村君の作品が中央公論に出てゐた月だつた。「お旺んで結構ですね。」と僕は風
に帽子を取られまいとして手でおさへ、嘉村君は風呂敷包を大切さうにかかへて、お互に
一間ほど隔れて振り向きながら挨拶を交はしたが、嘉村君の低い聲は風の中できこえな
かつた。

嘉村磯多氏が亡くなり告別式にゆくと、中村武羅夫氏があごひげを生やし、それに剃刀
をあてる間もないやうな、やつれた顔でどつしりと坐り込んでゐた。嘉村君と中村氏との

間柄をおもふと、中村氏があごひげを生やしてゐるのにも深い友情が感じられた。

堀辰雄君と一しよにかへり山水樓で夕飯をたべ、堀君の嘉村磯多論と僕のと一致してゐることに氣づいた。堀君は嘉村君を褒めすぎるほど褒めてゐた。僕もさうであつた。何時も悲しいものと一緒に歩いてゐて、それが友達でもあるやうな人が嘉村君であつた。

呼 鈴

その晩も例に依つて晩酌をして早寝をしてつた。そして偶然に眼をさますと表門の呼鈴が鳴つて、人聲がして誰かが訪ねて來たらしい様子だつた。家の者も女中もまだ起きてゐたので、僕は床の中でもいいからお断りして呉れと云つた。僕は晩に酒を飲むので早寝をして誰にも會はない習慣になつてゐたから、大抵、僕のことを知つてゐる人は夜は訪ねて來なかつた。しかも今夜はもう十時に近い、いまごろ來る者はよほど親しい人か、さうでない人かの執方であらうと表の様子を床の中で聞耳を立ててゐると、どうも話聲のあんばいでは二人か三人づれか、或は四人くらゐゐるらしい容子であつた。三人から四人も一緒に尋ねてくるからには衆寡敵せず起きねばなるまい、——さう考へてゐると表に名前

を聞きに出た女中が這入つて來て、お客さまは五人様でございます。徳田秋聲、岡田三郎、尾崎士郎、徳田一穂、そのほかにまだお一人様がゐらつしやいますと、これらの作家の作品と名前を知つてゐる女中はすらすらと吃らずに云つた。

「ほう！これは起きねばなるまい。」

僕は着物を着かへて書齋に通つて貰つた客にあふと、徳田さんはけふは銀座に出て、ふいに岡田君のところを訪ね食事をして、近くまで來たからつい此處まで來たのだといはれた。あちこち歩いてゐられたやうに見えない、元氣なお顔の色であつた。

岡田君は横縞の粹氣な着物に、タテ縞の丹前羽織を着てゐたが、いかにも近くに住んでゐる人の風俗であつた。こんどは家が分かつたから時々訪ねるといつてゐたが、同じい大森に住んでゐても却々會ふ機會がなかつた。いつか文藝時評で岡田君が僕に一本打込み、僕もそれに應へたりしたこと古いことだから、そんな事はそんな事で済ましていい時分であつた。近くゐておたづねもしませんと、女房にさう挨拶をする岡田君は、僕にはないことを左ういふことも心得てゐる人だつた。

尾崎君は大島の羽織を着て不相變しやべらない間は、お溫和しさうにだまつてゐた。この間、或る喫茶店に行くと女の人が尾崎士郎さんをごぞんじですか。尾崎さんなら知つて

ゐるといふと、ちよいときれいな方ですねと云つた。實さい、尾崎君と會はないでゐると顔がきれいかどうか分らないが、向き合つて話をしてゐると却々端正な顔付をしてゐて、これが所謂、美男といふ顔だと觀察することがあつた。それに厭味らしいところがなく、却つて氣質的に得をしてゐるやうな無邪氣さうなところさへあつた。つまり吃音者にありがちな子供っぽい言葉づきから左うであつた。

話をしてゐるうち十一時になり、温かい春夜に近づいてゐる馬込街道まで送つて出ると、徳田さんは歩きたいからと言つて、自動車に乗られなかつた。けふ一日を出歩いてゐて疲れた様子も見えなかつたが、馬込から大森驛まではぶらぶら歩いても三十分はかかるし、老體ではありあと疲れがすると思ひ、無理にくるまを呼び停めてお乗りなさいといふと、やつと、ちあ乗らうかと乗られた。驛まで四人乗つて三十錢だつた。こんな廉い自動車は大森に住んでゐても始ての値段であつた。

歸るとこの前に見えたときに、一穂君が家の女の子のポケットの鍵裂きのつくるひを見て、これはよくつくらうてありますね、誰ですかお母さんですかと、若い一穂君が言つたさうであつた。あんなことをあの方が気がつくのでせうかと家の者が言つたから、若くても小説を書くほどの人は大抵のことは見てゐるし、すぐ眼につくのだよ、と、僕は一穂君も面白いところに眼をつけたものだと、思つた。よその子を見ても決して僕はそんなところが分らなかつた。

勳章

僕はいろいろな雑誌を寄贈されるが、それをきちんと揃えて押入の中にしまつて了ふ。一頁も読まずに。少しも雑誌の山をくづさず。——若家内や女中がその山を亂すと叱りつける、そのくせ読まずに一週間二週間経つて行く。その一週間二週間は毎日机で原稿を書いてゐる。次から次へ仕事が多まり金に變つて消えてしまふ。たうとう僕に暇が訪れてくる。何もしないで庭仕事ばかりする。そのうち庭仕事もなくなり全く何もしなくていい一日が来る。さういふ時に子供が風邪をひかないでゐることに氣づいて、先づたすかつたと思ふ。書齋から庭へ下りたり上つたり、子供が弾くピアノを聞いたりする。

僕は押入をあけ雑誌の山を書齋の疊の上に置いてどつかりとあぐらを掻いて、うすいは三十二頁の雑誌から、五百頁もある雑誌を上から見冊づつ眼を通してゐた。そして日が暮るまで大抵見てしまふ。中央公論、改造、新潮、文藝、行動、さういふ部厚な雑誌だけ

がのこる。あとの雑誌はやはり山のまま本小屋に入れてしまふ。本小屋は本の納屋で他の一さいの納屋でもある。

次の一日は朝から厚い雑誌ばかり読む、一日で読み了るとその翌日はさつぱりする。押入には一冊の雑誌さへ残つてゐなかつた。きれいな爽ぱりとしたものである。借を返したやうな氣持だつた。

雑誌を寄贈されたのは十四年くらゐ前であつて、僕が始めて小説を書いた年からであつた。それまで詩の雑誌のほかは一冊も寄贈されなかつたのである。そしてその十四年間續いて僕の寄贈される雑誌の數は、かぞへ切れなくくらゐであり、僕は毎月それを何とも考へずに暮してゐた。故友、芥川君が亡くなつた月の翌月から雑誌が急にバツタリ寄贈されなくて、奥さんはそれだけでも淋しい思ひをされてゐたと聞いてゐたが、その氣持もわかるやうであつた。文藝雑誌はともかく俳句雑誌も毎月五六冊貰ふが、お禮に何か書いて送らねばならないと心に留ながら、つい十年も経つて了つてゐた。俳句雑誌だけは何故かいつも氣の毒でならなかつた。

いまでこそ書店に立寄つて見る必要のないほど雑誌が送られてくるが、それが急に寄贈されなくなつたら文藝社會から見離されたやうで、心の傲りもあとかたもなく消えて、どんなに落伍者を感じるかも知れない、澤山寄贈されるので封皮を開くのも面倒に思ふことがあるが、誰も寄贈する人がなくなつたら本屋に行つて立ち読みするより外はない、春風秋雨の日はひと際さびしい思ひがするであらう。

僕が始めて少女世界に原稿を出して貰ひ、其雑誌の寄贈を受けた時はハトロンの封皮とともに机の上に飾つてゐたほど、名譽ある氣持であつた。二十五六の頃に北原白秋氏をたづねた折机の横に「中央公論」があつて紫のゴム印で「寄贈」と捺されてあつて、そのゴム印は雑誌の表紙につく勳章のやうなものであつた。當時、永井荷風氏編輯の「三田文學」もあつたし、「趣味」といふ雑誌も寄贈されてゐたやうであつた。文藝社會の地位といふものが、かういふ高級雑誌の寄贈を受けることによつて、僕に恐縮と羨望の眼をもつて北原白秋氏を眺めさせたのであつた。僕もこんなふうは大雑誌の寄贈を受けるとしたら、却々素晴らしい出來ごとだぞと思つた。

僕は屢々町の縁日に出て、この紫色の勳章を表紙に持つてゐる雑誌を購つて来て、ひとり暮しの下宿の机の上に置いて見て、扱、ばらばらと内容の頁をめぐつてから、又もとの表紙のあるところを出して、そして勳章を見てから又ばらばらと中の頁をめぐるのであつた。何と變てこな、そして極りのわるい名譽にあこがれてゐるところの、厄介極まる僕は

小僧であつたことぞ!

春の理髪店

理髪店で顔を剃らせてゐて友達の誰かが安全剃刀を使つてゐて、それを傍で見つてゐたことを思ひ出す。誰であつたか能く覚えてゐないが、安全剃刀は却て危なくて僕にはつかへないといふと、その友達は西洋剃刀の方がよほど危険だ安全剃刀でやり損ふことは絶対にないよ、とさういふ友の顔が安全剃刀で撫で廻してゐるうちにきれいに剃れて了つた。そんな便利なものなら僕も買つて使はうといふと、その方が剃刀より文明でいいよといひながら、友達は組立てである機械を解いて、新しい刃を一枚取り出し、また思ひ返してまだ古い刃は使へるなど獨言をいつた。

時々刃を取換へるのかいといふと、それだけの手数なんだといふ。では、古い刃はどうするとたづねると、棄ててしまふ。何處へ棄てるんだといふと、ゴミ箱の中へ棄ててしまふといふ。僕はさむくなつて友達の顔を見つめたが、彼は平氣で旅行なぞしてゐる時はどこへでも棄てるのさ、といつた。僕は益々寒くなつた。ゴミ屋は手袋をはめて小板でゴミを搔ツさらつてゐるが、どうかした紛れに指を切らないとも限らない、ことに旅行先で野山で棄てるのは危ないから止めたまへといふと、そんな心配をいち／＼してゐては何事も出来はしないよ、と、友達は恰も僕の暗愚を嗤ふやうであつた。

僕は安全剃刀をつかふことを止めるよ、第一その刃をどこへ打棄つても氣になるからやめた、と友達にいふと、慣れると何とも思はなくなるよ、と彼は再び僕の暗愚を笑ふやうであつた。

この友達は誰であつたらう。慥か旅行をしてゐた時か、僕の家へ客となつて泊つた人に違ひない、萩原朔太郎ではなかつたか。どうもさうらしい、夏、湯ヶ原へ一緒に行つた時のことではないか。——僕はそんなこと考へてゐる間にけふを、理髪屋にくる前までしてゐた僕の仕事を思ひ出した。

僕は庭に出て日南の縁臺の上で鬮のあたまを木鋏でちよん切つてゐた。その仕事が済むと、けふは鬮の頭を切つて一日暮したやうなものだと、可笑しい話のやうなことをした僕を笑ひたくなつてゐた。鬮はから／＼に干した國産のもので、朝、國から着いたくさやの

臭ひと味はひとを持つた、普通の鰯とはまるで異つた旨い干物であつた。頭を取ると鰯が上品になり鰯より少し上の魚に見えたので僕はひまにまかせて頭をちよん切つてゐたのであつた。鰯の顔は下品であつた。殊に眼が他の魚とちがつて美しくなかつた。鰯は眼の悪い魚ではないかと考へながら僕は二百疋ばかり、頭をちよん切つてゐるうち、凍蠅が臭ひをかぎつけて出て来るのを見た。僕の頭のうへでは既に梅の花が散り出し、垣根越しに西洋畫家がけふも柿畠の柿の木を寫生に出かける姿が見えた。鰯の頭も信心からといふがそれほど鰯といふものは輕蔑されながら悲しく生きてゐるものらしい。魚類といふものは能く見るとどんな魚でも悲しい顔をしてゐる。鰯は悲しみ亂れてゐるやうな顔をしてゐるのだ。

僕の隣の椅子に二歳くらゐの赤ん坊をつれた奥さんふうな人が坐り、赤ん坊の柔かい髪がまるで濡紙のやうに刈られてゐた。大抵の赤ん坊は泣くものだが、この赤ん坊は却々泣かない、女の人の手が赤ん坊を確り擡いてゐるが、赤ん坊は苦しくないかと思ふくらゐである。女の人の手くびがいやに艶めかしい。理髪店で女の人を見るとお醫者のところで會つた女の人のやうに、どうもなま／＼しい。女氣のありさうもないところだから、さう見えるのかも知れぬ。理髪店とか醫院では女が女特有な烈しい匂ひを發して来るやうである。

僕は顔を剃られながら唇のわきを剃られると、いつも、どういふものか鳥渡舌を出して見たい氣がしてならなかつた。舌を出せば舌に剃刀が當るかも知れない、そんなことは甚だ危ないぞと思つてゐても、ちよつと出して見たくてならなかつた。一度かう思ひ出すとそのことばかり氣になり、舌を出すまいぞ、出すと切られるぞ、といふふうな神經上の問題をくり返してゐるうち、難なく剃刀は唇のわきから髭の方に廻つて行き、僕はこれで助かつたと思ふのであつた。一體に僕といふ人間は絶えず詰らないことを考へてゐないと、妙に口淋しいのである。

僕はいつも中一日を置いた午後二時ごろに髭を剃るのが、めんどろな日課になつてゐた。勤人は朝剃るが僕は大きい午後から外出するか、訪問者がある關係上、午後二時になると剃ることに定めてゐた。剃るごとに出来るだけきれいに剃らねばならず、剃るごとに倦きもしないできれいにあたる目標を立ててゐることが可笑しくてならなかつた。顔といふものは髭をあたるごとにちよつとした新しい感じがあつて、その新しい感じに釣られて叮嚀にあたり美しく剃らうと考へたりするのであつた。よくも飽きないものだが顔

をあたることに飽いてしまつたら、これは人生にも飽いてしまふほどの重大な問題になるらしいのである。それに人より美しくない顔を持ち、顔に自信のない人間ほど僕のやうにきちんと剃るものらしい。その點、女よりも男の方がよほど身だしなみがよくなつて來てゐるではないか。女で顔をあたらないで毛だらけの人はゐるが、大ていの男はせいぜいで二日目くらゐが無性してゐるくらゐのものであつた。

さういふ譯で僕は何千度か何萬度か知らないが、いつも果敢ない望みをもち、なるべくきれいにあたらう、一昨日よりもよく剃らうといふ淺猿しいことを考へ、そして飽きもせず剃刀を頬の上に馳らせるのである。自分であたつてゐる時は例の舌を出すことを考へたことがない、では床屋でなぜあんなことを考へるのだと自問して見ると、なほに、ありや床屋だからさ、ちよつと巫山戯て考へて見るのだと、かういふふうで考へるのであつた。或ひは床屋の主人にあまえてああいふ考へを持つのか、それとも考へることがないからああいふ考へを持つのかも知れなかつた。もつと能く考へると床屋では徹頭徹尾顔を剃られてゐるから、それに支配されて外の空想が起らないのかも知れなかつた。

僕は理髪店を出ると、煙草を一本ふかしながら頭を少し先に出して、家にかへつて行つた。理髪店を出た人間はみんな刈られたばかりの頭を、少々先の方につん出して歩くやうである。これはどういふ譯かわからないが兎も角、それは事實だから仕方がない。

理髪店を出て町の中を歩くよりも、僕の住んでゐるやうな田舎の桃や楓や山吹のさいてゐる百姓家の前を通つて來るのは愉快なものである。頭の軽さがちがふのだ。ちやうど餅に黄粉を振りかけるやうに頭の上に山吹や桃の花粉をふりかけられるやうに、田舎の春はいまが闌けかかつてゐるからである。昔は田舎の理髪店で香水の霧を吹きかけてくれたものであるが、もはや、ああいふ馬鹿な真似はしないやうである。それより外に出て山吹の花粉をあびた方がいいのだ。

綬鷄日誌

四月二十五日 火曜。十五年前にもとめた鯉轍をたてた。風雨に洗はれてやつと鯉の形をしてゐるだけである。風は烈しいが暖かいので庭の縁臺に敷物をしいて、支那の枕をして少し睡る。睡りながら詩だか何だか分らないものを作る。

萬福寺境内を歩いて今年始めて、蛇を見る。少し大きすぎる奴まんまるく日南にとぐろを巻いて、自分のからだにあごを乗せてぬくぬくと墓石の上に、満身の日光をあびて睡つてゐた。子供のやうにそのあごつきが可愛かつた。蛇はいろいろの動物のなかで一番用心がよく、温かさが落着いてから穴を出るものらしい。動物のなかで一番遅く穴を出る奴だ。口など穴から出たばかりらしく鮎の口のやうに黄味をおびてゐて蒼白かつた。驚かさぬやうにそつと立去る。

北原白秋氏から「白南風」を貰ふ。背皮を黄のいろにそめ、きちんとした歌集。瀧井孝作氏から「慾呆け」を貰ふ。手をこめた装幀にて検印が立派である。碧童氏の刀を味ふ。佐藤惣之助氏の「魚心釣心」を貰ふ。佐藤君の装幀であるまいと思ふ。固い感じがする。けふは書物を澤山に貰つたが装幀が大切だ。考へぬいても仕上りでしくじることがあるからである。僕はいつもしくじる。装幀の妙味はできるだけちみに材料を殺すことである。紙と文字より外に用ゆべきではない。色さへ考へものである。北原氏の「箱」はよい、瀧井氏の「箱」はどうかと思ふ。「箱」は一番大切であつて表紙よりも金をかけ、ていねいに作るべきである。「箱」は支那や日本が世界の工藝品でも秀でてゐるから、「箱」だけはいいものを作りたい。

晩酌中にきふに勝手口がさわがしくなる。誰かが何か生きものを捕まへて來たらしい、食卓にゐた子供たちが急に馳け出して勝手にさわいでゐる。間もなく女房が來て、大工さんが鳥をつかまへて持つて來たといふ。どんな鳥かといふと風呂敷に包んであるから分らないが、上からそつと手で撫でて見ると鳩ぐらゐの大きさがありませんと云つた。

勝手に行くときと大工の佐藤君が自轉車を乗りつけて持つて來た鳥は鶉によく似てゐるが圓く肥つてゐて、鳩ぐらゐの大きさがあつた。今し方、仕事場の硝子戸を破つて立ち込んだから、お宅のみなさんが生きものが好きだから持つて來たといふ。それは有難う。しかしこれは椋鳥にしては大きいし、麥うづらでも大きい、ともかく籠に入れて見ると、喉がコア色に焼け、尾が短かく、羽根に鶯色の紋があつた。晩酌後に小鳥屋に行つて聞いて見ると椋鳥でせうと云つた。

ミヤコ・キネマの前をとほると千恵藏の「堀田隼人」がかかり、伊藤大輔が監督をしてゐたので、見物した。

四月二十六日 水曜。昨日の鳥は椋鳥でないらしい、女房が小學校に行つて小鳥の圖鑑を見て來たが、圖鑑に出てゐなくて分らなかつた。理科の先生が見に行つてやると云つて

午後に見えたが、支那産の錦鶏鳥であらうといはれた。それもまだ雛どりであるらしい。麻種、麥、あはなど與へたが急に餌づきをしなかつた。

中野鈴子さん見えらる。中野重治君の妹さんで一田アキといふ別の名前を持つてゐた。これで二度しか會はないが、けふはゆつくりして行くといふ。直ぐ親しい氣がした。

福士幸次郎君と竹村俊郎君と来る。竹村君は近いので家にかへつてあとから來ることにし、福士君と快飲しようと思ひさせてゐる間に、僕は湯にはひつたがそのあひだに福士君がゐなくなつた。六時半まで待つたが歸つて來なかつた。風のやうな男である。

鈴子さんが離れに泊り、竹村君と驛に出て飲む。

桑原武夫君から「赤と黒」の後篇を貰ひ、國元から刺網鰯を送つて來た。

四月二十七日 木曜。家の者、子供、竹村の奥さん、鈴子さん皆で本門寺のおせんぶの植木市を見に行く。れいの錦鶏鳥は腹が減つたのか元氣がない。

版畫家深澤索一氏來訪、隨筆集「文藝林泉」の表紙の色その他木版の仕上りを見る。先づ上乘の思ひがした。深澤氏も熱心になつてくれた。

午後、理科の先生再び來訪、錦鶏鳥にしてもやはりひなどりらしく、間違つたことを言ふとご迷惑でせうから、動物園に行つてたづねたらいかげすと言はれる。ひづめが脚にあるところから見ると、鶏の族らしいと考へるといふ。電話で動物園にたづねて見るとわかるか知らと考へた。とにかく雷鳥より大きく鶉よりずつと大きい、ちやほ鶉より小さい奴である。餌を少し食べたらし。

「加賀手毬唄集」を読む

行春や版木にのこる手毬唄

「白南風」を読む

白南風や背戸をぬければ杏村

鈴子さん歸宅。兄さんに面會の折は、よろしく傳へるやうに頼んだ。

庭は新緑あざやかである。京都の寺々はいいだらうと考へ、終日庭に出てあそんだ。掃けば落花の屑だらけである。椿、山吹、八重ざくら、錦木の青い花の粉、もみぢの糸屑のやうな花、あせば、そのほか木の芽の莢や皮など、春闌けて晝深い。

四月二十八日 金曜。小鳥のことを動物園に行つて聞いて來るといひ、家内、子供をつれて出かける。子供ら一時間だけ授業を早引きをして出かけた。

近所の竹村君と本門寺の植市木を見に行く、去年とは植木がすくないやうである。家にくる植民も出てゐてあんないをしてくれたが、やつと下草五株を買うただけだ、黄楊を一本ほしいと思うたが、大物で動かさないやうな氣がする。植木をほしいと思うたとき何時も小遣が貧しい。

歸ると動物園に行つた連中がかへつてゐて、園長の黒川さんに會つて話をするとすぐ分つたと言つた。

小鳥は支那の産で綬鶏といふ珍しいもので、大綬鶏と小綬鶏の二種類ありますがお宅のは小綬鶏の方でせう、禁鳥であるから滅多に民間に飼はれてゐない筈です、氣の小さい樹の下かげが好きな鳥ですが、日本にも野生の綬鶏がちよいちよいゐりますが、大森あたりにゐるとは初めて聞く話です。多分、餌づくでせうから、やはり鶏のやうに地面に金網を張つて飼つたらいいでせう、滅多に啼かないが、啼くと大きい叫びごゑで、ちよつと來い、といふふうに聞えるとも、黒川さんはいはれた。

小鳥は蛇よりも鼠が一番大敵で、金網を張つて地面の上で飼はれるならば地下一尺はコンクリートで固めた方がよろしい、私の理想としては三尺にしたいのですがさうはゆかないので動物園では二尺にしてゐます、鼠は雉子くらゐな鳥でも血を吸ふために、しめあげ

るから氣をつけられた方がいい、鼠は巧みに地下に穴を掘つて襲うてくるのですと、黒川さんが話された。とにかく珍しい鳥が迷ひ込んだものである。

小麥と麻種を少し食べたらしいが、入れて置いた菜つ葉は啄ついたあとがなかつた。

津村信夫君來る。夕食後、少し散歩をする。

四月二十九日 土曜。綬鶏といふのは勳章のやうな名前前で、奈何にも支那の鳥らしい名前である。大言海を繰つても出てゐない。離れに入れてなるべく靜かにし、誰も近づかないやうにしてゐるが、麥を少し食べたらしく、籠のなかを歩いたり止り木に登つたりしてゐる。

午後、いつも庭さきから見える隣りの寺に、けふも十二くらゐの女の子と、七ツくらゐの女の子と、その母親らしいのが新墓にお詣りに來てゐた。

去年の春から殆んど毎月のやうに見る人々である。彼女等が去つてからどういふ墓か知らと、境内にはひつて僕の書齋の見えるあたりに出て見ると、新しい塔婆に赤い風船がくくりつけてあつた。始めて子供の墓であることがわかつた。亡くなつたのは彼女らの妹らしいのである。その赤い風船がそよ風に動いて哀れだつた。

町に出て活動を見てみると、休憩時間があまりに長いので子供らは蝙蝠傘をさして、音楽のボックスのうしろを蓄音器にあはせて巫山戯て踊つてゐる。

詰らないので出ようとして下足札をわたさうとすると、ペンで活字のやうに書いた美しい女文字の五六枚もある長い手紙を読みながら若い下足番が旨さうにどら焼の湯氣の立つのを食べてゐた。

春雨は本降りになり夜までつづいた。

四月三十日 日曜。大工の佐藤君が綬鶏をつかまへて持つて来た晩に、二聲ばかり叫び聲をあげて啼いた聲は、よく考へると動物園長の言はれるやうに鳥渡来イといふやうな啼き聲であつた。今朝七時ごろに手水をつかつてゐると隣りの寺ざかひの藪の中で、綬鶏によく似た鳥が五ツ聲ばかり啼いてゐたが、樹の上で啼いてゐる聲ではなく、地面に這つてゐて啼いた聲のやうだつた。

この聲なれば一と月に一遍くらゐ聞く聲で、夕方薄くなくなつてから啼くので五位鷺だと思つてゐたが、いまから考へると綬鶏の聲に違ひなかつた。澁谷の西郷山にかういふ鳥がゐることであるが、大森にも少しはゐるのであらう。——大工の佐藤君の仕事場

は、大森谷中の濕氣地で家並は込んでゐるが、高臺の松林などに近いせいで迷うて立つて来たものらしく、夕光りのした硝子窓の向う側につきぬけられるとでも考へて、勢ひ餘つて破つて立ち込んだものであらう。

その聲はぎやあといふ響を持ち、夕方はとても寂しい聲である。啼く場所に行つて見ても一遍も姿を見せたことがなかつた。あれが綬鶏といふ鳥であつたのかと、思った。食物をたべてゐるらしくけふで六日目になるが、やはり元氣で止り木と砂をしいた籠の底を往反してゐる。人が行くとばたばたするが、栗鼠の籠とくツ付けて置いても驚かないやうであるから、生きものに親しめるために他の小鳥の籠も近づけておく。

校正について自嘲

春寒や渡世の文もわきまへず

途 上

わらんべの涕もわかばを映しけり

「婦人の友」の佐近氏見え、「婦人の友」の巻頭に掲げた發句の潤筆料を置いて行かる。發句で稿料を貰ふことが屢々であつたが、小説や隨筆の稿料と違つて一層の淨財のやうな氣がした。昔は短冊色紙よりも寧ろ句の巻の選料を取つてゐたものらしく、一人五句金十

錢の入花料は明治中葉までそれが實行されてゐたらしいが、このごろでは舊派の入花では三十錢くらゐであらう。

五月一日 月曜。朝の郵便で未知の人から書留が来て、色紙を二枚書いてくれるやうに依頼して爲替券參圓を封じてあつた。自分はあなたの文章が好きだといふ意味も書き添へてあつたが、原稿ならば米鹽の代であるから書くけれど色紙短冊だけは、賣らぬ心を決めてゐた。色紙を送り返し爲替も返したが、愛讀者は有難いものであるが、かういふ爲替の送り付けは憂鬱になつて不愉快である。この間は横濱から金壹圓を封じて短冊染筆を依頼されたが、もとより斷つた。自ら樂しみその道に清く生きようといふ切なる願ひを持つものが、わづかな草履代でうごくとき考へるのは間違ひであらう。貧書生がバツトを十個紙につつんで短冊をかいとくれと頼んで来たときは私は進んで二葉書いて與へ、「此の短冊筆者實證候也」といふ極書までかいて手渡したが、それはこの貧しい學生が窮して賣るときのことを豫想して與へたのであつた。

これまでは石の手洗鉢を送ると言つて信州の人が短冊を持つて行つたり、借錢の督促をするやうに一ト月に一ぺん宛染筆を請求したりする人があり、送り付けの短冊だけでも何時の間にか溜つて處分に困つてゐた。色紙短冊も座興と同じいものであつて、書きたい時はいくらでも書けるものであるが、對手にこだはると却々書けないものであつた。

四年前に美しい或る會社員の奥さんが見え、先生と同じいお國の生れだと言はれ、私も朝きげんのよい日であつたので、心よく短冊を書いてあげたがそれから今年まで、折々能登のこのわたを送つて來たり自らうにを持つて見えたりしてゐて、よき人に書いた喜びをそのたびに感じる程であつた。この間も、女房の友だちが來てお酒を携へて書かされたことがあるが、何かお可笑しい滑稽さがあつてよかつた。書く方もらくに書き、書かせる方もらくに書いてこそ短冊にもうまみが沁み出るのであらう。

「現代」の窪田氏來訪。

夜、驛に出て五月人形鍾馗をもとめ、明日の遠足のために子供へチョコレートを買ふ。

五月二日 火曜。綬鶏は大して餌をむさぼり食へるといふほどでもないが、少量あて拾ひ食ひをしてゐるらしく不相變元氣である。少し瘠せたやうに見えるが濃い雉子色の圓い紋を持つ羽根は、まるまるとしたからだによく似合つてゐて美しい。この鳥はおもに鶉に似たよく肥つた圓々とした背中を眺めるものらしい。背中といふものは人間でも立派な廣

さを持つてゐるもので、婦人の背中など實にからだの中で一番立派なところである。

上泉秀信氏の「村道」を読んで、野心なんか見えない柔らかい作品だと思つた。あまいところがあつて作者もそれを知つてゐるところがよく、脚本といふよりも小説としても見られると思つた。山を好むといふことは脚本では書き分けかねるものである。かさだかになるからである。僕はこの處女作をよんで今日の温かい氣候を、作品のなかからも感じた。あとの一幕はいらないと思ふ。

この作品には詩のやうなものがある。詩といふものは詩人ばかりが持つてゐるものでなくて、よき文學をつくる人にはみんなあるのでないか。「村道」の初々しい筆觸には作者の心持がやさしくにじんで、詩の波紋をゑがいてゐる。

「帝大新聞」の田宮、花森二氏訪問。

五月三日 水曜。けふ始めて綬鶏の籠を庭木にかけて、朝日の光をあびさせた。この間から離れに置いて籠になれさせたから、ちやうど今日で九日目である。水を入れてやるとすぐに飲むやうになり、麻種が一番好きであるらしいことも分つた。

庭木につるして見ると品のある野趣があつて、見ごとな大きさがあつた。外の緑が久しぶりで眼にはひつて來たので、籠の目にくちばしを入れてやきもきしてゐたが、午後には落着いて來たらしかつた。しかし綬鶏といふ名前は言ひにくいので、「とり」と言つて見たり「支那のとり」ともいひ、更めて綬鶏ともいひ直して見たりして、みんな呼びにくがつてゐた。

夕方、大工の佐藤君が來てこの間の鳥は何鳥でしたか。そして餌づきをしたかと言つたから、あれは珍しい支那の鳥だつたから、君は酒が好きだから酒をあげようといふと、酒なんぞはいりませんから何か仕事を出していただければ結構です。そんなに珍しい支那の鳥なんですか。支那から立つて來たんですかかと云つた。まさか支那から飛んで來たわけではないが、このあたりがちよいちよいあるらしいのだと答へたが、佐藤君は籠のそばへ行つて自分がかまへたとは思へないらしい顔付で、珍らしさうに差し覗いてゐた。

とにかく最つと大きい籠があるので遅いランチを食べに、竹村君をさそひ、銀座のオリムピックに行つた。鳥籠をさすのには芝の巴町にゆけばあるだらうと、愛宕下の骨董店を十五六軒覗いてゐる間に、高さ三尺の金網の鳥かごを見付けそれを持たせることにした。すつかり疲れたので放送局の多田君をたづね、暫らく憩むことにした。

局を出て愛宕山の女坂を下りて行つたが、女坂といふ名前が氣に入り發句につくらうと

考へて見たが、一句も浮ばなかつた。

多田君と三人で何とかいふ喫茶店でお茶をのんでみると、内部が明るすぎるせゐるか最うすつかり夏の氣持であつた。家にかへつて綬鷄を籠に移すのが却々容易ではないぞと、そんなことがもう氣にかかり出して來た。

繪畫と批評

文學者は畫について素人であるから、素人といふものの批評は面白くて變つたところがあるからといふので、——そんな理由で屢々私は展覽會などの批評を頼まれることがあつた。假令あなたが畫がわからなくとも、あなただけの解るものでさつと一と通り見てから、批評して貰へないかといはれると、私は畫の批評が益々出來なくなつて了ふのである。映畫などにも素人の私をつかつて批評せよといはれると、いつも私は見當ちがひのことしか書けなかつた。肝心のめききが利かなくて誰々は美人であるとか、美人といふものは東西を通じてどこかに白痴のやうな睡たさがあるものだとか、そんな詰らないことしか喋れなないのであつた。

畫は子供が好きなやうに大人の好きなものである。文學者といふものは畫の内容のやうなもの、畫にあらはせないものを表はすための存在として考へて見ても、文學者が畫がわからないといふことはない筈である。そんな文學者なら文學者を廢業するがいい、だが、私はどう考へて見ても解る畫と解らない畫と二タ通りあつて、解る畫はこちらでも努めてわからうといふ心がけがあり、解らない畫はてんでわからうといふ氣持をさへ持たないのである。畫なんかわからなくとも不幸とは思はない、畫のわかる人からいへば畫のわからない人間の生活がそれだけ狭められてゐるから、あるひは不幸だといふかも知れないのだ。しかし好きでもない畫を澤山に見飽きてゐるといふことは、凡そ無駄なこととしか思へない、畫に冒徳者があるとしたら畫ばかり見て畫をみんなわかつてゐながら、それでゐて畫の本物がよくわからないと同じである。描かれたものしかわからず、その生活の微妙さをもわからない人間が年中畫ばかり見てゐるいて、季節季節の美術批評をしてゐたつて何になるものか。

映畫なども年中見てゐると頭がわるくなる。よき秀れたものを一ト月に二本も見て居れば澤山であつて、わるい映畫を見つづけるといふことは何にも頭をこやしてはくれないのだ。——がらくたの展覽會場をぐるぐる廻るよりも、誰かのよい、畫を終日しづかに見て

ゐた方がどれだけいい事かも知れない。氣持が進歩するといふことは物を見入つて、それを掻きさぐつて自分のものにする事だ。ガラクタ畫を百枚見てあるいたあとに何が残るか。展覽會場のよどんだ不健康な空氣からのがれて、そこに立たるときほど自然が美しく爽やかに見えてくることがない、人間の感情がごちやごちや額ぶちの中で闘ぎ合つてゐるのを見ては、全く疲れざるをえないのだ。よき畫の靜かさはああいふ會場のなかにあつても一層靜かに光つてはゐるものの、その光の何と悲しげにも見えることか——さういふ意味で、よい畫ががらくたな畫のなかにあつて嘆いてゐる状態を見て、詩のやうなものを感じるのであるかも知れない。

私はまた展覽會の會場で、美しい夫人や令嬢や女畫家などが急に前にあらはれたり、横合から顔をさし出したり背後でささやいたりしてゐるのを見ると、畫のなかの女より實際の女といふものの美しいのに驚く。いくら藝術だとか何とか言つても、生身の女性といふものの手強い魅力には實さい感嘆せずにはゐられないのである。さういふわけで僕は傍見をして畫なんぞ見ても見なくともいいやうな散文的な氣持になるのである。かういふ淺猿しいといへば果敢ない僕の氣持には、たとへ、藝術を大切にしなければならんと思つても駄目になつてしまふ。かういふ私などに全く畫なんぞ解らない方が幸福である。

私は畫をほしいと思つたことがない、いま生存して居られる高名な畫家の畫など全くほしいと思つたことがないのだ。有名な横山大觀氏とか竹内栖鳳氏とかの市價がどれだけ高きにあつても、僕の書齋の床の間にかけて、日夕、その畫を眺めて仕事をしようなどといふ氣は、ゆめ考へたことすらないのである。それより無名であつて百年くらゐ經つた拙い俳人の俳畫とか句讀をした古掛物をかけてゐた方が、どれだけ親しめる氣持になるか分らない。殊に生活苦のしみ出た發句や俳畫をかく俳人のものになると、所有してゐる愛情からも、どれだけ太平な氣で眺められるか分らない、一幅何百圓もするところの、それは只旨いといふだけの眞に迫つてゐるといふだけの畫なんぞを眺めてゐるといふことは、もはや現代にあつて惡趣味であつて詰らない俗物の弄びとしか思はれない——さういふ高金を支拂ふ階級にのみ左ういふ畫幅の流行が行はれるだけであつて、我々の生活とは少しも關係のない徒事にすぎないのである。我々が藝術の喜びや幸福を受け入れるには、すくなくとも我々の生活苦に比較的に親しいものであり、我々はその藝術によつて尠くともほつとした氣持になるものであつてこそ、我々は作品によつて喜びを感じ幸福を感じるのである。たとへば我我は二流か三流どころの賣立會で、眞黒に焦げた佛畫か何かを手に入れたとする、その佛畫が煤でよごれてゐるなかに仄かに佛の顔が浮んでゐて、塗金のやうな怪光を

もつた法衣の襷や皺がやつと分るくらゐの、さういふ佛畫がずつと我々の趣味に近いのだ、神経を怠ませるし、碌でもない市價なんぞに煩されることがないのである。市價は子孫を迷はせるし畫を味ふ上にさもしい物質的な支配をさへ感じさせるのだ。さういふ物を床の間にかけてをくなどといふことは、そして絶えずその高金である市價を頭に置くといふことは俗悪下賤なことがらである。併乍、あらゆる意味で物質生活が馬鹿にならないといふ目標にある近代では、かういふ何百圓とか何千圓とかいふしろものを所有し、日々、これを樂しむといふことも或ひは壯烈に近い莫迦々々しい面白さであるかも知れない、私自身では近代の畫家のものなど、かういふ觀照のもとに愛しようといふ氣持にはならないのだ。拙くとも先づ百年も経つてゐたら安心して見られる——いま生きてゐる人の畫を見て樂しむといふことは白々しい好みであつて私は嫌ひだ。であるから進んで私は畫をわからうとしないのである。

いろいろな畫家の作品を持つてゐて、それを日ごとに取りかえて眺めてゐる人の心持は分らないのだ。好きな一人の畫家の作品ばかり集めて愛するのはわかるが、傾向のちがつた作品にそれぞれ好みを分けてゐる人は觀照家の資格さへ持つてゐないのである。天下にどれだけさういふ人がゐるか分らない。

藍染川

本郷と谷中高臺にはさまれた根津八重垣町の谷間に、ひとすぢの溝水が池の端に向いて流れてゐるが、それが藍染川といはれてゐた。お齒黒色の沈んだ水は水であるよりも、厚ぼつたい羊羹のやうに動かないドロドロの液體になつて重なつてゐた。ところどころに紫水晶のやうに光つてゐるのは石油や重油が流れてゐる證據で、それが虹の繪をえがく外は、正確に空のいろを映し出してゐるほど水底が眞黒によごれてゐた。

折釘や古靴や石炭箱やトタンや石躰りの硝子玉や、あらゆる鐵や陶器や木屑が泥とボロ切れと鉋屑とで編まれた底の方に、この世ながらの痛ましい古沼をこしらへてゐて、そこだけは暗府の氣味わるさを湛えてゐた。泥水は重い垢と煤とからなる汁粉のやうな鈍い流れを、終日流れてゐてもどれだけでも進まない速度で、この都の眞中の大下水に通じてゐたこのドロドロの水底にうごくものは一疋の虫や雜魚もゐなかつた。鐵の腐れた悪い或る部分、絶えず洗濯屋から注ぐ石鹼水や、自動車舗道からそそぐ油臭いぎらぎらした下水などが、さらに凡ゆる家庭から注ぐ様々な惡臭のある排水をまじへて、そしてそれらは浴場か



らそゞ熱湯と石鹼と女くさい下水の夥しい流れに壓されながら、ぶつぶつした泡や皺をつくり、一種の液體をかたちづくりながら板の橋の下や、家々の格子戸を映しながら、どつしりと落ちてながれて行くのであつた。流れてゆくといふよりも動いてゆくといふのが適當であつて、そこに一つの石を投げて見ても、決して水の輪はせまい溝川一杯には擴がらないほど、水の層に食ひ入つたゴミの密度が濃かつた。例へば突然に注ぐ下水の音を聞いて見ても、それは老人の咳のやうに力のないごぼごぼした音響であつて、決して快活な水の音の健康さが聞き取れなかつた。

その溝川は私の部屋のすぐ窓下にあつて、私が窓の方にゆけば私の顔をうつし出し、私が外出のために着換えをすればその姿をうつし、そして私が古帽子をかぶればまたその古帽子のかけを、はつきりその鏝の折れたところまで映し出すのであつた。最後に障子をしめると溝川のうへは手帕でつつんだやうに眞白になるのだ。勿論、溝の向ふ側は往來になつてゐて、溝ぎわを歩く人だけが逆さまに縮まつた影をうつして行くのだが、特に女の人の着物にある赤い色は少し暗みをおびてゐるが、變に美しい古い繪を見るやうな感じであつた。私はよく窓先から煙草の吸殻を投げて見て、それが小さい白い帆を立てながら煙をのこしてゆくのを、新緑のころは特別な哀愁をもつて眺めてゐた。凡ゆる下宿生活をしてゐるものにとつては、この新緑のころにつかまると金使ひが荒くなり貧乏になりそして戀愛がほしくなる病ひをわづらうのが常であつた。扱、僕は先刻閉めた障子の内がわから書いてゆくと、部屋から出るとすぐ階段があつてそれを下りるとれいの溝川の板橋に出て、それから八重垣町の通りから上野廣小路に抜けるのであつた。廣小路から電車に乗ると日比谷公園前で降りて、若葉青葉の間を取りいそいでつきぬけると、東京地方裁判所の地下室の入口の受付で、その日の仕事の割宛を貰ひ、用紙を貰ひ、さらに地下室の階段を這ふやうに下りて行くのであつた。私はそこで午前九時から午後四時までかつきり七時間かかつて墨筆で判決の寫しや公判始末書をうつすのであつた。その筆耕の仕事は七時間のあいだに四十枚くらいかけるが、それは一枚二錢にしかならないのであつた。例令ば私がいま假りに一枚十圓の原稿をかくとすれば、五百枚かかなければ十圓にならない筈であつた。併し私はその一枚二錢の仕事が甚だ愉快であつて三十何枚かを書いて、元締の方に渡すとまだ夕方にならない日比谷公園に出て、その緑のかけにあるベンチに腰をかけて煙草を喫み、あくびを一つし、散歩する人々を眺め、扱また立つて電車道に出てゆくのであつたが、私は若葉青葉の木々を見るよりも、私はその日に書いた筆耕の枚數がその日が三十七

枚だとすれば、明日書く筈の分を加へると何々の高になり、それを金に換算することを楽しんでゐた。ふしぎに、どんなに急いでも一日かかつて四十枚以上にならずに、いつも三十七八枚止りになつてゐたところを見ると、私の筆勢はそれだけに決つてゐるものかも知れなかつた。私は十日の餘りも書きつめにしてゐる金高をかぞへると、私の生活が社會的にきちんとして行く筈のものを豫想することが愉快であつた。さうすることによつて潔癖を満足し、誰からもいやな顔を見ずにあることを何よりも喜んでゐた。私の先祖や父母たちは借金はきらひであつた。それをしないで暮した人々であつたから、それが私にいつの間にか借金をしてはならないといふ風に教へてくれてゐたのであらう。

私は新緑の木々など問題でないやうに書いたけれど、朝、地下室にはいる前に通り抜ける日比谷公園の新緑と、夕方早めにかへる時に眺める新緑の色とが、まるで違つてゐる。ただけは感じてゐたのである。朝は少し寒氣をふくんだ緑は、それ自身が喜んでゐるやうにさわやかで薄荷草のやうに眼にうつつてくるけれど、夕方は黄味のある若葉が少しくたびれて、日の光りにあぶられ過ぎてゐるやうにさへ見えた。私自身が夕方すでに夥しく疲勞してゐるやうに、かれらも一日のそよぎにつかれてゐるやうでさへあつた。私は電車に

乗つて乗換えるところで乗りかえをし、そして廣小路で下りるとのろのろと池の端から八重垣町に出て、れいの溝川の見える窓の障子を内がわから開けるのであるが、その時にも正確に夕方の時間に移つてゐて、水の面は藍ばんだ光で一杯になり、もはや家々や人間や私自身の姿をうつさずにゐた。只、白っぽい光がこもつてゐてそれが何時までも、たとへ、日がすつかり暮れきつてゐても光だけは消えることがなかつた。諸君はさういふ水面をただ光つてゐるだけのものとして見すごすことができるか、——私はいつも、からだのところが痛い人のやうに少し顔をしがめ窓さきから、それを何遍も同じい夢を繰り返して見るやうに、眺め入るのであつた。そしてさういふ心構えはいつの間にか私自身の生活を、私がどういふふうになら後に組立ててゆくかについて思ひ惑うてゐるやうであつた。

夜がくるとこの藍染川の水の面に、家々の灯びが映ることは勿論、星の屑、軒燈などがうつつてゐた。私はこの溝にそうて、裏町つたひに池の端七軒町に出るまでに袋小路や長屋の路次や、片側町になる屋敷裏などを歩いてゐると、ポロ切れ、焼魚、錢湯の匂ひにまじつて烈しいコロホルムの香や石炭酸などの臭氣におそはれ、それが乳くさい赤ん坊

や、女の匂ひに合せた白粉の匂ひがし、驚いて歩みを止めると暗いところに女が立つてゐたりなぞするのであつた。そのほか子供を叱る女のとがつた聲や、鼻をかむ音や、勝手に茶碗類を洗ふのや米をとぐのや、酔つばらつて小唄をうたふのや風琴をひくのや、疊の上を掃いてゐるのや新内をけいこしてゐるのや、それらあるとあらゆる人間生活の音といふ音が一つあての家の窓から聞こえ、子供といふものがいかに騒々しい生きものだか、女といふものがいかに能くしゃべる人間であるか、また男といふ男はどこまで下品に出来上つてゐて始末にわるい動物だかを、つくづくこの裏町で感じるのであつた。曲つたり行き當りになつたり唐突な抜け道から、急に明るい大通りが見えるかと思ふと、こんどは不意に雨戸を閉め切つて灯を消した黙んまりの家がならんで、家々の裏手は空地になりそのまんなかに水溜りがあつて、乏しいながらも悲しい明りを見せてゐるのがあつたりしてゐた。風景は凡て悲しく、凡て汚なく重々しい石炭色に沈み込んでゐるのである。

七軒町の溝をこえた十軒ばかりある長屋のなかに、私の遠縁の家があつて、毎月私はそこに幾らかの學費をとりに行かなければならなかつた。それは國元からの指圖で私のやうな人間に金を一遍に持たせることをしないで、この長屋の家にあづけてあるのだ。私は自身のおづ月の終りには金をとりにゆくのであつた。この遠縁の者は相當以上に銀行の預金があるに拘らず、わざと長屋にくすぶつて地味にくらしてゐた。いはゆる金を貯めることの面白さの忘られない人で、殆ど大抵の入費は省いて節約してゐた。蚊が出て蚊帳を買はなければならぬ相談をし、すぐに適當なのを買ふやうにたのむと、一應、國元に話さなければならぬと言ひ、それまで待たなければならなかつた。着物のことを話をしにゆくと矢張り國元にかけて合つてから後にしてくれとのことであつた。遠縁の者は國元へ照會して送金を待つてから、やつと蚊帳や着物をととのへてくれるのが常で、自分でそれを一時立替へるといふことは、一切しなかつた。何ごとも國元からの金が着いてからでないと、進んで作つてくれなかつた。さういふ家であつたから私は毎月訪ねてゆくのが厭さに、直接私の手にはいるやうに國元に話をしてやつても、承諾をしてくれなかつた。

日曜の朝、この長屋のせまい通りにも日が當つてゐて、つつじの鉢物をつくることの氣狂ひのやうに好きな遠縁の者は、屋根の上に家とは不相應な物干場くらしいの二坪の植木臺をつくり、何とかいふつつじは五圓だとか、また何とかいふつつじは十圓であるとか、ま

た何とかいふつつじは二十圓であるとか、二圓や三圓のつつじはがらくたなつつじであるとか、このつつじの一枝だけでも三圓するとか言つて説明するのであるが、成程、それらの高價なつつじは絞りとか白とか、白に斑のはいつたのとか、つつじの花に思へないほど小粒な花とか、あらゆるつつじの種類があつて美しいことも無類であつた。よくも、これだけ集めたものだと思はれるくらゐだつた。日光の直射を柔げるために簀天井をつくり、日南水を甕の中に用意して置いてあつたりしたが、そこだけは、かういふ長屋の屋上だとは思へない贅澤を極めたものであつた。遠縁の者は、私にも一鉢あまりいいのではないけれど下宿住居のつれづれに眺めたらどうか、氣に入つたら上げてもいいのだが、……と言つてくれたけれど私は頭をふつてつつじは餘り好かないし、水を遣るにしても階下まで運ばなければならぬし、却つて朝夕めんどうな仕事かふえるからと斷るのであつた。第一、つつじの花が咲き切つてしまつたら花を取つてやらねば木が弱るとか、あまり新しい水はやつてはならぬとか、朝のうちの日光を簀を隔ててやるといいとか、さういふ、めんどうな箇條書は私には出来ない藝當であつた。それどころか、朝は睡ても睡足りなかつたし、氣詰りなつつじなぞ貰つて厭な思ひをする遠縁の者を朝夕におもひ出すことすら全く、ごめんかうむりたかつた。

遠縁の者はいふのであつた。人間には風流氣がなくてはならぬこと、たとへば忙しい仕事をしてもおれのやうに、かうやつてつつじの花を咲かして楽しむとかいふ、さういふ風雅のころざしを持つてゐなければ人間は働くだけでは心がいやしくなつていけないといふのであつた。私は私でたとへ花を愛してゐても卑しい人間は益々卑しくなるばかりで、却つて品のある人間に及ばないといふ意味のことをいふと、君なんぞ、さういふ心がけであるから出世もしないで、今だに國元から金を貰はなければ食へないのだといつて、もつと、りかうな人間なれば、今ごろはとうに一本立になつてゐる筈だともいふのであつた。私はそんな話は聞きあきてゐるので、つつじなぞみんな枯れてしまへといふ氣持になつて、遠縁の者の家からかへるのが常であつた。

煤と鶴

東京には名苑といふほどのものが殆どない、宮城の石垣を半藏門の坂から見たお濠端が美しいくらゐである。これが東京の大名苑であることに疑ひはない。

この間、深川の清澄園といふ、もと岩崎氏の庭園であつた庭を見たが、これは庭のすべ

てが池を中心に造られてゐて、水もゆたかであつて、まん中に島をつくつてあつて、鶴が二羽、芝の上に丹頂をかがやかして遊んでゐた。近づいて見ると鶴の羽根が煤烟でよごれ、尾のさきの方が一さう黝ずんで見えた。それもその筈で庭を隔てた町のそらに本所深川の烟突が、くろぐろと東京のそらの上に龍巻を起してゐた。

池のまはりには諸國の石を飛石の形に打つてあつたが、寧ろ派手すぎて眼ざわりだつた。ふと美しい浅い水底が濁つたので氣をつけて見ると、沙魚の子がゐることがわかつた。もと久世大和守といふ人の下屋敷であつたので、池は相當に古いらしく思はれた。石のつかひ方が露骨であつてそれも伊豫石のやうな厭味があり、光つてゐて、落着かなかつた。ただ、かういふ深川のやうな巷にこれだけ大きい池を抱いてゐる庭のあることが珍らしく、併もよく手入れがして整へられてあつた。外國貴賓が來朝したりすると此處で園友會のやうなものを開くさうであるが、さういふ園友會には適してゐるやうである。池をひと廻りするにはゆつくりすれば一時間は遊べるらしかつた。

先刻から絶えず啼く鳥がゐたが、やはり浮いてゐる鴨であつた。今まで島のかげに群れてゐた鴨が一せいに立つて、池心に泳ぎ出たり、芝生に上つたりして數百をかぞへるくらゐであつた。満ちあふれた豊かな水にさざなみが暖かい日の光を受け、それが眩しいくらゐに光つてゐた。見てゐるうちに落着いた鴨はあちこちから泳ぎ出て、優しいびいびい聲でおたがひに啼き合うて遊んでゐるのが、遅々たる春日のなかに長閑な景色を展げてゐた。

東京の名苑をさがし歩いた朝日グラフの首藤君が、適當なところで一枚寫眞を撮らうと言つたが何處と言つてすすめるところもなかつた。ただ、煤によごれた鶴の羽根と、この鴨の哀れにさびしい啼きごゑが私の氣に入つたくらゐであつた。これは寫眞には撮れないしろものだつた。

松と椎の城

濱松町驛を電車で通るたびに舊離宮あとの、鬱蒼たる椎や松の老木が城のやうに重疊してゐるのを眺めて、いちどこの公園の中にはいつて見たいと考へてゐたが、さういふ場合がなく空しく四五年経つてしまつた。それほど椎や松が森林のやうに見える外側の立派さは、類ひないものだつた。

自動車から下りると公園になつてゐるだけ、ひどく汚れてゐて子供らの遊び場所になつてゐるあたりは、紙屑や棒切れが散らかされてゐた。

この庭には老いて曲折された傘形の松の枝が、池の面にすれすれに覗いてゐて、僕は兼六公園の松を想ひ起した。却々、當今かういふ立派な老幹をもつ松を集めることが出来るものではない、僕は同行の首藤氏に椎と松の森を寫したらどうか、池を抱き入れて撮つたらいいでせうと云つた。

池をひと廻りしてゐると老松が一本煤けた幹をつがへたまま、水にかけを映して蕭條として枯死してゐた。僕はその痛ましう姿を悲しみの骨を見きわめた時のやうに、暫らく眼をその枝や幹のあいだに遣はしてゐた。

歸りに先刻ふしぎに見て通つた四人づれの女學生が、まだ跣んでお祈りするやうな恰好で柵にもたれて、ひそひそ聲で話をつづけてゐた。一たい、あれは何をしてゐるのだらうと尋ねて見たが、新聞記者である首藤氏もすぐには分り兼ねるふうであつた。或いは深愁あつてそれを物語つてゐるのかも知れなかつた。

發句道の新人

「俳句研究」 四月號に出てゐる日野草城氏の連作風な發句を讀んで、その柔らかさと表現の旨さには僕は發句もここまで來ると、大抵のことを表はせると思つた。手ぎわもよく、そして材料の觸れ方も品があつて適切を極めてゐた。かうなれば發句が小説の素材をこなし得るやうに、展けた發句道の明るさを讚美せざるを得なかつた。

ミヤコ・ホテル

けふよりの妻と來て泊つる宵の春
夜半の春なほ處女なる妻と居りぬ
枕邊の春の灯は妻が消しぬ
をみなとはかかるものかも春の闇
薔薇にほふはじめての夜のしらみつつ
妻の額に春の曙はやかき
麗らかな朝の焼麴はづかしく
湯あがりの素顔したしく春の晝
永き日や相觸れし手はふれしまま
失ひしものを憶へり花曇

季題のとり入れ方もすつきりとしてゐるし、句の姿に少しも厭みや亂れたところがな

く、美しさに息をつめて浸つてゐるやうなところがあつた。難をいへば最後の「失ひしもの」の發想が少し露骨であつてこなれてゐない傾きはあるが、あとは粒々みな肉づいてゐて何と美事に成功してゐることであらう。「ばら匂ふはじめての夜はしらみつ」の品のある表はし方も、その他の連作の凡ては當代の發句界にはじめて爲し得た立派な新作である。俳句に新人出でずといふ聲は、これらの連作を得た今後にはもはや世迷言にすぎない、喜びに堪えずこの文章をかく所以である。

名苑

宮城のまはりを歩くと僕は石垣を見て楽しむ、消炭色に青みを加へた石垣の石は割り當てられた埋積の中にをさまつてゐるが、既に石と石との間の土は風雨にあらはれて、暗い煤の色の額ぶちを、石と石とのあひだにはめ込んでゐた。用事があつてくるまの上にある日は徐行して、石垣の角になつてゆくところ、その角の右方につづいた石垣を眼に入れるときの美しさは素的である。

石垣の裾はお濠の水にしつかり抱かれ、水の蒼さは垣の基礎の深さを適かに思はせるほ

どである。ひたひたと石の肌をきつちりと割つた水の美しさは無類である。松はだいぶ枯れてゐるが、それでも水面に枝を張つた老松の姿は幽遠であつた。裏手の見近くでは、道路が坂になり高まつてゆくので、お濠の水面がずつと遠くなる、芝生になつた土手下には鴨が浮いて水はいよいよ深さうに見える。いつか朝早くに通つて朝日の當つた水面、土手の松、鴨の姿、さういふものを大變美しく眺めたことがあつた。さすがは三百年の歳月がこもつてゐて、大切にしまはれてゐる名苑だと思つた。

東京には苑花を讃へるものが殆ど無い、名園なんぞないと言つてもいいくらいである。京都のやうに氣候と石材に恵まれてゐないから仕方がない、只、お濠端だけは名園だと言つてよい。これだけは少しも手が加へられずに育つたやうな立派な園生をつくつてゐる。部分、布置、隅、全幅から言つてもどれも生きてゐる。盛夏の雑草刈りの舟が浮んでゐたことを覚えてゐるが、記憶のちがひでなかつたら一層美しい。東京の名苑は先づ此處が随一であらう。

古拙と清瘠

支那朝鮮美術展覽會で、山中商會の蒐集した朝鮮の石塔籠、華表、層塔を一瞥したが、石燈籠は織部の角燈籠に似てゐて高麗時代のものであつたが、凡て古拙な清瘠と沈着を兼ねた結構を極めたものであつた。高さ五六尺くらゐであつて、漆のやうな日南苔が生えてゐて、刻も尠なく姿は純朴であつた。大抵三四百圓くらゐから千圓の値段がついてゐたが、どれも、好みは疼いてくるほど、完成されてゐた。

なかに明らかに層塔の寶珠であらうと思はれる端ば物に、三百圓と値づけられたものがあつたが、立派は立派であつた。これらの石燈籠を見てゐると、大徳寺の塔頭である聚光院の千利久の墓塔は、明らかに支那朝鮮の生れであらう。その芋頭のある相輪の工合や、石質などもそつくりである。利久が三百年も前に朝鮮物に手をつけてゐたことは、驚嘆に値する。

加藤清正なども朝鮮征伐の時に層塔の立派な代物を日本に搬んだらしいが、兼六公園にある十二輪塔もやはり分捕品であつた。あの時分に相當に搬んだものらしい、加藤清正も武人ばかりであつた譯ではなく、さういふ塔を見つけるからには、茶道一通りを超えた人物であつたのであらう。

朝鮮の石燈籠の特徴は、寶珠と笠臺との間に、請花に代つた素朴なゴツゴツした何等燈籠と關係のない、四五の裝飾的なきりづまのあることである。これが一見、詰らんものに見えるが、却々味ひのふつくりした豊かなものである。或ひは朝鮮の石燈籠は世界一かも知れない。

急に日本の石燈籠が見たくなり、堀切の利久堂に行つて手ごろなものがあつたらと、菖蒲の花を眺めながら物色して見て廻つたが朝鮮の高雅な傑作を見た眼には、どれも見劣りがして飛びつけなかつた。

兼々、石燈籠を一基ほしいと思つて、この間も日本橋仲通り芝の巴町、目黒の山岸などを見て歩いたが、前後の分別もなく高金を抛つやうな石燈籠は見當らなかつた。ひと月の生活費をなくしても一生眺めてゐられるやうな秀れたものが手にはいるまでには、何時まで待たなければならぬであらうか、これまた他人からいへば贅澤といふかも知れんが、私自身では墓がはりかも知れないほど、ほしいのである。

小説一篇書いてくれるなら、きみのほしい燈籠を買つてやらうといふ人がゐて、望みの叶うた燈籠があればなまじい金を見ないだけに、私は營々として小稿一篇を賦するかも知れない。却々、高金である石燈籠を得るときには物質的にだいぶ苦勞しなければならぬ。女のことでも、最早高金を抛打つ氣のない私であつても、石塔には機會さへあれば、犠牲は多少あつても、何とも思はないのだ。

蕤^{ぜい}

賓^{ひん}

蕤賓は五月の律也、蕤は繼也、賓は導也。一年を十二律に分ち五月は蕤賓にあたるなり。

あやめの祭

上野は停車場ステーションといふよりも、上野驛と云つた方がよいほど感じが田舎めいた停車場である。列車が信越とか青森地方とか、さういふ北方の寥しい首都村落に向いて行くせいであらう。晩春の或朝、僕は所用あつてこの驛に友たちを見送りに来て、國の訛のある老婆や若者の言葉を耳に入れ、揅ぐつたい氣持になつてゐた。

列車が北方に向いて開札する前に、僕は一列の十四五人づれの刑餘の人びとが歩廊を行く姿を眼に入れた。鼠紺色の囚衣に細い帯をしめ、同じい着衣のいろの風呂敷包みを提げ、看守に拉れられて豫め開札前に入場するのであつた。追鳥のやうな編笠をかむつてゐたが、この鼠紺色の囚衣はことごとく模範囚であるさうであつた。朝であり停車場だつたので、僕は囚衣にも編笠にも親しさを感じた。青少年の時分はかういふ姿を見るとすぐに露骨な批評眼をもつやうになつてゐたが、いまの僕はかういふ姿も、また僕自身の姿にもどれだけの區別を置かずに身にしみて眺められた。開札後に僕の見送る列車のすみのほうに、先刻の人々が腰掛の座について發車を待つてゐたが、その姿は落着いて靜かさを極め

てゐた。

僕にさういふ知り合ひとはなかつたが、けふの爽やかな日にはこの人らにも野山の景色や、都會の町をゆききする男女の姿に心をほぐして眺めることも澤山にあらうと、仕合せであれと思はぬ譯にゆかなかつた。ゴツホの繪にこれに似た畫面があつたが、昔、見た繪も久しぶりで思ひ出した。

停車場を出て上野廣小路の雜間を歩いて行きながらも、編笠姿が眼にのこり、終日氣持が沈んでならなかつた。家にかへつても庭木の餘花をつづつた奥のほうに、僕の見た姿はやはり消えないで、一列の憂鬱を曳いて浮んでゐた。

乗合自動車、電車などを待つてゐる僅かな時間ほど、人の心を疲勞させるものはない。僕などはそんな時間にゆめまで見るやうで草臥れやすいのである。ことに明るい午後のみぶしい光の満ちてゐる町の遠くを、電車や乗合自動車をすかして見るときの茫とした氣持は、全く耐らないほど厭である。途方もなく速力のあるものを待つといふことは、速力の烈しさとは反對に退屈なものである。

僕のところから東京に出るときは、いつも乗合自動車に乗るのがつねであつた。冬のは

じまりかけたところに乗り合した女の車掌は、美しくないが眼にのこるほどのものを持ち合してゐて、乗合にさへ乗ればあの人はどうしたらうと思ひ出してゐたが、ついぞ同乗したことがなかつた。多分、辭めて了つたのであらうと僕も何時の間にか忘れてゐた。春の終りかけたころの或る晩、東京からつかれてかへつて來ると偶然に彼女が乗合ひ、胴の詰つた制服に涙ぼい睫毛をまたたかしてゐた。まだ、勤めてゐたのかと逢はぬときは却々逢はぬものだと思つた。

銀座の或る店に三年振りくらゐに行つて食事をしたが、そこにゐる女たちの半分は、三年前から勤めてゐるらしかつたが、わづか三年の間に褪せやすい女の縹緞は容赦もなく衰へてなかにひどく老けて了つた女さへゐた。そして女といふものは男を覺えてゐることは、とうてい男の記憶力の比ではない。同様に昔少しでも美しく眺められた人が衰へた容色をしてゐるのを見るほど、參る氣持はなかつた。男の薄情がさうさせるのか、ものを云ふ氣さへ起らずに眼をそむけつづけてゐる氣持であつた。

ゾラが好んで描く裏町や建物や散歩道路、居酒屋や貸長屋の長々しい説明は退屈なものであるが、不思議にもそれらの町とか建物とかが内容の人物や心理に關聯されて、讀み終

えると重要な描法であることが背かれるのである。ああいふ、くどくどしい描法を試みてゆくうちに、ゾラはその内容に動いてゆく人物をすつかり組み立てて行つたものらしい。いきなり重要な人間の心理には入り込んだドストエフスキイは、却つてゾラのくどくどしい無駄事を會話の間にはさみ込んで描いてゐる。それほどドストエフスキイが旨いといふことになるかも知れぬ。併し「居酒屋」にある裏町の光景や「ルゴン家の人々」に彫られた街の描寫、「ナナ」の劇場の人波を書き分けてゐる手腕は、自ら好きで楽しんでかいてゐるやうなところがある。ああいふ描寫はよほど落着いた態度と、見落さないやうに制作的に時間を賭けないと、あそこまで行き届いた描寫ができないものである。「居酒屋」にある洗濯屋の晩食の會合だけでも、百枚くらゐ數えてゐるが、ああいふ大がかりな細かい説明は日本の作家には眞似の出来ないことである。一晚のことを百枚もかいたら讀者も批評家も一様に退屈してしまふであらう。

バルザックはゾラとくらべて見ると、すつと上の方にゐて揮ふてゐる手腕の大きさがあつた。ゾラの作爲のあとは同じいそれが見えるバルザックの場合には、きちんとした迷はないう運命を表はしてゐる。ゾラはその主要な人物の死ぬことによつて事件の解決、人生の終りを可成不手際にあらはしてゐるけれど、バルザックはまだまだ書いてゆけさうなところ

で、ぶつつりと切斷してゐるところが立派だ。長篇といふものはかういふ切斷面の餘裕があつてこそ、はじめて美事に思はれるのである。ドストエフスキイはやはり截斷された面を持つことによつて、最も長い小説の光芒を持つてゐる。然し乍ら、これらの作家はいちやうに書いて行きながら、ヘタ張つたり草臥れたりしてゐるところがない、昨日の仕事よりも最つと元氣に精力的に今日の仕事をしてゐるやうである。仕事のあがりにつつたところがない。たとへ、それがこれらの作家にあつたにせよ、われわれ後代の讀者にはそれが見分けられないほど、うまく内容で溶解してゐるやうである。わづかな五十枚くらの短篇にも、どこからどこまで力がこもつてゐて、どこからどこまで早脚で書いてゐるかといふことの解る作家とくらべて見て、大きさがちがふ所以なのだ。

バルザックにもゾラにも、それからドストエフスキイにもそれぞれおめでたい涙をさそふやうな場面や事件はあるが、それが全く本物になつて讀者をやつつけてゐる。不愉快を感じさせないでゐて、ああ旨く書いてゐるなど感嘆させる。「居酒屋」のブリキ職人が屋根から墜落するまでのくどくどしい描寫にも拘らず、よくあれまでに書きこなし、行き着いたものだと思ふ。ああいふ、くどい描法もあそこまで行くと、くどく書かないと、ゾラの味ひが出ないとまでに云へる。ゾラがあそこに力をこめてゐる所以はやはり中學生の作文

をつくるやうな、熱心なこくめいさがあつたからであらう。尋常一様の投げやりな作家のまねの出来ないところである。

バルザックも信仰といふものゝ匂ひをもつてゐるが、ドストエフスキイほど宗教くさくない。宗教くさいところにドストエフスキイの面白味はあるが、同様に今日の僕らから見れば、その宗教くさいところが誤魔化しであつて持つて廻つた道具立てでもあつたのだ。しかし、あの時代には信仰といふ問題が人間社會に變にこびりついていたのであるから、仕方がない。ラスコオリニコフが大地に接吻するなどといふことは、今日にあつては鼻持に出来ないことで、日本の通俗小説にも、あんな他愛もないことを書く人がゐないであらう。

初夏には次第に白い花がちになり、春のやうに色とりどりの花が咲かないのである。國から取りよせた普通のあやめよりも、せいの低い、愛すべき花を咲かすあやめは去年は二三本しか開かなかつたが、今年は二十本ばかり莖を立てて、うすい紫のつばくろに似た羽根をひろげてゐた。國から取りよせたものであるから一入珍しがつて、あやめの祭をしやうではないかと、子供や女たちが庭に出て言ひ出したのである。

梅に似た白い花をもつ山植子も、枝々に肥つた花をかざしてゐたが、その根もとに群り咲くあやめの花は晴れたなかに、くつきりと美しすぎるくらゐ鮮かであつた。子供たちは椽端に茶や菓子をはこび、僕もそこらを掃除しながら茶を喫もうといふのである。かういふ變に一家があつまるといふことを殊更に企てることも、珍らしい。それは一家に取つて面白さうなことや稀らしいことがあるたびに催されるのであるが、あやめの祭は名前が美しくてよい。國にある大きな庭の賣立會で松などを購うた折に、一繩張り廻したこのあやめも一緒に入札したものであつたが、言はばその時分の記念の草花であると言つていいのである。草花ですら年々歳々にさまざまなことを思ひ出さしてくれるから、人間の思ひ出は一そう深いものがあるのだ。

若葉の祭

北原白秋氏から速達便が来て、詩人大手拓次君が茅ヶ崎で亡くなられたから、明朝上野驛から故郷磯部に遺骨が送られるので見送つて呉れとのことであつた。大手君は北原氏の「ザムボア」に吉川總一郎といふ名前前で、僕と萩原朔太郎と三人肩をならべて始めて詩壇に

登場した詩人であつた。僕は例の「ふるさと」は遠きにありて思ふもの」を書き、萩原は初期叙情詩の「まだ山科は過ぎずや、ひとり車窓にもたれ、……」といふ詩を書き、大手君はポードレルのやうな、それでゐて甘い詩を書いてゐたが、その甘さは却々旨い甘みを持つてゐた。ともかくこの三人の詩は毎號「ザムボア」に掲げられ、「ザムボア」詩人中の輝ける三星座を形取つてゐた。

吉川總一郎といふ詩人のことは誰も知らないでゐたが、北原氏さへも原稿は受取つてゐても何をしてゐる人か、何處にゐる人かも知らなかつた。それから廿年過ぎてしまつたが、北原氏の全集出版記念會の席上で始めて吉川總一郎といふ大手拓次君に會つたが、蒼白い顔をして肥つた頑丈な僕と同年輩ぐらゐの人で、ライオン齒磨の宣傳部に勤めてゐることが分つた。僕や萩原君は數冊の詩集を出版してゐたが、大手君は四十七歳の末期まで結婚をしないでゐて、一巻の詩集さへ出てゐなかつた。不幸といへば不幸であるが、野心を持たないで市井の塵埃に隠れてゐたことも、ちよつと眞似のできない變つた人物であつた。

上野驛で北原夫妻に會ひ、大手君の白襦子包みの遺骨を拜んで別れを惜んだが、詩人文士の參詣など萩原を併せ四五人にすぎなかつた。あとは勤め先の人々ばかりであつた。北

原夫人は茅ヶ崎で昨夜は一泊してお通夜をせられたさうであるが、生前それほど私交的に深くなかつたのに、お通夜をせられたことは夫人であるだけに有難いやうな氣がした。原稿の上からの交際であつただけなのに、北原夫妻のこんどの手厚い友情は、全く僕の豫想しないところであつた。

遺骨をとり圍んで車窓が靜かに動いても、見送り人は暫らく動ずるに名残を惜んでゐる光景は、雜鬧の巷であるだけに神妙さが一入であつた。おれも前橋の方に骨を送ることになると、まアあんなふうかな、あの方が靜かでいいと、萩原が本統にさう思うたらしく云つた。

北原氏と別れて上野の小亭で黒ビールにランチを食べてから、僕と萩原とは花の散り盡した上野公園の坂を登つて行つた。動物園にはいつて見ようと歩き出したが、それより「丹下左膳」を見ることにした。二人とも前篇を見てゐたが折悪しく後篇も半分ばかり過んでゐたから、上野日活の前で「入れ替り」を待たうとしたが、いつそ這入つて行つた。

丹下左膳は白衣の梵字紙子を着て、銀紙を張りつけた刀を既に抜いで立つてゐた。この間、京都で會つた美しい醉眼を隣いてゐた大河内君の素顔は、劍鬼、左膳のどこをさがし

ても見當らなかつた。僕をひとつ悪武士に仕立てて何處かにちよつと入れて見て呉れんか、伊藤大輔君に話をしてね、給料はいらんがどうか、と、いふと、悪武士はいいところに氣が付きましたね、ひとつ伊藤さんに話をして見るかな、かういふ大河内君の顔はこの左膳の顔とはまるで違つてゐた。

半分見残した「丹下左膳」を案内女の人に話をして、その四時廿五分にはまた来るから入れてくれるかといふと、入れてあげませうと云つてくれたが、それまでは二時間たつぷりあつた。三橋の裏にプリンスといふ喫茶店があるから見學して来ようと、萩原が言ひ出した。その喫茶店は階上が同伴席になり蓄音器のレコードが替るごとに、そのタイトルの張札が階上に出てゐた。給仕の少女達も美しいが喫茶店の女なんて野暮くさいの、と、僕がいふと、娘ツ子のひげの生えたやうなもんぢやと萩原が云つた。僕のすぐわきにゐた學生が一杯の紅茶の會計に、十錢銀貨一枚と一錢銅貨を五枚出して行つた。僕はつくづく感心して眺め、青春を空しくしないこの學生のために同情した。

そとに出るとまだ二時半くらゐであつた。けふ一日ぶらぶら浮浪人のやうに暮して見ることかなといふと、それもよかんべ、と萩原が賛成した。廣小路の方に向つて歩くと、小さい活動館があつて林長二郎がかかつてゐた。此の中へでもはいらんと却々日が暮れないぜ、

と僕が言ひ、久濶りで林長二郎を見物した。三年も見ないあひだに林長二郎は肥つてにやけたところがなくなり、苦み走つた顔をし演技もうまくなつてゐた。林長二郎は旨くなつたぢやないかといふと、なるほど旨くなつたな色男振ると厭になるが、ふてぶてしいサムライはいいなと萩原が云つた。

どうやら四時まで時間を潰して、二人はこの小さい映畫館を出て、また街路を横切つて日活館にはいつて行つた。丹下左膳はまたしても刀を抜いで誰かを斬らうと身構えてゐたおしまひまで看ると、二人はこの日活館を出たが、ラヂオで警告したとほり雨がぱらついて來た。五時半だつた。ああ、やつと日が暮れて酒にありつけるやうになつたといふと、雨が烈しく乾いた頬を打つて來た。地下鐵道にはいつて乗ると、松村みね子さんに出會ひ、久濶を叙してゐるともう銀座へ來てしまつた。

雨が歇まないので番傘を一本購めた。傘さへあればのたくり歩いてても大丈夫といふ腹であつたが、間もなく雨は小降りになつた。小料理屋にはいり酒にありついて、けふ一日の永かつたことを、つくづくと回顧した。そとに出ると雨は止んで傘が邪魔になつたが、持たない譯にゆかなかつた。萩原も知つてゐる行きつけの酒場のスミレにはいつて行き、だらだらと飲みつづけた。午前十一時からのたくり歩いてゐるので二度目の酒はよく利い

て、丹下左膳も大手拓次君もみんな忘れてしまった。忘れないのは廿錢の番傘だけであつた。僕らは西銀座のヤングの向ひの何とかスリツパで、黒いビールを飲んで、女の洋服は嫌ひぢやとか、黒いビールは腹がふくれていかんとか、この家では西洋のレコードばかりかけてゐるが、もつと下等な「忘れぬ花」でもないかとか、そんなことを喋つてゐるあいだに腹が空いて来て、何か食ひものはないかといふと、そんなものはないと言ひ、僕らはつゝに此の酒場を這ひ出した。君とかうして歩いてゐると、昔の一文なしのやうな氣がしていいといふと、その一文なしの酒場に紹介してやるから待てと萩原がいひ、西銀座の通りを新橋の方へ歩き出した。けふ北原君をつれ出すと面白かつたんだがといふと、けふは何だかお弟子達が多かつたから言ひにくかつたよと、僕がこたへた。

新橋の角で僕らはお壽司を食べた。このこはだは何時しめたのだといふと、夕方つけたばかりだと云つたから、うそ云へ、たしかに昨日しめた加減だぞ、酔がまはりすぎてゐるぞと僕がいつた。壽司屋を出ると、二人はガードにそうて歩き出した。一たい何處へ行くんだといふと、十錢スタンドといふところに行くんだよ、何でも彼でも十錢だよ、ほう、そいつは廉いな、かへりに腰の抜けるウキスキーでも出すのだらう。さうかも知れんからそこでビールを飲むんだよ、ほかの酒は飲むぢやないよ、美人のおかみがゐるんだ、そ

れは甚だ慶賀すべきだ、亭主がゐては馬鹿口を利くことは出来まい、亭主はゐなくておかみだけが福餅のやうにふくれてゐるんだよ、ああ益々敬服に耐えないな、二人は斯くて悲しや十錢スタンドに辿り着いたのである。

彼女はおかみさんであるよりもカフェの女と言つたほうがよく、カフェの女であるよりも更に裏長屋に世帯を持つてゐる、若い妻君を油で揚げたやうな女であると言つた方がよかつた。酒は何でも彼でも十錢だつた。恰度町かどの一坪に足りない三角形の建物のその三角のとんがりに、ごちやごちやと瓶をならべ彼女は營業してゐたのである。まるで船のへさきの方に坐つてゐるやうなものぢやないかといふと、お客が一人這入つて来て十錢のウキスキーを二杯飲んで出て行つた。利くだらうなあ酒はといふと、利きますよあ酒はと油あげのおかみさんが答へた。

僕は約束どほりビールを飲んでゐたが、おかみは萩原と知り合つてゐるので、酒さへ飲ましてくれればこんな店はこのままにして置いて出ても關はんとか、こんな店だから誰も盗んで行く品物がないとか、いつたい萩原さんは何時景氣がいいのかとか、この連れの方もあんなのやうな飲んべえかとか、僕をさしてつけつけ云ふのであつた。飲んべえの一文なしでやつと此處まで来た、萩原からビールよりほかは飲むなといはれたのだと、僕は

身元と辯解とを敢てした。そして僕は間もなく悲しさうに十銭スタンドまで来て見ると、けふの日程は先づこれで終れりだねといふと、このあとどうにも仕様がないと萩原がいつた。二人は油あげに別れて、さらに新橋の歩廊まで行つて別れた。

大井町驛で降りると馬込行きに乗合はもう出なかつた。どうせ自動車でないとかへれなといふ腹で、のこのこ歩いて何とかいふ喫茶店で一杯飲んでゐる間に、はつと氣がつくと、例の廿銭の番傘を大切さうに洋杖ステッキと一しよに持つてゐた。よくも辛抱よく傘を持つて歩いたものだと思うた。襯衣をかひに行つてかへりの自動車で忘れ、帽子を忘れ、子供の空氣草履を忘れた僕は何の因縁か、この番傘だけは忘れなかつた。

夏 祭

夏祭りの宵である。

曲藝師の若い女は島田髻に結ひ袴を着けてゐて、その袖口から七つの白い鶏卵を取り出して見せた。さらにかの女は半襟の下から幾枚かを切り放つた五色の紙片をとり出し、さらに不思議な奇聲を弄びながら、いよいよ、これより噴水流し、扇面白瀧の曲藝に及びま

す。仕損じは未熟者のつね幾重にもご容赦のほどを願ひたてまつります。先づはこのテエブルの角から一條のしら瀧さかさまに登るところに、お見落しなきやうに、ええ、はつ、といふ先刻の奇聲を一段と高めたとき、テエブルの角からふしぎや噴水がひとすぢ登りはじめたのであつた。

それからかの女は自分の着てゐる袴の角から、懸聲をかけると噴水はいたるところから登つて行つた。さらにかの女はまた數倍の高い聲をはりあげると、いよいよ瀧は白絲、扇面流し、仕損じは時の運、ひらにご容赦のほど願ひたてまつります。ええ、はつ、と懸聲を放つと扇の骨から幾すぢの噴水がのぼりはじめた。そしてかの女が扇子をとちると噴水は間もなく花火のやうに弱々しく消えて行つたのである。僕は呆然として眺め入つてゐた。

僕はさらに水の中から女の首があらはれ、首だけしか見えない女をつくづく哀れに思つたのである。顔は人間ながら體は蛇身、前世の悪極道が酬いて來たものか、三度の食事はもちろんしたためは致しますれど、哀れやもともと蛇身の女、深山幽谷は木曾の檜の山中、蒼みどろになつた沼池に棲んでゐたのが身の破滅、こゝに皆さまのお眼に止つたわけにございます。と前口上の赤襦衣男がしゃべるとこんどは聲を低めて、「さあ、皆さま方

に何とか挨拶をせんか。ご愛嬌にラツパ節でもうたはんか。」といふと、女は面白くもない顔つきで、「いやぢや、いやぢや。」と顔ふるばかりであつた。「けふは蛇身のをなごの機嫌がわるうございますから、怒らせないやうにそつと致して置きませう。」と先刻の男がいつて笑つた。

蛇身の女は水のなかに沈んで行き、僕はうす濁りをおびた水の底を恐ろしげに差しのぞいて、驚嘆の溜息をついてゐた。

僕は咽喉が乾いたので肉桂水を呑んでゐた。この大人の酒のやうに奇異な飲料は、小さい玻璃製の瓶に入れられて赤い瓶の肉桂水は赤くそまつて見え、青い肉桂水は青くそまつて見えた。そして僕はこの瓶をかかへながら肉桂水を賣る婆さんが足のない人のやうに、ぺちやんこに座つてゐながら絶えず銅錢をかぞへてゐるのを眼に入れた。

僕は社殿のきざしを登つて美しい巫女を見て、巫女は何町の何屋の娘であること、あんなそばかす女でも巫女になると神々しくなるものであることを面白く感じた。巫女はひまな時は社殿のうしろに出て、喉が乾くのと汗が出るので水ばかり呑んでゐた。汗だらけの顔が汚なく見えた。

大蛇はからからに乾いた角帯のやうに脊せて、面白くもかしくもない容子で、口上男

の肩さきから首をもたげ、からだは床の上に這ひながら尾はまだ檻のなかにあるほどの、圖體ばかり大きい錦蛇であつた。鶏一羽丸呑みをするといふが嘘だらうと僕はかんがへたが蛇はとても暑さうで紅唐紙のやうな舌を出し、口上男の手の甲のうへも汗だらけであつた。

或る店では心天こころと金魚とが一しよに涼しさうな葎簀のかげにあつて、白粉のはげた田舎娘がちうと絞り出す心天を、うまさうに呑み込んでゐた。心天とはこんにやくのことだらうか、それとも寒天をあんなふうに拵へたものであらうか、いくら考へて見ても分らなかつた。しかし僕はちうと刻まれて絞りとるところが面白かつた。

或る夜店では白い鼠に水車を廻させ、あるところでは山雀が半鐘を撞いて、むかしの江戸は大火であつた、八百屋お七が放火をしたのがさうであるが、八百屋お七といふのは八百屋の娘であらうが、何のために放火をしたのか分らなかつた。りこうな山雀ではあるがそんな譯は僕同様に知らないらしかつた。只、山雀は氣短に馳つて行つては、むやみにがんがん鐘をついてゐた。

歌集「白南風」を読む

北原白秋氏の歌集「白南風」^{ばえ}を読んで見て、その歌の旨いに驚いた。それはあまりに旨すぎ整ひすぎてゐて、少しの隙さへ窺へないやうである。洗練彫琢といふ言葉があるが「白南風」は、それ以上に旨くこなしてゐるやうである。私は却つて北原氏のうまくない歌をさがして読みたい位に思つた。旨すぎる料理といふものは、あんまり旨すぎて夢中になつて食べてしまふから、忘れてしまふことさへあるのである。

卷中、北原氏が一臺のピアノを購入し、それを子供の部屋に備へつけ、北原氏自身も永い間ピアノをほしかつたが、漸と求めることが出来たといふ歌の序詞がある。その序詞は感情が露骨に出てゐていはゆる拙い文章であるが、感動がぢかにしみ出てゐて私には懐かしく讀まれた。あの年輩と落着きとを持ちながら、ここまで感動してゐる氣持はむしろ子供らしくさへあつた。私の家にもピアノがあるが、それを購めたときはやはり北原氏に似た喜びを経験した。寧ろ悲しいまでに私自身の問題としてのピアノ、子供のときには空想もしなかつた大きな樂器が、自分の家に据ゑられ弾かれることは少し悲しくさへある喜びであつた。

「常こがれ果敢なみしもの、子らが爲め、五十路近く、やうやうと手に入りけり。月拂ひ二十ヶ月とよ。中古の獨逸製とよ、眼がしらのあつくなりくる」

いかにも露はの感情がナマのまま出てゐて、洗練されたものよりも人間的で面白い氣がする。

ピアノ

父われはピアノの陰にかき坐り言默しをり子らぞたたける

在るべくて在るべかりにしこのピアノやうやうにして室にひかりぬ

歌になるとちやんとした旨さのなかに、素朴が融かし込まれてゐて少しもゆるんでゐない。北原氏の才氣といふものが一番よく表はれてゐるのは、何と言つても數多い作品のなかで、和歌の表現の完成されてゐる見事さが最も代表的なものであらう。「桐の花」時代から北原氏は完成されてゐたが、いつも完成期を積重ねてゆくのが北原氏の歌境であるかも知れない。

三度の飯より文學が好き

宇野浩二氏は文學が三度の飯より好きで、それを離れて生きて行く道がないと言つたことがあるが、これは宇野君に取つては眞實な言葉であらう。しかし文學で衣食してゐる僕などはハッキリした言葉で三度の食事より文學が好きであるとはいはないが、好きも嫌ひもない痼疾のやうに文學が肉靈のなかに食ひ込んでゐて、それから暫らくでも離れた心持でゐたいと思つても、考へる事や、ものの見方や、感覺の方面でも、文學的なものから脱け切らないものを感じ、もつと樂に、素直に暮して見たいとさへ考へるのである。文學者の文學臭いのは僕自身にも厭であるが、外がはから見ると餘り素直なものではない、三度の飯より好きだと正直に言はれると、さうかな、と思つても、僕などはそんなふうは無邪氣にはいへないのだ。

僕など文學で衣食するから、昔は好きであつたものも、だいぶ此頃になつて苦しい好愛の情に變つてゐる。一つの作品をまとめるにしても、可成に苦しむ、そんな好き嫌ひなどといふ生優しい氣持ではない。若し僕が他に生計の道があつたら文學の中にあがき悶えるよりも、他の樂な仕事に没頭したいくらいである。それほど切なく苦しい。併し乍ら、いくらかう言つても、他に生計の道が拓けて行つたら又しても文學に舞ひもどるかも知れない、それこそ好きで這入つて行つた藝道の悶えを、もう一度經驗することを知らず識らずの間に幸福に感じるかも知れないのだ。

たとへば仕事をしないで一週間もぶらりとしてゐると、精神も澄み、何か貯つた氣持になりツイ書きたくなる。あれを書かうか、これを書かうかといふふう豊富に心がはたらくのだ。苦しいといひながらも矢張り書きたくなるのは文學が好きで好きでならない爲めであらう。酒好きな人がいつも廢めようと考へながら、健康に著しい衰弱や中毒を加へてゐても、どうしても廢めることが出來ずにすく／＼に生命を奪られるのと、文學のことも、ほぼ、似たやうな氣持であらう。

或時は苦しいと考へてゐる作品製作も、よく書けると晴天のやうな氣持になり、それに相當な物質的成果ををさめると、幸福な感じが満ちて來る。何よりも能く書き得たといふことと、物質的な圓滿といふことが相打つて、雅俗ともに藝道の魂を渾然たらしめることは、やはり人生の快樂であらねばならないのだ。

いまの大抵の作家をすつと見渡しても、みな小説やけをしたやうな顔をし、文學のゴミ

や垢をためてゐるのだ、何人がハッキリと三度の食事より文學が好きでないと言へるであらうか。

批評家

批評家といふしろものをじつと見てゐると、こいつ半分しか読んでゐないな、とか、こいつ殆ど読んでゐないくせに批評してゐるなとか、なにをチャラツボコ言ひやがるんだといふ氣がして來るのである。讀むのがめんど臭いなら止めるがいい、なまじい生讀みの小説にどうのかうのといふのは、枚數とか頭數とかをそろへる爲であつて、そんなのは當節流行らない、讀むのがいやなら止すがいい、澤山よむのは月評の事務ではないのだ。佳い作品を三つか四つ見つけてそれにじつくりと私はかういふふうに讀んだとか、私の考へとはちがつた行方でそんなのは嫌ひだとか、さういふことをハッキリいへばいいのだ。

愚劣な月評家ほど澤山の作品を讀んで、それを看板にする。いくら澤山の作品を讀んだつて草臥れるだけぢやないか。佳い作はわりにすくないのだからそいつを見出して、その作品を骨抜きに批評してこそ役目が足りるわけだ。

小説は旨いほど讀みよい、旨くない小説は讀みづらくなる。旨いものにもカスばかりの旨さがあるが、私のいふのは旨くて脂こくて幾らかとろりとくる奴がよい。しなへたやうな味ひがいいのだ。小利巧振つた旨さや、やたらに詰め込んでそれを手頼つてゐる旨さはたまらない、やはり思はず知らずに讀ませるのが作者の一番強いわなであらう、どうにも讀めないのは、躓づいて讀めないのと同じで、ついてゆけない。

紙の籠

僕はなぜか脚本家だといふふうに、町の人から云はれてゐた。豆腐屋のおかみさんが一番さきに脚本家だと云ひ、だから有名におなりになつてからお豆腐の代はいただきませうと、ついで代金の請求などをしたことがなかつた。働き手であるおかみさんの顔は煤と埃とでよごれ、睡眠不足も手傳つて顔いろがよくなかつた。油揚のじいじい煮える大鍋の前で、雁もどきや三角揚の裏と表とをうまく返し、澤山茶種油あぶらをつかはないで旨く山吹色に揚げることを、竹の大箸の先で加減しながら毎日戦さをするやうに働いてゐた。實さ

い、沸々煮える大鍋のなかに百萬の鐵かぶとをかむつた兵隊がごつた返してゐるやうに、朱銅色の泡が沸き立つてゐた。

豆腐屋は晴れた日に油揚をあげる習慣があるらしく、いつもその日のお天気はカラツとしてゐたのである。勿論、僕は冷たい淋しい豆腐で糊口をしのいでゐて、それでも結局楽しい健康があふれてゐた。僕は僕の太腿に美しい春を眺めるほど、元気で快活で、そのうへ、未來ある脚本家であつた。おかみさんは苦學生の嘘を嘘として見ることの不愉快な賢夫人であつたために、脚本家でひと芝居を打つてゐる僕をゆめさら疑ふやうなことがなかつた。春はそのやうに豆腐のお茶からも、夏は美しい水のなかに碁盤目のやうに切り沈められてゐる、俗稱、ひややつこといふ代ものを見ることですら、涼味掬すべきものがあつた。僕は豆腐のこはれ目から南極の氷の山々や、その重い曇天のもとをゆく探検隊を乗せた碎氷船を思ひ起すことで、夏の夕をおくるのであつた。白菊と豆腐といふ題の詩をかき、悲しい呼子のラツパが生活音楽としてどれだけ貧乏人と關係があるかを感想風にかき、そして命の恩人である、よごれた顔をしてゐる賢夫人の心を諒とするのであつた。上野公園では第七回文部省美術展覧會があり、白馬會や太平洋畫會の若い西洋畫家の展覧會もすでに開かれてゐた。赤坂の美術館にローシーが音楽と舞踊の教授をとり、故小川内薫氏

は土曜劇場で市川左團次をしてバベルの役を演技させてゐた。正宗白鳥氏は泥人形をかき高村光太郎氏は永井荷風氏と前後して才筆を揮ひ、詩集「思ひ出」を出した北原白秋氏について天才詩人、三木露風氏は「白き手の獵人」を詩壇に投じてゐた。どこを見ても若葉青葉がひろがるごとく藝苑の季節は、僕を元氣にし且つ悲しくさせ、はたまた才幹の極めて乏しいのを日夜嘆かせてゐた。世をあげて藝術の想革に酔ひ、才あるものは繪畫の宮殿や文壇の人となるべき機縁の時代であつた。

併しながら僕は依然として朝日の當る豆腐屋の前を、遠慮深く通りながら何處といふ的もなくうろつき廻るのであつた。東京といふ都は果の果から歩きつづけてゐても町や家々がなくなるといふことがなかつた。しかも大方の浮浪人は淺草のハキ溜に集るごとく、僕もいつといふこともなく淺草公園の中をうろつてゐた。午前の公園は新しい悲しみのなかによごれて行き、昨夜の疲れや騒々しい餘波をのこしてゐた。たゞ、觀音堂の鳩だけはよく睡られたと見え、朝露にしめた石疊の上に肥つたからだを動かしてゐた。全くこの公園のなかで睡り足りたハツキリした眼をしてゐるものは、この肥つちよの鳩くらゐであつた。午後の公園のよごれのなかに行人の顔がふえ、あらゆる音響が濁つて行き、池は埃ばんで煤いろの髮垢のやうなものを泛べ、それから池の上にある藤棚の藤のかたまりがく

つたりと草臥れるのであつた。三味線、笛、太鼓、ヴィオリン、セロ、ピアノ、飴賣の笛、それらの音楽は伸びた飴のやうに建物と建物に食ツつき、旗や看板や映畫の寫眞のなかに變な洋燈のやうな黄ろい日光がぢやれつき、跛や盲などはゐざり車に乗つてこの都の北方にある穴のやうな町から、ぞろぞろ午後の稼ぎに公園に出かけてくるやうな時刻は、浮浪人だちはどうして一日を送るべきかを考へる時分であつた。どうにかして一日といふ永い時間を面白く可笑しく暮らし、それには出来るだけ金の節約を行ひ、そして出来るだけ永い時間のかかる遊びをしたのであつた。浮浪人が日課のやうに放埒に遊びたい願ひをもつのは、それは恰も暗いところを好んで歩く人間が謙遜であるやうに、働くことの出来ないむしやくしやした氣持を子供のやうに紛らしたためであつた。僕もまさにそのやうな氣持であつた。活動街に紙の龍が泳いでゐる下をボンヤリと歩いてゐながら、恰も人波のまま何處へ搬ばれようと勝手にしろと思つてゐても、うかうかしてゐると踏み殺されるぞといふ、でで虫も考へないやうな命をまもる人間らしいことを考へながら歩くのであつた。

しろねずみのこと

乳母の里から貰つて來た白鼠が二疋ゐて、私どもはそれを家のなかに放し飼ひにしてゐた。喰べものは勝手の板敷の上のみかん箱の寢床のわきに置いてやり、白鼠はその箱のなかにはいつて溫和しく寝てゐた。綿のやうに白い子供の鼠は疊のうへをちよるちよる這ひながら、母の膝のあいだや私の懷中にはいり、うぢやうぢやと撥つたくてならなかつた。紅い眼をまたたいて髯を蝦のやうに顫はせるこの生きものは、狎れてくると勝手から土間に降りて行つて、苔のはえてゐる庭に出てゐて、その姿を美しいと思ふことがあつた。

白鼠を飼ふと黒い鼠がゐなくなると聞いてゐたが、實際、黒い鼠が姿を見せなくなつてゐた。だから猫の役目をつとめるといふふうに珍重がられて、猫とおなじい舌打ちの呼び名をされてゐた。ちよ、ちよ、ちよ、と舌の先を鳴らして呼ぶと、白い小ちやい、足の指の美しい鼠は疊の上に微な爪擦れの音をさせながら、手のひらに乗りに來るのであつた。或朝、起きてみると襖と柱のあいだに、昨夜襖を閉めたときに過つて挟み込んだのであらう、小ちやい白鼠はぺちゃんこに潰れて死んでゐた。

「可愛さうなことをしたね。」

母、姉、兄、私どもは此の死んだ白鼠をまんなかに置いて、昨夜おしまひに襖をしめた者の詮議がはじまつたが、一番晩く寝た姉が過つて白鼠をはさみ込んだものらしく、姉はしほしほとして元気がなかつた。私は庭の奥のほうに埋めた。そしてもう一疋ゐる白鼠を放し飼ひにすると又失敗するからといふので、金網を張つた箱の中で育てることにし、動物の好きな私とその箱の掃除や藁の取換、食物のことをかまつてやつてゐた。姉が一疋では淋しからうといふので乳母の里から別に一疋貰つて来て、一緒に入れてやつた。乳母の里には白鼠が殖えて困つてゐたのである。

半年くらゐ経つと仔どもが三疋生れ、また暫くすると五疋生れ、金網のなかは白鼠で一杯になつてしまつた。私がゆくと白鼠は網の上に這ひあがつて、刺身のやうに赤い口をひらいて食物をほしがつた。母はどうも臭くていかんと云ひ、姉はこんなに殖えてはこまるに云ひ、私は寒い冬のあいだに掃除をするのが冷たくて叶はんとこぼし出した。そんな間にも又三疋生れ、みんなは乳母のところへ返さうと言ひ出したほどだつた。

そのうち或朝、一疋の白鼠が病氣もしないのにぐつたりとして死んでゐた。からだがかまだ温かいのを私は庭に出て埋めた。次ぎの朝もべつの一疋が死んでゐて、その次ぎの日の

朝も一疋死んでゐた。兄はこれは不思議だと言つてしらべると、白鼠はどこにも病氣をしてゐないが、からだがかぐにやぐにやしてゐて、薄く平つたくなつてゐることに気がついた。兄は白鼠のからだの血がみんな吸ひ取られてゐると言ひ、これは、いたちがかかつてゐるのだと云つた。翌朝になるとやはり血を吸はれたまま、生温かい白鼠の親がやられてゐた。どこから這り込むのかとしらべると、箱の底板が破られてゐて、いたちは晝間もその床下に見張りをし、日が暮れると毎日一疋づつと馳走にありつくらしかつた。箱に繼板をして玄關の方に移してからいたちはかからなくなつた。

ほじろ卵をうむこと

夏のはじめころから今年はいろいろな小鳥が庭の木に來た。山鳩が裏の寺の森に啼いてゐたが、家の山鳩について籠に近い風の枝に永い間止まつてゐたり、土の上に零れてゐる麻種をあさつたりして、一週間ばかりすると何處へか行つて了つた。羽根のさきに藍ばんだ渦卷の紋がゑがかれてゐて、青苔の上にこぼれた麻種をついばんでゐる静かさは、何處か山家に住んでゐるやうな光景であつた。突然、姿を見せなくなつたのは、このあたりを

道ふ自動車の運轉手などの空氣銃に打たれたのかも知れぬ。

別の一週間は珍らしくほととぎすが朝と夕方に渡り啼きをして、きのふは柿の木の下あたりに聲がし、けふは向ふの丘のあたりに啼いてゐて、信州の山にでも旅をしてゐるやうであつた。間もなくその聲がしなくなると、馬込の街道に砂埃が立つ暑い日がつづいて、田圃では麥を刈りはじめた。

冬の時分から一羽の頬白が庭をはなれずゐて、水のあるところで羽づくろをし、實のなる枝の間をわたつてゐたが、けふ偶然に書齋にはいらうとすると、その頬白が障子をあけて置いたので立ち込み、女たちは臺所の目籠をもつて來てつかまへ、みんな昂奮をして、頬白だとか、雀だとか言つてさわいだが、よく見ると庭をはなれぬ例の頬白であつた。さつそく籠に入れ摺餌と粟とを入れてやると、摺餌を喜んで喰べながらすぐなつて了つた。

翌日、籠の底にばかりこもつてゐて、ふくれて悪い毛並の色をしてゐるので變に思ひ、覗いて見ると雀の卵のやうな小さい卵を一つ産み落としてゐた。手でさわつて見ると、卵は何やら寂しい温かさをこもらしてゐた。さつそく、藁を巴のやうに巻いて巢ごもりさせようとして入れてやると、腹立たしげに嘴のさきで一衝きに殻をやぶつて、その柔かい殻

をにくらしげに啄ついて、みんな喰つてしまつた。卵は黄味を亂してながれたが、それには嘴をつけなかつた。人間の手にふれたので怒り出したのであらうが、殻をたべてしまつたのは次の卵の用意にする氣かと、可笑いやら物佗しいやら、氣の毒のやうな氣がしてならなかつた。

めすだから頬白の籠に入れてやれば、めんどろがなくてよいと考へ、同居させて見たが、めすの頬白はをすの頬白に向つて嘴一杯に開けて追ひ詰め、形相替ならぬ物凄じさがあつたのでまた別居させてしまつた。人間よりも動物の方がめすが威張つてゐて、をすはちぢみ上つて震えてゐるくらゐであつた。

頬白といふ小鳥はいろいろな變り聲で啼いてゐるが、複雑でなかなか聞き分けることができない、ちいちい、つうつう、ぶりりりん、といふ囀りの場合はあとの、ぶりりりんが鈴の音いろを持つてゐる。ちえちろ、ぶりりいん、と啼くこゑは鈴蟲をつくりである。へいぜいは、つうつうとほそい聲でさへずり氣が向くと、ちえ、ぶりりり、ちえりりん、ちえ、ちりちりん、と啼く、囀りのあとにぶりりりいんがつくときは、鈴の音いろを高めて行くのだ。閑のあるときにその聲を寫生して手帖にとつておくのであるが、少しづつ變つてゐて高かつたり低かつたりして、よく原稿紙では寫生ができない、つうつうばい、つ

うつつばいと啼くときは、まるで山雀の聲そつくりである。

えびごりうなぎのこと

川鰈は夜明けにはみんな石垣や亂杭の外側にはひ出て、その髯をびんとつつ立て、口のところに手をやつて年寄りのやうにもぢやもぢやと動かしてゐるものである。物に驚くと扇形をしてゐる尾の先にちからを入れ、弓のやうにからだを曲げると、水の中をおはじきのやうに二尺くらゐ先の方に、後ずさりに美事に滑走するものであつた。そして止まつたところでじつと驚いた原因を考へ込みながら、非常にしづかに川底にそろそろと下りはじめるので。しかしその時にもう一ぺん驚くやうなことがあると、先刻と同じい滑走をこんどは二度ほど繰返して、物かげに姿をかくしてしまふものであつた。

夜明けに鰈が出揃うてゐる水中の美しさは類のないものである。私は鯰を釣るために水の中を覗きこんでゐたが、その明けがたの時刻は川えび、石斑魚、鯰など静かにしてゐて、魚といふ魚はみんな夜明けをよるこんで迎へてゐるふうであつた。鯰は意地がきたないからいきなりみみずを付けた餌鉤を呑み込んでしまふ。そして釣り上げると鮎や他のさ

かなのやうに肌のいろが變つてくるのである。私は鉤をさかなの喉のところを外すとき、いつも可憐な氣がしてゐた。さかなの喉が裂け、さかなは悲鳴をあげてゐるやうであつた。けれども川とさかなとを一緒に釣り上げるやうな重い竿の手ざわりが忘れられなかつた。鯰はいつも痛さうに釣り上げられるが、あまり跳ることをしなかつた。はねると痛いつからじつとしてゐるやうにも思はれ、私にはその意生地のない姿がにくらしかつたのである。

私は或朝、石垣の石と石のあひだから途方もない平つたい、眞黒な頭がぬつと棒のやうに突き出され、そして私の餌鉤を非常に大きい口がいきなり呑み込んだと見るまに、すぐさまその鉤を吐き出して了つたものがあるのに驚いた。それはかなり大きい鰻のあたまであつた。私はさつそく少し大きめの鉤に丸のままのみみずをさして、鰻のあたまが覗いた石垣の穴にさし入れた。みみずをいぢくることの嫌ひな私はやつとの思ひで、丸ざしにしたのであつた。鰻はみみずを丸一疋さした鉤でないと釣れないといふことを、私はとうに聞いてゐた。

少時すると石と石のあひだから眞黒なあたまがぬうと出たが、長いからだを出すのが恥しいのか、そのまま、私の餌鉤をしづかに覗うてゐた。私は胸をどきどきさせながら長い

奴が釣れたらどうして釣り上げたらいいか、道路の上に投げ上げるより外はないと考へてゐた。餌釣を鰻の口もとへよせて行くと、何のことはない、すぐ一呑みに呑み込こんでしまひ、それがあんまり勢ひがよかつたものだから水埃がばつと立つたからであつた。そして私はぐいと釣糸を元氣よく引き上げると、糸はぶつとりと途中で切れてしまひ、鰻のあたまは石のあひだにすぐ匿れてしまつた。私は茫然と壯大な鰻のあたまを見失うた呆氣なさで、水の中を見入つてゐた。餌をつけ代へて見たけれど再び鰻のあたまは出て來なかつた。

私はその夏のあひだちう釣にゆくと、鰻のあたまが石と石のあひだからいまにも差しのぞかれて來るやうに、妄想をえがかずに居られなかつた。平つたい頭をしてゐて口もとが少し白つぽく見える鰻は、水の中の龍のやうに私の釣糸をくひ切つて了つたが、釣はうなぎの腹のなかで年々歳々錆て行くだらうと思つた。

へびのこと

薄睡い晝すぎに私は相不變書きものをしてゐたが、すぐ下地窓のほうにかさこそ音がし

たので後を向くと、うなぎの頭くらゐある蛇が闖のうへに爬ひあがらうとしてゐるところであつた。おぢさんまた悪いことを書いてゐるね、とでも言ひさうであつたから、早く逃げないとお命頂戴すると私は獨言をいひ、玄關のステツキ箱にある鞭をとりに行つた。この鞭の中身は鋼鐵になつてゐてアラビヤの荒馬をこなす用途になつてゐたのを、横濱の支那人の骨董屋から購ひ取つたものであつた。私は先づこの鞭で蛇の頭に一撃加へようと考へた。

菊池寛氏の話のなかに勤王の志士が子供のやうにあしらはれて、近藤勇のために殺されたとあつたが、實際、寺田屋討入の時に近藤勇の氣合の聲がみんなの耳にはいる程、そのたびに志士が斬り倒されたさうであるが、そんなことが頭にのこり「子供のやうにあしらはれた」とか、氣合の聲が敵味方の耳にひびいたとかいふことが、かくも人間の命の脆い時代があつたかと不愉快になつて來るのであつた。

私はへびを打つときにいつも蛇を子供のやうにあしらふ、私自身を不愉快に感じてゐた。そしてへびを殺すまいと思ふのであるが、夏にはいつてから子供がつきからつきに病床について、それを離れにねさせてあるのであるが、東と北は寺境になり南は藪に向うてゐるので蛇は離れのなかにはいり込み、女子供を驚かしてならなかつた。そのために發熱

をしたり離れの病室をいやがるので、しぜん私がそれらの命を奪つて禍ひを絶たなければならなかつた。追つて了つても一度這ひ出たところにはきまつて出るものであるから、どうしてもあやめて了はなければならなかつた。

同人雑誌の「さんもん」といふのに松下達夫といふ人の旨い隨筆が掲つてゐて、怪我をした蛇のことを哀れにあらはし、それが二日のあとに蟻に食はれてしまふこと、その蛇は蛇の子供であつたこと、蛇にも子供がゐるものだといふことに考へついたことを記してあつたが、その怪我をしてゐるといふことが私にも應へてならなかつた。蛇といふものは些かの傷を體につけても、それが死因になるほどデリケートな質の生きものであるらしかつた。それはああいふ美しいぐにやぐにやした體をしてゐるから、よほど大切に體を守つてゐなければならぬのであつた。傷口が腐るといふことは蛇には恐ろしいことであらう。

どういふ蛇でも胴のまん中に的確に一撃を加へると、脊髓が折れてしまつて些つとの間身動きができないものらしかつた。初めから頭に一撃を加へるのはいいけれど、それは大抵の場合取逃がすことが多い、それより先づ脊髓に二三撃を続けさまに加へて、動けぬところを狙つて頭に一撃を加へたら大抵取逃がすやうなことがなかつた。そのやうにしたものを土中に埋てやるのであるが、私は私の庭に出てくる奴と離れのまはりにうろつく奴とは、いつも容謝をしなかつた。子供がふせつて風邪をひくのを驚かしてくれては困るのだ。と言つても私は蛇が恐くてならないから殺すのである。蛇をあやめた晩は蛇のゆめをいくつも見ると、私は恐いのである。恐らく人を殺したら殺した時は夢中であつても、後の日にいろいろな妄念が夢や日常生活のなかに現れて、氣の弱い私など人をあやめることなど出来ないであらう。

詩よきみとお別れする

僕はときどき齒のうづくやうな氣になつて小説のなかでのた打ち廻つてゐるが、昔、詩を書いてゐたころにもこの氣持があつた。しかしこのごろでは詩を書いて見たいと考へることが滅多になくなり、詩なんかめんどろくさくなつて了つた。つまり僕の考へのなかには詩の神さまなどお泊りになることがなくなつてしまひ、昔苦しんで置きかえ、書きなほして眺めてゐた二行三行の美しい詩が失せてしまつたのであらう、だから詩をかいで見たいなどと夢にすら考へたことがないし、人の詩を見ても昂奮するといふことがなくなつた。却つてあまり詩のことをしやべられるときまりが悪くなるくらゐである。そのきまり

がわるくなる氣持の中には、ひよつとするといまの詩がわからなくなつてゐるかも知れないといふふうには、詩をよむ氣持にいつも警戒的になり、悲しいあせつた僕がまごつき、自分のそだつて來てゐる詩のなかでかうも窮屈な氣持になるものかと、思ふのである。つまり僕はいつも安心して詩なんかどう變つてもたか、が知れてゐると考へてゐるうちに、詩はほんの少しづつ僕の眼のとどかないところで、變つて行つたのである。これは却々恐ろしいことらしい、恐ろしいといふ言葉はこんなときに言葉の役目をつとめるのだ。

僕はだから詩だけはかかないでゐて、心を穩やかにしてゐたいのである。詩がわからなとか、書けないとかいふ氣持でなしに詩だけはつつかないでゐて、讀むだけに止めて置いてそつとして置きたかつたのである。詩の前で僕はお溫和しくいい子になつてゐた、僕がどれだけばたばた羽ばたいたいても、がいても、どれだけ新しいものを取り入れようとしても、追つかないものや感じられないものはどう仕様がななのだ。僕のなかにある詩らしいものは大方硬ばつてしまつて、役に立たないものになつてゐるのである。堀辰雄は、僕が詩をかけないのは小説とか隨筆とかに詩の精分をこまかく泌み出してゐるからといふふうにつてくれたが、それは或いはさうかも知れぬが實さいに二行とか三行とかの、大切な詩をなくしてしまつてゐるからであつて、大抵の詩人が、ぼやけて詰らなくな

つてしまふのも、結局この二行三行を見失ふてゐる原因によるのだ。これに氣がつかないで、むだな詩をかいてゐることは悲惨である。そんな詩人はどれだけゐるかも知れない。

僕のやうに詩を子供の時から書いて來た人間にとつて、もう詩がかけない、とか、勢ひ込んで詩を自分のなかにたづねることを放抛するといふことは、何ともいへず悲しい。未練なんか少しもないくせによく思ひ切ることができたと思ひ、さういふことに嫉みもおこらないことを快適に思ふのだ。毎日、詩の原稿を書きため、それを書物のやうに綴つて喜んでゐた三十年も前の僕が、けふ考へるやうに詩を打ちやつてしまつてもいいと思ふやうになるとは、ゆめにも思はなかつたことであらう。そして僕は僕のちからが盡きて了つたといふよりも、文學の運命を呑み込むわりのよさを持つてゐたいからである。あらゆる文學のなかでふしぎに詩の運命がいはやく訪づれて來るやうである。それを見分けることも肝要なことらしいのだ。詩の要素には老いは光らない、老いは詩をくさらせるだけである。詩といふものは、しんが止つてしまつたから例令それを書いてゐても、ただの散文でしかありえないものである。

詩をかこうとし、詩がうまく書けた時分の僕はわけなく信じて詩のなかにはいることができたし、詩をつかまへることができたが、このごろの僕はどこまでが詩であつたか、そしてまたどこまでが散文であつたかが判りにくくなつたのである。(これは或いは昔からさうであつたかも知れないが)だから思ひかへして詩から手をひいてしまふ。詩がかけなくなるのもこんな時に多いのだ。

小説では僕は僕のまわりをひと廻りして、ほとんど大抵のものは書いてしまつてもう何もかくことのない空つぽの世界に投げ出されしまつてゐた。この空つぽになつた僕はやつと自分に食つつきすぎたものから放れたので、こんどはいままで手をつけなかつたものにも手をつけなければならなくなり、手をつけて見ると豊富な素材のあることに驚きもしたのである。實際に於て作家といふものは一遍空つぽになることが必要なのだ。空つぽになると人生といふものが文字どほり人生の幅の廣さを見せてくれて、書くことは實に一杯に張り切つて見えてくるのだ。これの経験は全く意想外だつた。もうどうにもならなくなり一行も見付けられない行詰まつた果に突き出されたところでは、なんでも、みんな新しくゆたかに書きつくせないくらゐに漲つてゐるのだ。自分ばかりの手近いものをあさつてゐた窮屈さが、脱け切つて明るくなつた僕にはあまり狭すぎたやうに思へるのである。

詩はきめのこまかい間だけのものであつて、文章が荒廢しかかつた時期や、あまりに人生の底をかツさらつてゐる苦しげな人間には書けるものではない、かいても散文にしかない、詩は美しい青年の手によつてかき上げられるのが本來であつて、ぢぢむさい人間によつてかかれるものとすれば、それは詩ではなくて文章のこまぎれであらう。そんな詩は實にざらにあるのだ。随勢で書きでたらめで書きこぢつけで書き、永い間のごま化しで書いて行けるやうなものには、僕はもう何もいふべきことがないのだ、詩から手を引くといふことはよくよく自分を嚴格に見据えないと、さうはいへないのだ。

或る時期の僕は小説が書けないでゐると、詩ばかり書いてゐてそれで僕を建直しをしようとしたり、詩がかけなくなると詩の悪口をいふやうな氣持で、小説のなかには入り込んで行つて鬱憤をはらしたりしてゐたが、これは二つのうちの孰方かとわかれなないでゐると、その孰方をも完成することができないといふふう考へることがあつた。しかも、その孰方ともわかれることができなかった。小説は直接に生計への重い役目をもつてゐたし、詩はなにやら小説とは少し清いやうなところがあつたし、詩とわかれてしまへばただの碌でなしの小説家になつてしまふとも考へられるのであつた。ただの小説家でもいい筈であるのに見榮のある僕はやはり詩人といふ金看板のやうなものをおろしてしまふのに躊

踏らひ、全く見えすいた男であつた。だからするするに僕は詩人といふ冠をかむつてゐる俗物になり、碌に詩をもかけないくせに書けるやうな顔をおし通して來たやうなものであつた。

たまにかけば僕の詩はふるくさくなつてゐる。ふるくさいといふことがハッキリわかることはまだいいが、古くさいものをかくといふことがわるい、わるいやうな氣がしてくるのだ。

こんな古くさい僕にも、詩の雑誌が新しく出ると、まづ詩を一つ書いてくれんかとか、少々古くてもさし支へがないとか、やはりあなたの詩が雑誌にはさまれてゐるほうが雑誌が確かりしていいとか云つて、私に詩をかかせるのである。私は無理に或る時は感興もないのに詩をかいて了ふのだ。さういふ人間にさへ私は墮落してゐるのである。

小説といふものは書けないからと言つてじつとしてゐると、百年経つても書けるものではない、書けない自分のなかに飛び込んで行つて、書けるまで机をはなれずに自分をいぢめあげると、白状しない罪人が鞭打たれる苦しさから何もかも言つてしまふやうに、やつと書けるやうになるのである。だから結局は自身をいぢめ上げるよりほかはないのだ。だが詩はさういふふう_に自分を苦しめても、もう失くなつてゐる二行三行のものをさぐり當

てることは、絶対にできないのだ、一度、はぐれたらその二行三行の光芒は殆んど生涯かへつて來ないであらう。小説はかへつて來ても、詩はかへつてくることはないのだ。

僕はさういふ物わりのよい、ゆつたりした氣持になつて詩とわかれても寂しいとか、物足りなさを感じるとかいふことはないつもりである。詩といふものに永い間抱かれてゐてその乳ぶさを腹一杯にふくんでゐた僕は、さういふ母親を大切にしてくるに上げていくらゐである。かういふ母親を悲しませることはないやである。

豊島與志雄君は作家といふものが生前にみんな原稿を賣り切つてしまつて、一枚も遺つてゐないことは淋しいといひ、そしてさういふ遺稿に詩が一番ふさはしいといふことを言つてゐたが、あるひは誰が遺稿として最も光つた作品であるかも知れぬ。しかし僕などはただの一句の發句でも、詩はもちろんのこと、凡そ金になるものはインキの匂ひと濕りの乾かないあいだに、みんな印刷になり賣つてしまふのだ。遺稿どころか一行の詩さへ僕の机の抽出しにはいつてゐない、遺稿のある作家はゆつたりしていいものだが、書きながら賣つてゆく身のさういふ生優しいことなどはしてゐられないのだ。詩なぞどのノートをめくつて見ても残つてゐるわけのものではない。なまじひ遺稿などがなくてきれいさつぱ

りと死ぬなら死んだほうがいいのだ。生きてゐてさへ忘れがちな雑魚同様の作家詩人が死んでしまつたら、誰が古くさい詩をたづねてくれるものか。——僕もひとしきり後世をたのむ不甲斐ない、弱みのある氣持を懐いてゐたことがあつたけれど、そんな氣持をもつことを卑怯だと思ひ、ごま化しだと考へるやうになつた。きれい、さつぱりと死ぬのは本望だが、詰らない詩や小説のこまぎれを遺して友人にめいわくをかけることは止めたかつた。あいつもとうたう死んだが、あいつは最後の一枚までお金にして食つてゐた、あいつの意地きたなさに呆れてしまふ、と、いふふうには言はれた方がいいくらいである。むしろさういふ罵りの聲を聞くほうがさつぱりしてゐる。

生涯を詩に托し多くの遺稿をのこして亡くなつた詩人がたくさんにあつた。山村暮鳥とか生田春月とか大手拓次とか、さういふ詩人は遺稿のなかに必然に後世をたのみ、つぎの時代の詩人が拾ひ讀みをしてくれる筈であつた。そしてそのことも實さいに拾ひよみにされてゐたけれど、そんなことがらが僕の身に引きくらべて見て何んの足しになるであらうぞ。いくら感心してくれてゐても本人が生きてゐないのだから、本人には何にもならないのだ、しかしかういふ我儘なことをいふ僕こそ却つて後世をたのみから、さういふ涼しい顔つきをしてゐるのぢあないかと言はれば仕方がないが、實さい本人が死んでゐたので

は面白くもお可笑しくもないのだ。絶世の美人があつて誰々の詩を愛誦してゐるといはれても、本人には見たこともないのだから詰らない道聽途説でしかありえないのである。

このあいだ高橋新吉君の詩集「日食」をよんでゐて、動物園の門の上に大きな虎がそとを覗いてゐるといふ詩があつて、僕は驚いて虎の顔を眼の前にかべた。それからまた岡崎清一郎君の詩集に使はれてゐる不思議な文字の効果をいまだき珍らしいと思つた。この病弱な詩人のゑがく空氣は嘗ての日夏君のやうにこけ威しでない、深い眞實があつた。それから丸山薫君の山にのほつて行く詩のなかで、いつの間にか指の股からぬけ落ちた花のことを書いた詩があつて、そんな、たわいなことが何と旨く詩といふものを盛り上げてゐるかに、ひそかに敬服した。詩といふものはかういふ微妙かであるが深い氣持をそつと持つてゐなければならぬものであると、僕は勉強したくなつたくらゐであつた。誰にきいて見ても丸山薫君は一流ですよ、と、さう解釋してくれた。

坂本越郎君の詩集「暮春詩集」で伊藤整君が何とうまい序文をかいてゐることか、そして伊藤君もいはれるやうにのつぽうで苦ミ走つた顔つきの坂本君の氣のよい詩人らしい一さいのものが、はえぬきの詩人であるに間ちがないことを證左してゐる。「猫の子は白

い、牛乳で育つたので。」といふ坂本越郎はそのやうにふつくりした心のひとである。それからまた乾直恵君は小説はまづいが批評はするどい、菱山修三君を批評してあの人は自分で才能を信じてゐるからいつも一人ですよ、と、うまいことを言つたものである。その菱山修三君は父君をこの夏前になくされてゐたが、夕方おそく菱山君が勤め先からもどつて大森の驛におりと、度たび父君が菱山君を迎えに出て居られた。父君はお母さんにこつそりと何もいはれずに迎えに出てゐられたさうであつた。僕はこの話を聞いて菱山君の悲しみとおなじいもの、あるひはそれ以上のものが感じられたのであつた。かういふ氣持は人間に生きる善良な美しさを與へてくれるものである。

三好達治君の短歌にいた或いは歌であるかも知れぬ詩も、このごろきつちりと隙のない作品になつてゐた。しかしかういふ形式でどれだけ旨くなつて行つても、うまさかきまつてゐるものであるから、そこに三好君が注意すべきであらう。北川冬彦君の場合でも出來のよい詩はハツキリした印象があるが、ひとり合點なところがある。小説のなかで北川君はつとめて詩をころしてかかつてゐるが、僕は却つて反對に小説のなかにこそ詩を生かしてほしいのである。さういふ北川冬彦はおそらくもつと、いはゆる讀みばえのある作品を見せてくれる筈である。詩人のかく小説は詩がありあまつても間ちがひはない、それをじ

つと殺してかかることは作品をきうくつにするのだ。詩といふものは散文をかいてゐるとそのなかに、よりよき慈養分になつて泌みわたつてゆく、これを豊富に持つてゐる作家といふものは天下に稀なものである。

まめなること

僕は人からよくあなたはまめですね、と云はれる。つまり僕は頼まれた原稿をきちんと期日までに書いてしまふから、あなたはまめだといふことになるのである。このあひだ、詩の雑誌に詩をたのまれ、例によつてきちんとして書いて渡すと、あとであなたはまめだといふた。それからまた家の女だちも僕のことをまめだといふことがあつた。そんなに僕はまめだらうか。いつたい、まめだといふことには孔々として倦むことを知らざる意味か、それとも、どんな原稿でもきちんとして切までに書き上げて渡すことをいふのか、それとも又あんまりまめまめしく原稿をかくことは、まめでいけない、文學者といふものはもつと大きくなければいかん、せかせかとして切なぞをきちんとして守るのは見ともよくないといふのであらうか。

あの男はまめだからといふ意味には、いくらかそのまめだといふなかに親しい軽べつの意味がある。まめであることはまめでないことよりいい場合があるのか知らんが、あの男はまめだといふ意味にはあの男はちよこちよこしてゐて重みがないといふふうにも、受取れるのだ。もう一つまめだといふには遠廻しの笑ひと戯談とがまじつてゐて、まめだといはれた人間の神経にさわるのだ。發句もつくれば詩もかき隨筆もかく僕は、さういふ文學にはまめまめしい男であつて、そんな細かい文學などをかかない人から見れば、いかにもまめであるかも知れぬ。

しかしながら文學といふものをあらはす原稿には、まめまめしくなければならず、よく分け入つてももの心に行きつかねばならぬ。まめでないより、まめである方がいいのだ。第一このまめまめしいといふ言葉が卑俗でいけないのだ。もつと適切な言葉がないものであらうか。

女 心

馬込はまだ田舎であるから使に出た女達が息せきかへつて来て、途中でずるぶん恐かつたといふ。男の人が通つてゐて何かしさうな氣がしたから、はじめは早足であるき出して

ゐたが恐くなつてしまつて、家まで走つて来たと言つた。僕はこれを聞き終つて靜かに腹が立つて来たのである。

僕は驛近くで酔うて歩いてかへるときは、いつも一人でふらふらして歩いてゐた。たまに若い女のひとにあつたりするとわざとらしく僕を避けて、恐さうに肩先をすぼめて通つて行つた。僕は心で笑ひ、すべた女よ、避けたまふなかれ、安心してゆきたまへと思ふのであつた。そして家の女だちに急にかけ出したりするのが、却つて男の心を荒^すませるのだ。男はよくよくの事情がないかぎりそんな女なんぞに、でたらめに悪戯するものではない、女の方がいつも悪考へをする度合が多いのだ、と、さう言つて家のものらもやはり然うかと思ふと、女心はたのみにならぬものに思はれた。

山だより

一、山中酒仙

小杉天外さんから毎年避暑中に二度ぐらゐお使ひが来て晩食に招ばれるが晩食といふよ

りも寧ろお酒を飲むのが主である。今年も夏が来て先生が輕井澤に見えられ例に依つてお酒を飲みに来いといふお使ひがあつた。今年三笠ホテルの近くにお家があつて輕井澤から相當に道のりがある。三笠ホテルは詩人津村信夫の父君である秀松博士がゐられるので、ご無沙汰かたがたお寄りして見た。雨上りの一萬坪もある庭は緑淺い木立が芝生を抱きこんで、青硝子の瓶の中にホテルが建つてゐるやうなものだつた。快談の後お別れして小杉先生をたづねた。

椽側が幅一間もある古寺のやうな別荘の奥の露臺に待つてゐると、老將軍のやうな小杉さんが美しい白髪を梳つて、おう、と云つて出て見えられた。久瀧を叙してゐると、去年君と此處で會つてから文士といふやうな人に會つたかしら、さうさう十一谷義三郎君に會つたくらゐかなと云はれる。それほど静かな晩年を曆の上に歩いて笑ひながらゐられるのである。耳の療治をして見たが却つて遠くなつたやうだと言はれ、耳の遠いのは永生きする微だといふ人があるが詰らんことを言つたものだ、先生は何故か憤然とさう云はれた。遠い耳は遠いままにして置いた方がいいともいはれた。そして昨日の朝だつたかに雉子の母親が子どもを十羽もつれて歩いてゐるが、雉子といふものは子供をたくさんに生むものらしいね。どうもその愛すべき姿ときたら僕ははじめて見ましたよといはれた。燒野の雉

子とか何とかいふが、それほど深い愛情を持つてゐるからさういふのであらう。私はまだ見たことはないが、雉子が子どもをつれて歩くのだけは一遍見たいと思つた。

先生の酒は二合くらゐで私とちやうど良い酒のお對手であつた。盃がからになるとお酌をしつづけられてゐる人の盃辯が出て、私の方にととき盃をつき出されてお酌をいそがれる。私は氣がついてお酌をする。私の盃がからになると先生はすぐに酌がれた。君は本統の酒のみになつたらしく餘り食べないねといはれ、先生は鮎の鹽焼を一疋、蒸あわびを一皿、幾きれかの刺身、鯉のおつゆをひと椀、からすみを四切、茹青豆をひと皿、煮物椀のなかのものをつまみ、そして家のものが心配をしてあまり酒をのまさんのでねといはれ、最後にご飯を二つと小物鉢に一杯入れた漬物をみんな召し上つて、酒のあとに君は甘い菓子をよく食べたが、このごろはどうかねと云ひながら更に新鮮な眞桑瓜を三きれ食べられた。明治文壇の老大家は驚くべき健啖家の範を垂れたあとで、君のひとしきりの小説はよまなかつたが此頃のはいいねと云はれる。徳田さんや近松さんの話が出たあとで、お茶を一杯ゆつくりと喫まれた。夜道が暗いが散歩もいいといはれ外に出た。くるまが來たので輕井澤の町まで乗つて、輕便電車が來ると、突然あれに乗つて迎へに行かうとさういはれると奥さんにはお關ひなしに走つて行つて、電車の座席に坐りこまれた。お嬢さんの旦那

さまである高柳賢三氏が今夜見えるといふ電報が先刻着いてゐたが、迎へに行かんでもよからうといはれてゐた。だが、驛行きの電車を見るとときふに行かれる氣になつたらしく、その時の走り工合に若い時分の先生の姿がちよつとの間窺はれた。

二、百合の花粉

庭の朴の木をゆすぶるものが居て、猿かと思たら一尺くらゐある木鼠であつた。木の枝の裏側をくぐり抜けて裏山の落葉松の老木をつたひ、姿を見失うて了つた。間もなく朝の散歩からもどつて来た娘が左の足の膝から下を血だらけにし、自轉車から落ちたのだと言つて青い顔をしてゐた。「自轉車で怪我をしたらもう乗せんぞ」と云つてあつたので、もう自轉車は取りあげるよと私は怒鳴つて置いた。去年あたりから自轉車に乗れるやうになつてから、歩くのが厭になつたと言つて自轉車ばかり乗り廻し、うしろに弟を小荷物のやうに乗せてゐた。午後禁を解いて自轉車に乗つてもいいと云つてやつた。

今朝の七時の汽車で追分町へもどつた筈の堀辰雄君がぶらりと来て、九時の汽車にしたと言ひ、十一時まで話込んでやつと追分にかへつて行つた。夕方までに坂本越郎君が来て、花賣が緑の木立のなかを花籠をかついで行くのが綺麗だと云つた。松村みね子さんと宗瑛さんが見えられたが、結婚した宗瑛さんは瘠せて涼しさうであつた。庭の椅子にねころんでゐると氣難しさうな顔をした伊澤他喜次さんが、やさしい眼付で庭をちよつと見て通つて行かれる。毎年顔を合して居るが話をしたことがない。

去年集會堂で松坂屋トーキー會が映畫會をひらいたが、今年も映寫してゐるので行つて見ると窓々は依然鐵條網を張つて外から見られぬやうにしてあつた。寒村の子供達は映畫など見たことがないから、窓のカーテンの隙間から覗いて物言ふ活動を見て楽しむのだ。鐵條網なぞまで張つて警戒しなくともいいのにと腹が立つてならなかつた。去年もさうだつたので僕はキネマ旬報誌上で注意しておいたから、今年は取り除いて子供達に見せてくれるものと信じてゐたのである。

集會堂の草場から出てテニスコートの方へ歩いてゆくと、西洋の女の人の背中に金茶色のシミが一杯についてゐた。何だらうとよく見ると百合の花粉がついてゐたのである。いかにも西洋人らしい感じであつたので映畫會の鐵條網のことを些との間忘れた。今年は西洋人がとても多く獨逸、ロシア、米國、澳國、英國の各大使館が、うしろの方に國名を記した自動車を馳らしてゐた。

西洋婦人で大腿から下を裸にした半ズボン姿や、背中をそっくり露はにしてゐるのや、

随分思ひ切つた扮装で往來を散歩してゐる人が多かつた。只、輕井澤で日本の女の人を見るときにその肌がこまかく色が複雑で美しいかが分るのだ。そして外國の人達が自由に振舞うてゐるのを見ると、腹は立たぬが烈しい愛國の心が湧くのである。僕などは幕末時代に生きてゐたら頑固な保守主義にとらはれてゐたであらう。——同時に西洋へ行つて見たら日本を愛する心が想像のほかに強く働いて、望郷の心ばかりに動くにちがひない。

夜中に誰かがそつと迂りのよい硝子戸を開けるものがあるの、顔を擡げて見るとこの間から馴れて遊びに来てゐた白い三毛の猫であつた。村の八百屋の猫であるが終日私の家にてゐて食事をし、飼家にもどつて行かないのである。彼は私の顔を見るとご主人まだお眼覚めかなといふやうな一瞥を加へると、子供と子供のあいだに寝ごこちのよい空いたところを見付けて、おもむろに横になつて寝るのである。

三、猫女之圖

永井龍男君の小説集「繪本」の箱がはりの包み紙に昔の江戸繪をそのまま用ゐてあるが、それは瀧の湯といふ風呂屋の風俗で、入浴者は凡て猫であつた。女の入浴してゐるのを諷刺的に甚だ肉感的に色彩を施して表したものである。猫は白猫で黒いぶちを持つてゐる。

が、立膝をしてゐるのやお臀を洗つてゐるのや耳をふいてゐるのや入浴中なのや、瀧に打たれてゐるなど、悉く膝がふくれて胸がふうわりと白ぼつたく、太腿は女そつくりである。わいせつなところなど子供らしくて面白い。アングルの土耳其風呂は輝くばかりの美しい肉體の蒐集畫で、あふるる肉感があるが、この繪は肉感がたいへんに滑稽じみてゐて罪がない。女をえがかずに猫をあらはしたところにこの繪の作者の皮肉があるやうである。

江戸時代の風呂屋の二階はお茶に菓子、果實、酒、その他簡単な肴も出たらしく近代のカフェーに似たものがある、些つとした相談事や氣晴らしに風呂屋がもちゐられたものであらう。この繪にも二階が湯殿の高にあつて猫のお大盡があぐらを掻いて酒をのみ、若いにやん子が耳と耳の間に赤いりぼんを巻いて赤豆しぼりの帯姿で、おすしのやうなものを持つて坐らうとしてゐる。さうかと思ふと黄味がかつた年増女の装束で梯子段を上つてくるのや、銚子のお代りを持つてゐるのなどある。中庭を隔てた下の座敷では藝者の猫がべたべたした赤の下着に紫の羽織をはをつてゐるのもあり、いなせな下町猫が浴衣がけでお茶を受とらうとしてゐるのもある、みんなぼちやぼちやした裸のにやん子はこの繪の作者の狙つた太股を皮肉にえがき出してゐる。にやにや笑ひながら下手物繪師が描く渡世振り

が思ひやられて、却々興味が深いのだ。

私など皮肉や諷刺は言へないで文學正直の一途をはしらねばならぬが、文學のなかで皮肉や諷刺はこの繪の頓馬で面白い効果ほど上らぬものだ。先年シヨオが來て映畫のなかでその身振を見て知つたが、とても我々東洋の國びとはあ面白く見榮などは切れないあれほど高齡になつても、あんなに氣障に見えるからには、私どもの年輩の時分には全く鼻もちがならなかつた老青年であつたであらう。落着き拂つた日本にシヨオなぞ來ても何も分るまい、分つてたまるものかといふ氣もした。チャツプリンは曲者だけあつて日本にくるとすぐ女の匂ひをかき廻つてゐたが、やはりどれだけでも分らなかつたであらう。映畫の興行師ではあるが僕はこのごろ彼を猿芝居の興行師のやうな氣がした。あれほどの大名を爲した人も時代といふものには勝てないで、うしろ退さりを初めたことを考へると時流を衝いでゐるときが過ぎたらもうどうすることも出来ないものらしい。あんまり宣傳をやりすぎたためであらう。そこにゆくと文學者といふものは作品の宣傳をしないで、却つてそれを言はれると萬獄を抜くやうな作家であつても、ちよつとの間赭い顔をする位である。世界のあらゆる仕事の種類を通じてかういふ初々しい、いたいたしい勿體ないほど良い性質をもつ人間がどこにゐるであらう。そしてかういふ人間にはじめて文學がさづかつてゐるといふことも有難いことだ。ひと眼には食へない顔をしてゐてもとても堪まらないよい人間が仕事をする文學であつてこそ私どもは安住してゐられるのである。これは甚だ甘い話であるが甘くなると心が素直になるものだ。

齒痛音樂

齒がしくしく疼くと、齒のなかで厭らしいどんちゃん騒がはじまり、三味線や笛や太鼓が遽かに鳴り出すのである。僕はその騒ぎのなかでじつとして居なければならず、いやでもそのどんちゃん騒ぎを聞かされるのである。僕はそれらの道化者を連れて齒をなほす先生のところに出かけ、そいつらを退治してもらふのである。先生は眼に見えないほど微小なバイキンの道化者を片ツ端から征伐してくれるのであるが、先生も數萬の道化者は、一週間や二週間かかつては征伐できないと見え、さまざまな戰術と科學戰法をもちひられ、並々ならぬ苦心をされるのであつた。

僕は例によつて先生の玄關わきに梨が實つてゐるのを見ると、腹が立つてくるのであ

る。いつでも梨の實のぶら下がらない時はなく、ぶら下つてゐるころに痛むのであつた。それにけふは赤ん坊が一人座布團のうへに寝かしつけられ、赤ん坊はぎあぎあ喚き立ててゐた、赤ん坊はまだ齒が生えてゐないから痛む筈はないが、その母親が治療中であつた。赤ん坊のふにやふにやした両手の指をしきりに握つたり廣げたりして、それを見てゐると僕の齲齒のなかの小僧どもはやけにぢやんぢやん騒ぎ立てるのである。僕は頬をおさへてみ國を守れ齒を守れといふ宣傳びらを見ながら、齒の滋養になるといふ、りんご、ほうれん草、わらび、とまと、ひだら、するめ、などの繪解きをしたびらを眺めてゐるのである。

赤ん坊の母親は若い奥さんであつた。頭髮は結び立てらしく白粉もぬり立てであつたが、着物はくしやくしやに皺がよつてゐて、美しからぬ素足をむき出しにしてゐた。僕は足袋をはいてゐたのでよかつたと思うた。男は禮儀として足袋をわすれてはならぬものである。

僕は齒の先生の前で口を開けてゐた。僕の口のなかは電車が通れるくらゐ大きくなり、

眼をとちてゐながら先生の搜針がむし齒のなかにゐる、悪戯者を治療されるのを待つのであつた。先生はまだ若くてちよつと岡田時彦に似た顔をされて、このあひだ結婚されたばかりであつた。時々スリツパをお直しになられたり壺に花を投げ入りにされたり、玄關をきれいに掃き清められるのも奥さんのお仕事であつた。新刊雑誌の整理された棚やクツシヨンの白布の清潔になつたのも、瞳のおほきな奥さんが見えてからであつた。僕は五年間この先生に齒を診てもらひ、その時だけ顔を合すのであつた。先生は楽しいであらうか。さういふ氣持でしばしば夜この治療室からもれる、途方もない明るい電燈を見てとほろこつた。樹木の多い前庭一杯にもれる明りはハイカラな住宅によく釣合つてゐて、先生は楽しいにちがひないと思はれるのであつた。

先生の前庭は柿だの楓だの、松だの例の憎らしい梨の木だの藤だの、椎だのそんな植木でうつつさうとしてゐた。これは先生のお父さんが好きで植ゑたものらしく、先生はそれを眺めるだけの役らしかつた。僕たち患者の椅子の窓さきの正面に、それらの青葉しかけた木々が見えるので、何より清々とした氣持になるのであつた。齒のいたむとき樹の青いのを見ることは全くの藥であつた。いはんや治療中には一そう氣が爽快になるのである。

治療中、僕は搜針が氣になりちよい舌のさきでさはつて見ようとして、そんなことをしてはならぬと反省して止めるのであつた。先生は無口で一言もいはない、僕も滅多に口をきかなかつた。齒のなかのどんちやん騒ぎはややしづまつてゐて、三味線の細い糸を小指できうきうこするやうに鳴るだけであつた。ちくちく疼くのが遠くなり先生は綿をまるめては投げ込み、それを又つまみ上げ、かちんと金物の汚物入れに音をさせ、また別の薬のついた綿をまるめて齒ぐきをこすり、そんなことを五六遍くり返して居られるのである。僕は若い心臓の音を先生の胸から聞かうと考へて見たり、先生は毎日曜日ごとに郊外から東京に出て行つて、一たい何處を散歩されるのであらうかと考へて見るのである。毎日曜日は休みであり先生は出かけられることになつてゐて、僕のどんちやん騒ぎがどんなに烈しく底ぬけになつても、僕はそのまま往生してゐなければならぬのであつた。僕は日曜日になるべく物を食はないやうに朝から齒の機嫌をそこねないやうに、ぬるま湯で啜嗽をし清い空気を吸ひ、僕自身ではなるべく怒らぬやうにし入浴や紅茶コーヒーは一さい控へて、齒にさはらぬやうに心がけてゐた。

僕の友人にいちどきに六本の齒を抜いた豪傑がゐて、とうたう六本抜齒しましたよと僕

のところに来て云つたが、僕は呆れてしまひ、君は鬼か蛇か一ぺんに六本抜くなんて恐ろしい男だと感嘆していふと、何んでもありませんよとけろりとしていふのであつた。僕は抜くべき齒も抜かずにそつとして置き、それを抜いたらどうかと先生からいはれどもしたら、たちまち反對しながら一生苦しんでもいいから腦貧血を起すやうなことをしたくないといひ、抜齒の恐ろしさに身の毛をよ立つを覺えるのであつた。しかるに友人は鬼か蛇か一ぺんに六本も抜くなどといふことは思うてもぞつとするくらゐだつた。抜齒したあととはさつぱりしてこんなにいい氣持だと、義齒を舌でさはつて見て大いにその快適さを證明するのであつたが、僕はしまひに齒を六本も抜くやうな男は神經なんかない男だ、そんな大それた男は友人として恥づべきぢやないかと云つたが、痛い齒をかかへて一生どうどう廻りをするなどといふ薄志弱行の徒こそ自ら愧死すべきではないかと友人があべこべに云つた。いや一生疼いてゐても一ぺんに痛い目に遭ふことはいやなんだよ、いまの僕の齒を抜いて見たら僕は貧血をおこして卒倒してしまふよ、人間には齒を抜いていい人間と却つてわるくなる人間とがゐると、僕は剛情に抜齒に反對するのであつた。實さい、七八年前に齒を抜きかかつて抜けなかつたから半分で止めたことがあつた。そのときは老先生であつたがそんなに蒼い顔をなさるくらゐであるから、お止めになつた方がいいです。貧血して

卒倒でもなすつてはあとが面倒ですからといひ、先生は半分ぶらぶらに動いてゐる齒をそのままにして、中止してしまつたのである。僕はあと一年間といふものは毎日半抜きをひまさへあれば少しづつ動かして行つて、とうとうその年の冬に自分でほろりと抜いてしまつた。齲齒のなかは海綿のやうな穴だらけになり、僕はそれを天の一角に向つて抛げ打つて三十年間戦ひつづけた齒のために祝福したのであつた。

僕は齒の治療中に先生が薬をつけたり綿をむしつたりして居るあひだにも、口を開けてゐなければならぬであらうか、その間だけ口をふさいで憩んでゐていいものであらうか。口をぽかんと開けてゐるといふものは馬鹿くさいものであるから、しばらくでも體面を重んじて然か爲すべきではなからうかと、さういふことを考へるのであつた。自分で口を開けてゐて、これは少々馬鹿づらだぞ、と、氣がつくが治療中だから先生は勿論そんなことは、考へないかも知れなかつた。

僕はまた家庭では、子供が夜中に齒をいためるときは自ら齒醫者の立場にゐて、ケレオソートを綿にしめして急場の間に合せるのである。子供は齒のいたみがなほるとすやすやとねむるが、こちらは旨く治療を終へたので愉快になり、齒の先生も僕らを治療するときにはこんな氣持でこともなく、やつてしまふのではなからうか。果して然らば僕らはお醫者の前では子供同様なものかもしれぬ。子供同様のものである僕らはぽかんと口をあいて仰向きになつてゐたつて、何の體面もあるものか、安心して鮫鱈のごとく大口をあいて治療されるべきであらう。

書物雜感

僕の處女詩集は二十八の時に自費出版をし、五百部印刷をした。それを前から話してゐた本郷三丁目の文武堂に、製本屋からすぐに届けてもらひ、その晩小切手で百六十圓貰つた。そのうち百圓を文武堂のすぐ前の覺石道に待つてゐる製本屋の店員に渡し、きれいに引換に金を拂つてほつとした。十二月の中程で師走に近い本郷の通りはごちやごちや歳暮賣や通行人で、忙しさうであつた。

僕と一しよに来てくれた多田不二君と、本郷座のそばのカフェで遅くまで祝の酒をのんだ。そのカフェに金澤から来てゐる女がゐて、しんねりした感じの少女で美人であつた。

そこへ多田君とよく通うて行つた。

「愛の詩集」といふ題簽は甚だ臭みがあつてこのごろ厭になつたが、その當時はそれで得意だつた。印刷と紙とで百五十圓位拂ひ、装幀は恩地君がしてくれた。恩地君のゴヂツク文字が、そのころ流行つてゐて、装幀家としてのこの友の特徴のやうになつてゐたが、おそらく恩地君の装幀として出色の方であらう。少女ネルリの顔をぜひ描いてくれなどといふ我儘を容れてくれた恩地君はよい人であつた。表紙の眞紅色も恩地君が見付けてくれたものである。

文武堂に届けた翌々日に行つて聞いてみると、二十部くらゐ賣れてゐて、正月の中程にはみんな賣り切れてゐた。そしてあと金をたしか四十圓くらゐ貰ひ、僕は豫想外であつた。文武堂の主人は詩の作り方のやうな書物を出したいが、書いてくれるかと云つたので僕は引受けてそれを書いたが、甚だ拙い書物だつた。しかしそれもよく賣れたらしかつた。十年くらゐの間に時々その版を重ねたが、僕は處女詩集を引受けてくれた文武堂主人に金のことでは、僕らしくなく謙遜にしてゐた。あのころ僕のやうなやくざ詩人にあれだけの金を拂つてくれる本屋は、東京中には彼だけであつたらう。僕の暮しも樂になつて、たまに本郷に出かけ文武堂の前を通ると、おやぢはゐるかな、文武堂主人に仕合せあれ、

と、いつもさう思はぬわけに行かなかつた。

僕の「愛の詩集」はドストエフスキイを讀んでゐた時分で、その影響を受けてゐた。人道主義のやうな譯の分らぬものが僕をつかまへてゐて、動かさなかつたのである。恐らく市井の放浪生活から足を洗つて身も心も落着いた時分だつたので、よく讀むものが頭にはいつて行つたのであらう。酒も廢してゐたくらゐであるから、よほど自分を建て直さうと勉めた時代であつた。いまから考へると、あの時分にドストエフスキイやトルストイをよんでゐなかつたら、あと五六年くらゐ私の成長することが遅れてゐたかも知れないのだ。規則的な勉強らしいものを一生のうちで一度もしたことのない私も、自分がいり込んで勉強しなければならぬといふ考へをもつたことは、僕の生涯のうちでも轉機として可成によい結果を得たわけである。

「愛の詩集」出版の翌々年に、「抒情小曲集」をやはり自費でつくり、文武堂に托した。五百部十部刷つたがこれも半年の間にみな賣り切れた。夏のあひだに印刷をしたので、紙屋とか製本屋とか印刷屋とかを暑いのに馳け廻つた、その暑さがいまでも忘れられない。廣川松五郎君に装幀をして貰ひ、三色版であつた。

自費出版といふものの経験では私などは旨く成功した方であるが、近代にあつては私のやうに恵まれた出版が却々覺束ないであらう。殊に無名に近い詩人などを對手にしてくれる書店は天下に稀であるにちがひない、それに印刷や紙、製本などといふ慣れない仕事をすることも、却々容易なことではない。その頃の活字とは違ひ、このころでは九ポイントとか、何々ポイントとか、殆ど私には活字の名前さへ分らないくらいに、改められてゐるやうである。

紙にしても一連といふのは五百枚であつて、四六判の紙とか、菊判の紙とか、四六二倍の紙とか云つて、ちやんと定つてゐるものであることもその當時は知つてゐたが、このころでは紙のことなど忘れて了つた。その時代にラフといふ紙が流行つてゐたが、近頃あまり流行らないのは、紙にもまた烈しい流行があるのであらうか。ひと頃、コットンといふ輕快でつかのある紙がやはり、僕も隨筆集などにつかつて見たが、あんまり輕くてぽかぽかしてゐるので好かなくなつた。芥川君はこのコットンが好きで大ていの著書の印刷紙にコットンが選ばれ、全集本にもやはりそれが用ゐられてゐた。あれほどの人物が最後までコットン紙を愛してゐたのも、紙質に柔みがあつたために好いたのではなからうかと、私は考へてゐる。

書物といふものは凡ゆる蒐集品と同じく、どれだけ集めても集め足りないものであつて、次から次へと必要があり欲しくなるものである。出版される數もまた非常に多い。これを繙讀するといふことと購入して蒐集するといふには莫大な費用と時間を要するのだ。ひとしきり私は西洋の畫集がほしくなり一通り揃えてゐた。また木版の俳書に凝つて大ていの古板本をあつめて見たが、どれだけ集めても足りるといふことがないので、このころでは一生手離さない本でないと購めないことにし、坐右には一冊の書卷をも置かないことにした。本は二冊あれば五冊ほしくなり、十冊あれば二十冊ほしくなるやうになるから、寧ろ、最初から書物はためないことにし、所蔵本千冊くらゐを賣拂つて見てほつとしたやうな氣持になつたのである。只、芥川君から贈られた十二三冊の署名入りの小説隨筆集だけは、私が所蔵するよりはと思ひ、故郷金澤の縣立圖書館に寄附をし永代保存方を依頼した。それを見た人も故友の眞蹟を偲べるわけであり、僕も見なければ何時でも見られるからである。何時か金澤から訪ねて來た學生がそれを見たと言つたが、さういふ便りを聞くことも懐しい。以後、よき本があつたら、どんどんその折々に寄贈して所蔵して貰ふことにしてゐる。私が持つてゐて賣つたりなぞするよりも、どれだけ社會的にききめのあ

ることか知れないからだ。

私自身の書物は寄附することは、少し恥かしくていやだが、もはや自著等身をなし、三四十冊をかぞへて見るとそれを自分で持つてゐることもいやであるが、いづれ手近い圖書館に送つてをいて、いつでも見られるやうにしたいものである。その方が自分で持つてゐるより遙かに便宜であり、本をもたない静かさを感じるやうである。本といふものは静かなものであるが、どうも私には騒々しくてならぬ氣がする。本棚にぎつしり詰つた書物の列を見ると、さながら百鬼夜行の遽しきを感じて、壓迫もされ喧々囂々の情に堪えないのである。書物といふものは机上一冊だけ孤獨に置かれるべきものであつて、數卷を積みかさねてをくべきものではない、一冊を一冊として愛藏すべきものであらう。

書物を貸して返されないのは、お金の場合とちがひ、折々おもひ出されて來て、返してくれないかなと思ふことが度々ある。お金は貸した當時にちよいちよい思ひ出すけれど、少し遠く月日がたつとさつぱりと忘れてしまふものであつた。だがわづかな金で買へる書物が返つてこないと、その記憶は永い間頭にのこつてゐて不愉快だつた。つまり書物といふものが金などよりもすつと複雑な感情をもつて居り、また反對に所有者になつてゐる

純情をもつてゐるものであるから、それを連れ去られ返されないのは、神経にもこたへてくるのであらう。しかも、さういふ時に書物の装幀がいちちやく胸にうかんでくる、そして装幀といふものの役目が却々に重大であることを考へるのも、そんな時である。装幀は記憶されるべき感情をたくさん持つてゐることがわかるのだ。色彩、形式、厚さ、文字、重さなど、繰り返して考へ直されてくるのだ。装幀が單なる目つぶしであることは幼稚な考へであらう。

このごろ飛び離れた數奇を極めた書物が刊行されるが、装幀以上の装幀を試み多少おもちやのやうな感じのする本を見ると、内容とびつたりしないのみならず、惡趣味だと思はざるをえない。装幀は飽きないのが最もその要を得てゐるのであつて、數奇、美麗を衒ふのはよくない。異つた材料を用ゐることはいいが、殊更に装幀に苦心のあとを思はせるのは、すこし臭いやうな氣がするではないか。堅牢であつて飽きる事のないのは装幀の奥義である。

葭と蘆

荒川は葭と蘆の美しい洲を處々に見せて、ゆつたりとした豊富な流れをふくらがしてゐたが、あんまりふくれ過ぎてはじ切れさうであつた。僕は腹がくちくなり、しやがんで葭切の啼くこゑを聞いてゐた。そして僕はまた車を馳らせてゐるうちに洲にひと塊の鐵材が積まれてゐるのを見つけた。

船の胴や橋梁の毀れや鐵骨の朱銅色に腐れかかつてポロポロになつてゐるのが、何年前からさうしてあるごとく金屬の音さへなくしてゐた。僕は都會のしやりかうべや船の胴骨を杖の先で叩いてみると、鱗のやうに毀れ落ち、えぐい臭ひの埃さへ上げてゐるのを眺めた。劇場、工場、橋梁、そんなものが僕の杖の先にあつた。

記憶は化粧を

あまりにも美しく晴れたので私はたうとう或る記憶を呼びおこした。記憶は化粧を、僕

は人の言葉を、そして僕の庭は花や香氣で一杯になつた。僕はしかし顰めつらをし、僕の喜びに似たものをあらはすまいとしてゐた。人間は或る年齢に達すると喜びも悲しみも、まつすぐにあらはすことが出来ない、そんなことをすると人びとは馬鹿呼ばはりをするやうになるからである。だから僕も聰明な人間のやうに敢て顰めつらをしたのである。

博物館

上野公園の噴水を眺めてゐるうちに、水の尾が北のほうにまがり僕は生暖かい風を感じた。わたしの若い時分の星は博物館の窓さき引つかかり、記録はとうのむかしに焚かれてゐた。

道路には鶯が一疋綱につながれ、餌にあたへられた雀のはらわたを食ひ散してゐた。わたしがかういふ街を歩くことを好むといふのか。

目録

126

七月一日。日曜日、燕が鳴いてゐる。

杏の實がはじめてなつたのが熟つて二三日前から二つ三つづつ落ち、けふはもう數えるくらゐしか見えない。甘たるとい、ほたほたの杏は僕に子供時分のことを思はせる。よい樹を植えて置いた面白みを感じる。植えるときはめんどうであるが、山吹色に茜の濃いほくろのある實を梢の間に見ることは嬉しい。拾ひあげると日の光を吸ひこんで赤ん坊の手のやうに温かく柔らかい。

菱山修三君のくれたジイド全集の「アミンタス」をよんだ。堀君の文章によく似てゐる。文章のあとさきに食つ付いたりするものを避けてゐる表現が眼立つ。こんなところが堀君に似てゐる。「美しい村」のなかで僕のかかない、氣をつけてゐないものを書く堀君はやつぱり感情にむらがない、僕はもう「美しい村」である輕井澤のことを書きつくしてゐるやうな氣がするのだ。「美しい村」のなかで僕はツルゲネフを思ひ出した。ツルゲネフの

風景のなかによく美少女があらはれるが、あの時分の露西亞には美人が多かつたのぢやないか。

多田君、あつし少年を連れて來た。あつし君は多田君の長男で十二、非常に美しい少年。うちの朝子が留守で何とも逢はせることができない、——夜、竹村君が來てすし食ひに行かうといひ出かけたが、十一時になつてしまつた。馬込は蛙の聲で一杯だ。

七月三日、月曜日、ぬかあめふる。

夜十一時に眼をさまし、何氣なく傍にねてゐる朝子の手にふれて見ると熱い。額にさわつて見ると熱があるやうである。朝巳の額とくらべて見るとはるかに熱い。妻を起して計つて見ると八度二分あつた。女中を起し、女中は自動電話をかけに行き僕はさかな屋を起して、氷をわけて貰つた。快よくいやな顔もしなかつた。バケツに氷を下げてかへる途中、電話をかけに行つた女中とあひお醫者がすぐ行つてやるといふ返辭であつたといふ。庭のそと内の電燈をともした。暑いので縁臺で醫者を待つてゐると、すぐ見えられた。風邪だといはれ女中は送りの自動車で薬をとりに行つた。明るい庭のなかに氷を砕く

127

音が烈しくひびく。女中が自動車でかへつて来てみんな寢床についたのが二時近かつた。病氣さへしなければ子供はいいものだが、時々さわぎが起つてこまるのだ。子供はいつも何時の間にか風邪をひいてゐる。それを見つけ出すことが一仕事だ。

128

七月六日。

朝子全快。

こんどは朝子の風邪がうつり、朝巳が熱を出し、お醫者に來てもらふ。やはりうつたのらしい。

七月十一日。

子供たちがみんな全快したので、輕井澤へ出かけることにした。朝六時家を出る。いい蟬が鳴いて馬込の夏も深くならうとしてゐるのに、氣が惹かれる。

上野で堀君がヂイド全集をもつて來てくれて、明後日あたり行くといふ。芥川の奥さんが見えられたので喫驚りしたが、千が瀧に行かれるので家のことを心配してゐたお禮に見えたので却つて恐縮した。奥さんはお瘡せになつて居られた。

輕井澤に着く。雨、夜もふる。

七月十二日。

庭が荒れてゐるので雨のはれまに少しづつ掃除をしたが、植木屋は明日來ることになつてゐても、待ち遠い氣がした。

つるやに行くと、堀君からけふ行くといふ電報が來てゐた。午後堀君が來て輕井澤になれてゐるので有難みがすくないと云つた。夕方セルを着るほど涼しくなつた。

129

曝ばく

涼れう

—
秋

原稿遺失

上野驛で降りると信州の山の中で暮してゐた僕は、久淵振りで東京の煤くさい臭ひをか
いで、圓タクを大阪ビルヂングの前で下りた。今夜、芥川君の全集普及版の下相談がある
のだ。レインボーグリラに這入つてゆくと、編輯委員は僕をのぞく外はみんな集まつてゐ
て料理を食べてゐる最中であつた。久保田万太郎氏は普及版には振假名をつけた方がよい
といはれ、僕はその反對の説であつた。應酬してゐる間にかうなるとあなたと議論をする
やうな面倒なことになるがといふと、佐藤春夫君が久保田君も君と議論をすると面倒にな
るんだと、出なくともよい時にこの君が出しや張つて喋つた。

すると小島政二郎氏が原稿に振り假名のある分だけに振り假名を付けたらどうか、原稿
にない分は……と、僕の耳に原稿といふ言葉がことさらに大きい注意力を呼びさました。
はあてと、おれも原稿を持つてゐた筈だが、先刻、汽車のなかで直してゐた原稿を風呂敷
に入れると、それをかかへて夜になつた上野驛で圓タクに乗り込んだ筈だが、此所の建物
の前で下りたときにあの風呂敷包みをかかへてゐたか知らと、僕の頭は非常な急速度の回

轉作用で圓タタを降りた折の状態をやたらに反芻して考へて行つた。

そうつと風呂敷包みをかかへると階段を登つて帽子をあづけた時に、洋杖と一しよに風呂敷包を青い服を着た女のひとに手渡した。たしか女の人がそれを受取つたやうであつた。いや風呂敷包はあのととき渡さなかつたやうだぞ——僕はかう考へると慌てて食堂から階下に下りて行つた。所持品の預かり所に行くとき青い服を着た女事務員に、番號の札を示してこの番號の預かり品に風呂敷包みがあつた筈だが、それを鳥渡調べて貰ひたいと申し述べた。あつてくれればいいがと待つてゐると、帽子と洋杖だけしかございませんと女事務員がいひ、僕は始めて腹の底まで青くなつて了つた。

相談が少しづつ進行してゐたが、隣に坐つてゐる小穴隆一氏は誰かの顔を寫生して僕に示した大切な相談會にも小穴氏はそんな相談に一言も説を挿まないで、勝手に人の顔を寫生してゐるやうな無邪氣な人であつた。僕はそれを見ると僕の泣面のやうに見えた。佐々木茂索氏に小穴氏がその寫生畫を見せると、これは落選だぞと、佐々木氏らしくたしなめるやうに云つた。僕は原稿を落したといふと、小島政二郎氏はそれは出ますよきつと、といつてくれた。

署名した原稿のほかには西洋剃刀が一挺、萬年筆が一本、アダリンが一筒、齒ブラシと髭

刷毛が一本、それらは皮の袋にをさめて風呂敷包みにした軽いものであつた。僕は悲觀したままに心が落ちついてゆくと、急に體力の衰へを呼吸の間にまで感じ溜息ばかり出て來た。何かお落しになつたのですかと故友の未亡人がさういはれたが、僕は付元氣の聲で大したものではありませんと云つた。原稿は明日はすぐに金に換へる心算だつたし、ひと月くらゐかかつて原稿の枠に両手をかけて、がたびしする奴を指物師のやうに毎日ほめ込むものをはめ込んで仕上げたものであつた。作中の人物がごちやごちやした町の中にまぎれ込んで夕方から罩めた霧のあひだを道うてゐるやうな氣にさへなつた。おれは少少薄野呂だぞ。ここにゐる諸君よりもよほど馬鹿くさい男だぞと僕は益々悲觀した。

相談が終ると先刻の預り品のかかりの女事務員に、若し明朝運轉手君が風呂敷包みを届けてくれたら郵税先拂ひでこれこれのところに送つて下さいと、虫のよい僕は名刺を出してから、運轉手君の住所姓名を中に書付に入れてくれるやうに託した。すると背後から久保田万太郎氏がこのあひだわたしも落し物をしましたよ、しかしそれは出なかつたといはれ、お金ですといはれた。佐々木茂索氏が新選小説集の原稿を七百枚落したが、それも出なかつたといつた。

翌朝、眼をさますと昨夜レインボーグリルの食堂にはいつて、食卓のイスにつく前に風

風呂敷包みを隅の方の空いたデユブルの上に置いてから食事をし、そのまま會議室に這入つたやうな氣がした。それなら原稿は安全なわけである。とにかく電話をかけて見ようと公衆電話をかけて見ると、わざわざ調べてくれたが矢張り風呂敷包みはないとのことであつた。僕は又新しい絶望を感じて電話室を出ると警察へ届を出して置いた。

風呂敷包みのなかに西洋剃刀があつたこと、西洋剃刀といふものは甚だ便利な使ひ途があることを僕は考へた。それから萬年筆といふものも即刻に使はれるものであることも同様に便利であつた。齒ブラシも練齒磨も新調であるから熱湯をかけてすぐに用ひることが出来るものである。只、何やら譯の分らぬ小説のやうなものはきつと三文文士の眞似ごとを書いたものであらう。

名前を見ると室生犀星と書いてあるが、そんな人の小説なぞ讀んだことはない。だから先づ小説家の卵のやうな奴であらう。それにしても叮嚀に手巾にまでつつんであるが或ひは大切なものかも知れない。初まりを讀んで見ると、「もんには三人の子供があつた。」とあるが二枚三枚と讀んでみても一向面白くも可笑しくもない小説であつた。よほど下手な小説らしく思はれた。上野から乗つたが言葉つきや面つきは田舎者らしく大阪ビルの前に來て、大阪ビルの分らないほど頭の悪い男であつた。それに乗車賃を定めて乗るほど各な

奴だから少しは懲らしめた方がよいかも知れないのだ。

この原稿をこのままに持つてゐることは、後に面倒な證據になるから裂いて捨ててしまはねばならぬ。そこでその人は四十枚綴の原稿を鷲掴みにして、油のしみた指さきにちらを入れて裂かうとしたが、一遍には紙質が厚くて裂き切れなかつた。今度は改めて紙の耳の方から裂いて、それを裂目からこま切れのやうに裂いてしまつた。丸められた紙切れが起き上らうとする奴を一擧にまとめると、裏の塵埃箱のなかに投げ込んだが、殆ど塵埃箱一杯に白い菊のやうに重なり散つて、そのまま身悶えもしない觀念した靜かさであつた。蓋をしめるとその人は大阪ビルへたづねて行つたら幾らかになつたかも知れぬといふ考へを頭に置いたが、もう原稿を裂いたあとでどうにもなるものではなかつた。こんな下手くそな小説の眞似ごとを持つて行つても金にはならないであらう。それより剃刀で髭でもあたつてやらうとその人は鬩に鏡を立てて徐ろに剛い髭をあたり出した。

まく切れらあ畜生、圓タクを値切りやがつてその十倍もする剃刀やら萬年筆やらを忘れるなんて、何てトンカツ野郎だと、その人は剃つて了ふとさつぱりした顔つきになつて秋近い冷たい水道で顔を洗ふと、そのまま氣持よく仕事に出かけるのであつた。友人に聞いて見れば分る筈のアダリンと書いた薬品をポケットに入れて、いつもよりすつと元氣に

なつて出掛けて行つた。自動車置場の隣にある薬局でこれは何の薬かとたづねると、これは催眠薬でよく眠れない人間が服む薬だ。そんなものを忘れた奴があるのかねと薬局生がいふと、その油くさい人は高い薬かとたづねるとそれは高い薬だ薬局の人が答へた。昨夜乗つた奴は昨夜ひとばん眠れなかつたのであらうと、何か少々しんみりした氣持になつて油くさい人はぼんやりとさう考へた。

二週間経つたが原稿はたうたう届出がなく、僕はやつと諦めかねる氣持でゐながら無理にあきらめることに努力した。そして二週間目の翌朝からまた失くした原稿を書きはじめた。文學といふものは一度書いたものを再度書きなほせるものであるか、書き直しても同じ文學がもう一遍出來あがるものかどうか。そんな同じい努力が果して続けられるものであらうか。全然違つたものが出來上つても仕方ないことだ。僕は少し怖いやうな氣がしながら書きはじめた。そして一週間後には四十枚の原稿を書きあげることが出來たのである。

事件のすじや會話のやうなものが先に書いた覺えが出て來て、それは慕はしげに僕の胸にじやれついてゐた。失くした原稿は特に入念に書いてゐたせるか、原稿紙の上にみんな失はれた文字が曇み込まれて、作中人物と暫く振りで邂逅したやうな懐かしさを感じた。

そして消すべきところを獨りで直してゆき書き落しをしたところを埋めて、却つて先の原稿にくらべると頭のよいものが出來たやうな氣がした。繪畫なんかは同じいものは書けないであらうが、小説などは書き直してゆくとむだのないものが出來るやうであつた。只、出駄羅目を厭々でかいてゐたら二度と書けなかつたであらうし、さうでなかつたことが嬉しかつた。

二度目の原稿ができあがると、原稿を失くした事實についてそんなこともあつたかな、といふやうな清爽な氣がし出した。それは原稿を遺失したといふことであるよりも、僕は何か人生に過失をしてゐたやうな氣になつたのである。僕はうつすりした悲哀の情を僕のまはりに感じて、遙に眼をあげてそれを謝まり眺めるやうな氣持であつた。そんな悲しい切ない經驗は僕には始めてであつた。

僕はその遺失を謹慎してゐる最中に萩原朔太郎君が山中の假寓に訪ねて來てくれ、この親友とあちこちを歩き廻ることを喜んだ。或晩沓掛といふ町にでかけて行くとうそ寒い雨がしよぼつて、荒廢した田舎の町は鯛の腹がやぶれて見えるやうに、赤茶けた灯を點けてくるぐろと家なみをつづけてゐた。

僕らはその一軒の飲屋に酒を飲みに入つて雨の音を聞いてゐたが、女が二人ゐて、ひ

とりは軍鶏の脚に着物を着せてお白粉と口紅とつけたやうなのと、ひとり唇から上が四十くらゐのお婆さんのやうに見える若い女であつた。それはとても悲しくて見てゐられぬ人達で、その女だちの垢じみた疊からすぐ近いところに東京といふ都會があるやうであつた。上野停車場、停車場前、圓タク、大阪ビルデング、レインボーグリル、それから原稿、そんなふうには僕は疊の目を見つめながら考へて行つた。考へまいとしながらまだ過失をかながへてゐるのだ。

女は梨の皮をむいて冷たい夜の水につけてゐた。平鉢の底に食鹽がしらじらと沈んでゐて、ここではこれ以上に清いものが見られなかつた。僕はそれを見ながら例の塵埃箱にくしやくしやになつてゐる筈の、微かな悲鳴を上げてゐるやうな原稿を思ひ出してゐた。

齡

私は故郷で河村が死んだことを知つた。それから石鹼屋の野々村が大阪で亡くなり、本島もまた一昨年死亡したことを町の人達から聞いてゐた。向田の叔父さんも、その美しい叔母さんもうに亡くなつたことを知つた。麴屋の主人も徳十のお内儀さんもまた本屋の

新島も死んだことを聞いた。乳母のおとんちゃんには私にひと眼逢ひたいといひながら三年前に亡くなり、おかうといふ娘は代書人の妻になつてから別の男と北海道に行つて、一年経たないあいだに死亡した。私はこの話を聞きながら北海道といふ言葉が頭にのこつたのであつた。おゑんは朝鮮にわたつて先の養子と別れてしまつてゐた。ああおゑん、私は喉でこの美しい名前を愛誦して見た。そして私の記憶は新しくはならないで古い昔のまま、あるかないかの呼吸をしてゐるに過ぎなかつた。美しい魚が身をよこたへて死にさうに見える、ああいふ感じがしてゐた。私の舊家の隣の娘はお女郎になり、菓子屋の娘は二人とも肺でなくなり、向ひのお米屋の娘はとうにその娘が女學校を出るほどになつてゐた。私はあんまり皆が死んでゐるので私自身生きてゐるのが可笑しく、氣候のわるい寒國の恐ろしさが始めて感じられた。

海岸の小學校の小使の娘はどこへ行つたか誰も知らず、下宿してゐた寺の尼さんは還俗して髪を結び、半鐘のそばの美しい娘は亡くなり、教員であつた相木といふ女も越前福井で死んでゐた。私の少年の頃の懐かしいひと達の悉くがこの二十年間にみんな片がついてしまつてゐた。樹木はふとり川床は齡を重ねて淺くなり、禁漁區ばかりふえて子供は鮎や石斑魚や鮒をとることを知らなかつた。私はその禁漁區にむらがる鮎や石斑魚の頭を橋の

上から覗き見て、鮎よ、石斑魚よ、と心で呼んで見た。私と同じ橋の手すりにもたれた少年が一人芥りに白い唾を吐いて、清い魚がそれにむらがるのに興しながら同じことを繰り返してゐるのを眺めた。

私はどちら向いても死の消息ばかりを聞いて、茫々とした雑草に埋れた鐵橋をわたつて故郷からかへつた。私はこの旅行で瘡せおとろへてゐるものばかりを見て、私自身の心に輝いて生々してゐるものを失うてもどつて來たのである。私は私の知人朋友の見覚えのある顔がならぶ雑草をなつかしく思ひうかべた。蠟燭のやうな花をつける蕨枯らしや猫ぢやらしの穂や風致草に似たものや、それからまた私どもの心からそのまま思想をなくしてかかる名もない草など、……そこに私はたくさんの死がならべられてあるのを見たのだ。

私の友人である相良一人だけが故郷の屋根瓦に苔の生えた家のなかに、妻を産婆にし彼は職にいまだ就けないで三圓五圓で一幅の繪をかいて賣つて衣食してゐた。衣食してゐたのではなく無理に生活してゐたのである。尺五の繪をかいて三圓を二圓に五圓を三圓にしても賣らなければならなかつた。彼は私の顔を見るとさつそく山水を描いた半折を持つて來て、金はいらぬから遣らうといふのであつた。私は三圓紙にもつつまないのでこの大學を中途でやめた友人の前に置いたが、彼は何ら躊躇ふところなく生のままの金をふところ

におさめた。

相良に四人の子供があつたが長男は立派な童謡をかいて、父の相良を喜ばせた。一生を詩や小説の眞似事に暮して棒に振つた彼がその息子の詩がうまいとか面白いとか云つて認めるといふことが、私に悲壯な感銘をあたへてくれた。「いやはや息子が詩を書いてゐるのに親父はまだ文學にみれんがあるなんて困つたもんどぢや。」私は相良がおヒトヨシであるのか、少しかなめが利かない人間の一人であるのか、そこを判然とする必要のないほど悲壯と打つかり合うたのである。

故郷といふところは金と名とがなかつたら、生耻を晒しながら堪え忍んでゐなければならぬところだ。相良の噂が出るとあの男は一たいどうする氣か、買手もない繪をあちこちに賣り捌いてゐてそれが一生つづく氣であるのか、あの男はあかん男や、どうにも仕様のないのらくら者や、借り倒してばかりゐる男や、あれでよう恥かしくないものや、さういふ烈しい不名譽な罵り聲のなかに彼は押しづよい根氣のある云はば圖々しい彼の調子をゆるめないで、三圓の繪は對手次第で一圓五十錢にまけてやり、五圓の繪を時には十五圓に耀り上げて例の悲壯と相撲をとつて遅れをとらなかつた。彼の詩は東京の雑誌に滅多に見られなかつたが、詩人であることは確かに中堅詩人の頭にその名前を記憶させてゐて、

相良といへば、ああ、あの相良かと、人々はやはり彼と同じい悲壯な面持をしていふのであつた。

私の妻は或日新聞社に電話をかけ原稿のことで掛合ひをすると、取次ぎの人が私の妻であることを知ると奥さんは橋ゆり子さんをごぞんじでせうと云つた。たちばなゆり子といふのは相良の妻になり、私の妻と友人でおたがひに少女時分に和歌をつくつてゐたのである。私の妻は辟易してあなたはどなただといふとその時分に故郷の新聞の歌壇に選をして木暮何とかいふ人だつた。妻は驚いて用件もそこそこに引き上げて来て、少女時分のたちはなゆり子のことを話した。彼女は産婆になり相良を扶けてゐたのである。たとへ人妻になりいいかげんの年増になつてゐても、電話のなかで昔の知り合ひに聲をかけられることに警戒してゐるのも可笑しいが、それを息せき切つて電話のなかに現はれる男も笑はれてもいいやうな氣がした。美しい洋人形のやうであつた相良の妻、たちばなゆり子は歌など絶えて作らなかつた。相良が東京にゐたころ相良が詩人としての有名さを持つことを歌を棄ててしまつた彼女が勵ましたことは言ふまでもないことだ。しかも器用でかく繪に相良がとぼけた自信を持つのかどうかは分らぬが、よく見てくれおれの繪だつてさう拙くはないつもりだ。それに氣に入らない繪はおれは賣らないことにしてゐると云つたが、そ

れもまた悲壯な言葉としか受取れなかつた。或ひは悲壯以上かも知れないのだ。

寝衣

ご隠居さまから公けに呼びにくるときは關はんが、安吉からお逢ひするにはどうしても幅が二間くらゐある用水をわたり、その流れを取り入れたお庭に忍び入らねばならなかつた、流れの取口は三尺くらゐあり水面とすれすれな矢來が組んであつて、夜盜も水をくぐらないと忍び込めない仕掛けになつてゐた。ご隠居さまは人に見られてはこまるから決して忍んで来てくれないはならぬ。お前はどこに誰が見てゐるか分らぬからそのつもりでゐよと言はれたが、若い安吉はそんなことで出足を挫かれはしなかつた。

飛石を素足でわたるのにも踏み覚えがあり、公けに離れにあんないされた時に心にのこしてあつたので、離れの雨戸まで飛石十二枚をわたり沓ぬぎの上にしやがんで雨戸を一つはたいて、靜かに耳をすまして見るのであつた。部屋のなかにかさこせいふ音一つしな

はり静かでべつに中から咎め聲がしなかつた。こんどは控え目に雨戸をこんこんと三つばかり敲いて見て、ひくい聲でご隠居さまわたくしでございますと云つて見た。そして庭のなかに耳をかたむけて人氣があるかないかと吸ひとるやうに居すくんで見たが、からだにべつに異つた感じがしてこないので安心をして、あらためてまたご隠居さまと呼んで見た。思ひがけなく部屋のなかに畳すれの足音がしてそれが雨戸に近づいてくるやうであつた。びつくりした時の歩きやうではなくて何も彼も知り盡してゐるやうな畳すれであつた。

——、安吉かい。

——、はい。

——、お前はまあこんな夜中にどうして來ました。いま開けてあげるから。

電燈がかちと消え、消えたくらいところで雨戸がひらかれた。安吉は用水と水の取口を腹這うて忍びこんだので、ずぶ濡れであつた。ご隠居さまはさらさらした浴衣を出し、これを着なさい、その着物は沓ぬぎの裏側、椽側の下にまとめて置きなさいといはれた。ごめんなさいと裸になり着換えするときに若い瑞々しい安吉の肩が見え、ご隠居さまの眼に一杯の白いものが散つたやうに見えた。二十歳の安吉のからだだが夜に胎む明りを見せたのであつた。

安吉は椽側にあがるとご隠居さまは雨戸を音のしないやうにもとのやうに閉め、こちらにゐらつしやいと寢床のそばに手さぐりで行き、電燈をつける音がした。部屋の中はあたかくなつてゐて安吉はまだ震えがとまらなかつた。先刻は寒くなかつたがご隠居さまにお逢ひするときにふるへて來たのだ。

——、お前用水をおわたりかい。

——、ええ。

——、それからお庭までどうしてはいつて來たの。

——、水の取入ぐちをくぐつたのでございます。

——、どうしてお前それを知つてお出でか。

——、家で話をしてゐるのを聞いたことがございました。

安吉は頭を垂れてゐるいと知つてゐましたけれど、ついお庭さきまではいつてしまつてからこれはいけないことをしたと氣がつかしましたが、どうにも仕様がなかつたのでございますと云つた。よくあんなに早い用水をわたつて來られたものね、もしも流されたりなんかしたらどうするつもりといへば、足さへ確か水底にくひこませて渡れば流されるや

うなことはございませんと云つた。

少時してご隠居さまの手がいつものやうに、安吉をとらへ、安吉はからだがあつくなるのだ。そんなに逢ひたくなつたのと何度もくり返していはれるたびに、安吉は唯はいとこたへるだけだつた。そんなにいろいろ言ふことなぞなかつた。やはりお前は可愛いひとねといはればそれで腹一杯になるのだ。晝間は暑いといふ口實で公けに藏の二階で安吉に揉ませるのであつたが、やはり藏の二階が奉公人が來なくてよかつた。ご隠居さま誰か人がまゐりますと安吉がいへば近づく人の足音がして、ご隠居さまの感じるだいぶ前に人氣を安吉が感じてゐた。誰か人が來たのではないかほらよく耳をすましてごらんと云つて怖氣がついても、安吉はいえあれは人のあしをとなどはありません。あれは木口の割れた音なんぞございませう。安吉は少しの油断なく耳にも音を讀んで憇むことを知らなかつたから、ご隠居は安堵して安吉にからだをまかしてゐた。時計を置いてないので何時になるかわからなかつたが、安吉はまだ十時を少し廻つたくらゐでございませうとこたへた。

秋の夜は疊にしみる静かさを、安吉の身うごきに感じられるほど物音が重かつた。ではご隠居さまわたくしは参りますといへば、ご隠居さまは先刻安吉をむかえたときよりずつと身にしみて別れを惜んでゐる容子に見えた。安吉は浴衣をぬぎ濡れた着物に著代えると

きにまあ可愛さうにとご隠居さまが思はすいへば、そんなことお仰有つてくださいますな
お逢ひしたうへ、いろいろ戴き物をしてわたくしは喜んでかへるのでございませうものとい
ひ、沓ぬぎから足さぐり右と左のくちがひを旨く飛石をつたうてゆく、安吉の姿はあは
れでないでもなかつた。氣をつけて用水に足をさらはれぬやうにといへば、大丈夫心得て
居りますと安吉ははや庭水の取入口にかかるのであつた。そこで安吉は一先づ裸體になる
のが見え着物は袖だたみにし、それをくるくるに巻いて帯でむすび、矢來の隙間にはさみ
込むとご隠居の方に向いて挨拶をした。腹這ひに水をくぐり髪の毛もびしやびしやになつ
て迅い用水に出たのであるが、柔らかな硝子があればこんなものだらうと冷たい透明な感
じの流れをわたる前、安吉は向ひの土手や土手の上の通りに人の通るけはひがないかと耳
をかたむけた。ひつそりと音を立てる流れよりほかに安吉には人氣が感じられなかつた。
かれは流れをわたると頭に結びつけた着物をほぐしからだに著け、目じるしをして置いた
杖をとると土手下の方にへりかけた。闇のなかに痺れるやうな楽しさにからだを疼かし。
そのころご隠居さまは眼が冴えてまだ眠らずにゐた。明るく上品な顔は夜更しをしたひ
との蒼白さを見せ、煙草をしづかにふかして何か考へ氣がついてまた煙草に火を點けてゐ
た。白羽二重の寢衣につり合ふ美しい顔立ちは、この部屋に誰かいま人がはいつて來たな

ら少時はびつくりするに違ひなからう、それまでにもかうがうしい枯淡な少しのねばり氣をもたない人に見えた。でつぷりと肥つたからだに羽二重が肌を吸はれ、少し皺になり膝のあたりまできちんと棲を合して座つてゐる姿は、妖しい逞しさと嚴そかさへ表はしてゐた。

ご隠居さまはそのまま褥のなかにはいつて眼をとじられたが、容易に睡りがむすばれさうもなかつた。間もなくご隠居さまの頬の上に夢でも見たらしい微笑がうかぶと、すやすやと睡りが深々と覆うて行つた。

安吉の通ひ路に秋は闌け露霜が下りはじめ、からだは冷えて青ざめた顔をしてゐた。ご隠居さまの憂慮は安吉の身の上を考へることで一杯になり、もはや憐れみよりも悲しむことばかりであつた。そんなにしなくとも奉公人にもおほびらで療治にかこつけ呼びにやるから、用水をわたり水をくぐることだけはやめにして下さい。それを見なければならぬわたくしが辛い。お前はそれでもいいかも知れんがわたしの身になつて考へて見てくれるやうに。——お前がかへつたあとの朝明けの飛石にお前のあしあとが、氷りついてゐるではないか。十二枚分ごとごとく凍えてゐるのを見るとわたしは苦しくなるのだ。それにお前はしまひにからだを悪くしてしまふ。聞けばお前の親方はもうお前とわたしのことを知つて

ゐることさらに慈悲のやうに知らん顔をしてゐるさうではないか。齒をがちが震はせ寒さにやられてゐるお前をわたしは温めるには、齡をとりすぎてゐるのだ。

わたしの家の奉公人とても或ひは知つてゐるものがあるかも知らぬ。沓ぬぎの氷、わたしの寝衣の濕ぼさをわたしは乾かすために人の眼を忍んで干さねばならぬ。さういふことをしたことの無いわたしが人眼を忍ぶところを女中達に見られ、わたしは返辭に窮ることがあつた。ご隠居さまとしたことがどうあそばされてそのやうに手づから小をお乾かしになります。さういふことが奥に知れますとわたしたちがお叱言をいただきます故、どうぞわたしたちにお仰せつけになりおしごとをさせてくださいませと、無理に寝衣を取つて行かうとするがそのまま手渡しすることがどうして出来よう。さうなれば誰が着たかもわかつてしまふのだ。寝衣にはお前の匂ひがしみてゐるからわたしは何くはぬ顔で、まあそのままにしてをいてくれるやう。わたし自身のこととは昔から自分ですることにしてゐるから決してお前がたの失策のやうにはしませぬ。たとへばお茶にせよ小用にせよ買ひものに出るにも、奥へはいはずに一人でしてゐるやうに決してわたしのことでは心づかひはしなくともいいのです。わたしはかう言つてなるべく女中たちと離れるやうにさへしてゐるのです。毎晩開く雨戸の音を誰かがしまひに耳にいれるかも知れぬ。お前の氣持はわかるが

くれぐれも氣を逸つてくれなくてはならぬ。決してもう用水をわたるやうなことをしてくれてはならぬ。わたしはできるだけお前を公けに呼びにやりお前に荒い氷や霜をそのからだにふれぬやうにしてあげよう。お前もその氣持でゐてくれなければならぬのだ。

巷

わたくし少しおねがひしたいことがありますの。かういふ言葉を私は度たび聞くがその時は心でこの人もやはりさうだつたかと悲觀してしまふのである。そして私の豫感が的中すること私の心は悪づれにすれてしまつて、さういふ一生懸命にいひ出すらしい努力をも認めないまでになつてゐるのだ。私は多少呆けた顔つきで氣のないふうをし、ふんとかうんといひ、さういふ望みをかなはせない事情の僕自身を哀れんでゐた。それにも懲りずに僕はさういふ巷に出て行つては淋しくなり心に澤山の悲しみと邂逅してゐた。

私は何より心で喫驚^{びく}りすることが好きだつた。喫驚^{びく}りすると心が起き直つて物を見直すからである。それは勿論、好色のせいでもあらうがその場末の或る家のなかで、私は例によつてびつくりした自分を一さう愛して、その喫驚^{びく}りしたものを心ゆくまで見ることにし

た。私の職業は心の中ばかりで形づくられてゐるものを書いて何にもならない、たまには生きた人とぢかに向き合ふことが必要だ。ことに私が驚いてはつと見まもるやうな美しさはやがて香料のやうにぼたりぼたりと、私の心の上に滴^しくを垂れてくるからである。私はこれは常識のある立派な淑女や紳士にとつては實に莫迦々々しい事であらうが、しかし私には美しいものを見ることが、直接に心をにぎやかにしてくれることを感じるのだ。私は嘘をつくことや體裁のよい言葉でごま化すことがきらひである。どれだけ女のひととつき合つてゐても、その人をどうかしようといふことはよくよくの事情がなければならぬのだ。すぐほれてすぐどうにかなるといふ人間は私の中にはない。私は疑ひ深く注意を行使とどかし女の心にくひ入つて見て、いつも引き返してもどつてくるのである。何十年來の悲しみが同じいやうにそこで見られるのだ。やはりおもちやが疼いて腹這うてゐるだけであつた。私のやうな年輩の人間はいつもおもちやと道づれになり、たとへ眞實であつてもおもちやといふ言葉を削り取ることができなかつた。

彼女はひととほりは柔和な、大抵の男がすぐに好きになれるほどのものを町ねいに顔のなかに藏つてゐた。もちろん驚くことを愛してゐる私はびつくりして眺めてゐるのである。かういふ種類の女といふものはあまり喋ることをしないで、相手の話をしづかに聞い

てゐるるかうさを持つてゐるものであつた。私は先づかういふ人ときどき話をするのはよい。そして酒を喫むことはそれが好きである私にはことさらによい。すくなくとも人生には時時にかんたんに行き當りばつたりにさういふ女があるもので、運のよい人間はそれに行き合つて何やら加へられるのである。女の人の美しさから私だちの加へられるものは、つねに莫大な何物かである。彼女はいふのであつた、わたくしは最近に商店の勘定場に座るやうになるかも知れぬと。さういふ仕事についてもわたしはそこは夜の商ひをしないから晩はかういふところで働いて見る考へです。つまり二重生活でございますわといふのであつた。その二重生活でございますわのわが私には妙な印象ふうなものを感ぜさせた。上品であつて野卑なやうな言葉であつた。私はうんとかふんとかさうかねとか、そりやいいなとかいふだけであつた。彼女は手帖の小型なのをとり出してこの人をござんじですかと言つたけれど私は知らないことたへた。そこには徳川何とかといふ人のサインがしてあつて爵位のある人であり、わたしの幼な友達でよくお屋敷の庭の中であそんだものだといひ、お庭には子供がそつくり二人くらゐ隠れてゐて、その前をさがして歩いても姿の見えない深い植込みがあると云つた。その植込みはまるでそんなふうに作つてあるやうにまん中が平地になつてゐて、まはりにはあすならうや青木や榊の繁みで縫うてあつて外から決して見られはしなかつた。しかし簾が内側から見えるやうに植込みの中からは廣いお庭の芝生をへだてて流れる水の音まで聞こえる静かさが、その中から見られるのであつた。

それから彼女はべつな人の名前を示してこの方は大學の教授であつていろいろお世話になつた方だといひ、私に知らぬかとたづねたから私は知らないことたへた。かういふふうには彼女は手帖の名前について彼女の交際範圍の廣いことと、その人物がそれぞれの名譽をもつてゐることを話し、つぎにさういふ高名な人物とつきあうた彼女自身は決してやくざでないことを、物わりのわい私に理解させるやうにつとめてゐた。私はしだいに理解してゆくやうになり彼女を憐れにはかなく感じた。私の人生觀はかういふ話になると形容詞の貧しさからただ單に憐れであるとしか言ひ表はせなかつた。

餘り綺倆のよくない私くらゐの紳士ともゴロツキともつかない人間に、とくに女はものを言ひやすいところがあるらしかつた。決して美男子には女はあまり極端なことを言ひはしない、たとへば非常な美人にはすけすけと戲談がいへないと同じである。非常な美人にはまづ美人であるための遠慮深さと畏敬の情をあらはしてから物語らるべきであつた。彼女は私の醜男であることに調子を高めて、こともなげに又甚だ言ひにくいやうにそつといふのであつた。「わたくし少しおねがひしたいことがあるんですが、……」私は何遍も聞い

たことがあるために却つて喉につかへたやうな氣持になつて、考へるひまもなく、それはどういふことなの、さう柔しく平氣にこたへた。彼女はそこで幾らか恥かしさうにして口ごもつたが、「少し言ひにくいことなんでございますけれど。」と云つた。私は彼女のことばの内容はもうとつくに解つてゐたけれど、禮儀として一應たづねないわけにゆかなかつた。關かまはないから言つて見たまへ、僕にできることかどうか分らんがといふと、「ほんとに言ひにくいことなんですわ。はじめてお會ひしてこんなことをいつたら、……」彼女は自身でハツキリ言ひきれないためのもどかしさと、僕の察しの悪いぐすぐすした露圍氣に揉み込まれて、イラ立つて、でも言ひにくいんですものと云つた。私はいつもと同じい悲しみとも憐れとも分ちがたい氣持になり、やはり辿りつくところはそんな願ひをきくことのできぬものを早や感じてゐた。であるのに彼女はやく言つてしまつて氣を樂にしたいために焦つて、やつと、あの、といひよんでからきつとお返しするからおかねを三十圓借していただけないでせうか。先刻お見せした兄さんに印形をついてもらつて證文にしてもいいんですがといひ、にはかに流暢な語勢になるのであつた。

——、おねがひでできるでせうか。はじめてこんなことを申しあげて済みません。

彼女は僕をちよつと見たが、左の眼に非常にちひさな露ほどのなみだがキラと光つてす

ぐ消えてしまつた。ああ、美しいと私は意外なものを見た驚きを頭にくりかへした。女は言ひにくいことを言ひ出してしまつてから、大膽になつたか、かさねておねがひできませんかと念をおして云つた。ことはりにくいことを斷つた圖太さが私をすつかり落着かせてしまひ、僕にはできさうもないのですと小學生のやうに拙く言つてからやはりこの人もこれを言ふことに、一時間ばかり苦しんだのだなと思つた。はじめて會つてかういふ金のことをいひ出したとか言つて、私は女をずるものに考へることはいやだつた。私のすぐできさうもない金のことと私の生活面をずるずる引きずるはかなさに、私自身を反省しないわけにゆかなかつた。私はきみの心がけがいいともわるいとも思はない、これだけあげやうこれはきみの申し出とはべつなもので初めからきみに上げやうと思つてゐたものだと私はいくらかを手渡してこの巷の家を出て行つた。ああいふことを言つてくれなければ私は素直にかへつて行けるのにと、彼女のためにその申出をあはれむのであつた。そして私は私の生活面で氣重さをにはかに感じながら歩いたのである。

自轉車

すぐ向ひの坂田さんが朝からきいきい聲で怒り出し、そこらを跳ねまはるやうに旦那さまに當り出した。聞いてゐると垣根の柵木の刈り方も知らないくせに、垣根ぎわにあつた八ツ手まで刈つて了つたといふのである。わたしは八ツ手が好きで大切に置いて置いたのに刈つてしまふなんて、垣根をそろへることも知らないくせに刈込みなどをやるからだ。もとの通りにして頂戴といふのである。一たん刈込んだものを元のとほりに出来るものかい、莫迦もやすみやすみにいふがいいやとワイシャツを着ながら亭主が言つてゐる。植木屋へ行つて同じい八ツ手を買つて来て植えてくださればいいぢやないの元の通りになるわよ、と妻君がどなり返す。一たい、あんたといふ人は庭なんぞ掃除をしたこともないのに、たまに刈り込めば何んでも彼でも刈り込んでしまふ。八ツ手といふものは廣い葉を眺めるものだわ、それをみんな切つてしまつて坊主にしてしまふなんて莫迦らしくて話にもならない。妻君はさう言つて昨日の夕方刈り込んだまま取散らしてある庭を掃いてゐる。せめてあと片付けでもしてあればいいのに手のかかる人ねといふ。どこの園に亭主が掃きそうじ

をする奴があるかといふと、ぢやお向ひの鳩山さんの旦那さんを見習つた方がいいわ。安カフエでならつた小唄なんぞうたつてゐるひまがあつたらね。こんどは亭主がお向ひの鳩山さんは庭きちがひだから掃除をしてゐるのさ。それも植木屋對手なんだからわけがないや、終日ぶらぶらしてゐるから運動のためにも掃除をする必要があるよ、おれは勤め人だからそんなひまなんかないさといふ。

妻君はこんどは鋭い聲できいきいしやべり立てて、早く勤め人ならお勤めに出てゐらつしやい、椽側に立つて朝ばらからどなられてはたまらないわよといふと亭主の方でも負けてゐなかつた。どなり出したのはお前の方ぢやないか巫山戯たものの言ひ方をするない、一日ぢう寝くさりやがつておれの顔さへみれば、ああでもないかうでもない紐をつけそれで足りないでどなり出すのだ。亭主はさういふと上着をつけて玄關に廻つて靴をはいてゐた。「何だ靴もみがいてないぢやないか、こりや昨日のままだ。怠け者のくせに口ばかり達者な女だ。」亭主は乾いた雑巾で靴をふきながら全く何一つだつてまんぞくに出来はしない奴だとわめき立てた。たまに靴をみがいてみるのもいいわ、何時どんなによく磨いたつて小言なしにはいたこともないくせに、自分でみがかうとしないんだもの。折角お氣に

いるやうにおみがき遊ばせ。——さうだよ、てめえに磨いてもらつたよりかヨ程美しくな

るよ、腹のへつた女中の手さばきのやうにのろろ拭いてゐるから、何時だつて靴は光つたためしが無いのだ。買つてからはじめて光つたやうなものだと、亭主は玄關のたたきの上で靴をはいたまま、ずしんと足踏みをくり返した。そんな靴ばかり光らしたつてカフェちや一文なしはもてないよ。靴は少し汚なくてもお金のあつた方がいいさうだわ。妻君は垣根のそとを出て行く亭主の方を見ながらいふと、持てやうが持てないだらうがこつちのことさ大きいお世話だ。「切角もてるやうになさい、ぢや行つてらつしやい、早くかへつてらつしやい。」おそくかへるからそのつもりでゐたまへと、亭主は表の通りに出て行つた。橙々いろの朝日が道に一杯にふくれ上つてゐた。

お隣の旦那様はとうに出掛けたあとで、妻君はポンプを上げてゐた。襦衣一枚あらふのに盥に三杯も水をつかふ妻君は、午前七時からポンプを上げとほしに上げてゐた。それでゐて洗濯物はシャツ二枚と股引一着と靴下三足とシイツ一枚にすぎなかつた。洗つてはすすぎ、すすいではポンプを上げ、しまひ洗ひにもう一遍すすぐのであるが、だからポンプを上げ通しにしなければならなかつた。福島の子で髪を手拭で巻いて帯のかりあげに着物をしやくつて、膝まで見える短かい裾をしてゐた。裾の下から膝と膝の下の方が覗いてゐてそんな姿をしてゐても、少しもきまりわるがる女ではなかつた。

洗濯物がすむと二階にあがり、手すりから天井鴨居まではたきを當て、掃いてからていねいと拭きそうじをしてゐた。そして時々二階から往來をながめ又のろろと拭き、拭いたあとを乾いた雑巾でみがきをかけ、それで掃除が済んだのかと思ふと、さうではなかつた。こんどは又はたきを一通りかけてから、自分の掃除を自分で検査するやうに覗いてゐるき、忘れたところや手の抜けたところを拭いたり掃いたりしてたつぷり二時間かかり、それからお晝すぎになると又掃いて拭いてはたきをかけ、もう一度検査をして拭いたり掃いたりするのであつた。それから階下の部屋を順繰りに掃いて拭くと夕方近くなり、もう一度二階にあがると往來から埃がはいるといふ氣持であるのか、ほとんど不熱心にだらけた調子ではたきを手すりの上にかけて、ばたばた雀の羽音くらゐにはたいて、扱また今朝ほどこに佇んだと同じいやうな顔つきで、往來をうすぼんやりと眺めるのであつた。秋の日はそんな時分にもう黄ろみさへも失ひかけてゐるころだつた。

もう一軒の向ひの家では朝からご用聞き自轉車が三臺とまり、それが二臺になり、やがて一臺になり永い間停つてゐて、中々出てこなかつた。間もなく一臺の古い奴が先の分と交替になると約一時間は停つてゐて、乗手は出てこなかつた。裏門の鈴はそのたびにちりんちりと鳴つて、憩んでゐた自轉車がうごき出して行き、また次ぎの自轉車が來てじ

つと停つてゐるのであつた。人の乗つてゐない自転車といふものは變に重たいピカピカ光つて暑さうなものだつた。どうかすると秋暑い日さしに輪のなかのほりがねまで、ぐつたりと疲れて伸びてそこらを這ひ廻りさうであつた。

奥さんは低い聲でけさから六人の店員としやべりつづけ、五時間ばかりのあいだ喋り通してあつたけれど、まだまだ喋りつかれるといふことがなかつた。彼女は言葉を生みつける天才であり、聞き苦しくない細めな低いべらべら聲が對手をつかれさせることをしなかつた。近所のこと、お隣の八ツ手の奥さんのこと、掃除きちがひの奥さんのこと、地所のこと、道路のこと、大工や植木屋洗濯屋、買ひ物のこと、彼女自身のこと、家ではもつと地所をかひたかつたことや、家の建増しを最近にすること、前の大屋石の垣根もやりかへたいことなどを喋り散らしてきりがなかつた。先づ彼女はいつも「家では何々をどうして……」とか何とか言ひはじめるのである。

夜は家人とくどくどとなにか話をし話のなくなるといふことのない人間であつた。私の家では彼女の來訪を恐怖してゐた。それは私の仕事などでは取り分け恐るべき客であつた。彼女が訪ねてくると子供たちが傳令になつて、その驚嘆すべき饒舌の天才がいかに私をなやませるかについて、おもむろに憂慮するくらゐであつた。

闘 犬

銅屋が來て仕事をしながら今夜分譲地で闘犬があるといふ。誰にでも見せてくれるかといふと、私の名前をいへば譯なく見せてくれます。このごろその筋から禁められてゐるから警戒はしてゐるが、大丈夫見物できますと銅屋がいふので久濶りで闘犬を見に行くことにした。

二頭ゐた犬らが死んでから、犬の臨終の時の苦しい顔付が眼に憑いて、動物は哀れであるから飼はないことにしてゐた。それでも散歩の折に美しい洋犬を見ると、自然立停つて少時見惚れる癖がついてゐた。

闘犬のあるといふ分譲地に行つて見たが、そんな闘犬のあるらしい様子もなく誰一人として道うてゐるものもないので、銅屋に尋ねに行くと、仕事に來てゐた亭主がゐなくて、細君が出來て來て、闘犬のことなら裏の犬屋さんに行つてくださいと云つた。

その銅屋にも今年で十三年になる土佐の老犬が、板の間にねてゐて吼えもしなければ僕の體臭を嗅がうともしなかつた。大森から横濱切つての大關格であつたこの老犬の顔は古

い噛み傷だらけで、鬪犬で生涯を送つたらしい物憂い古武士のやうなところがあつたが、いまはゴミ箱や路上のパン屑をひろひ歩くほどの食氣ばかりの耄碌犬になつてゐた。

銅屋の裏の路次にはいると、角の一軒の家の前に四五人の職人態の男ががやがや立つてゐて、此處が犬屋だなどとすぐに分つた。鬪犬があるさうですが場所はどこですかとたづねると、職人態の男はちらと私の顔を見ると、すぐまだ場所が分つてゐないのですと云つた。

路次の入口からぼつりぼつり人が集まつて来て、大森海岸地方から來たらしい土佐犬が一頭はいつて來ると、なるほど、先刻から氣がつかなかつたこの家の一坪ばかりの前庭に、檻箱があるらしくそこへ入れてしまつた。そのつぎに來た犬もやはり別の檻に入れ、第四番目に來たのは裏にも檻箱がそなへてあるらしく、吼え猛る奴を二人がかりで裏庭へ連れて行つた。大丈夫かとか一人で引けるかとか、そんな昂奮した聲がとり交はされた。その時分路次には十二三人の人があつまり、永い殘照の明りはもう空にも見られなかつた。

此處だと人眼に立ちますからお上りなすつて下さいと、背廣服の立派な顔の青年が云つたが、私ばかりでなく皆にさういふのであつた。私は裏庭へ廻つて暗い隣家の板扉にくつついて眼立たないやうにしてゐたが、そこに四構への犬舎があつて既に先着の犬がはいつてゐて、飼主がその檻戸の前にしゃがんで時々手でなでてやり、低い聲で叱つたり憐しかり吼えたと怒つたりしてやつてゐた、時刻はまだまだらしく私はしびれを切らし、これ以上待つことがいやになつてゐたが、そんな氣のするじぶんに犬が着くのでつい我慢する氣がした。

犬舎はどこも一杯になつたので、あとに着いた犬は關はんからそのまま上つて下さいと、先刻の背廣の好男子が云つたが、そんなことに慣れてゐるらしく、犬も人間と一しよに玄關から、座敷へあがり込んで了つた。どう考へて見てもこの家は獨身者の犬屋らしく、裏庭から見ると家は、二三枚の浴衣を釘にかけてあるきりで、家具らしいものは見當らなかつた。家具らしいものは茶呑茶碗があちこちに散らかつてゐるだけだつた。そして犬屋らしくもなく犬が品薄でやつとテリヤのめすと二三疋の仔犬を圍うた半坪くらゐの金網づくりの犬舎と運動場があるだけで、あとに犬らしい犬はゐなかつた。犬を仲賣りしたりしてゐるのかも知れない。すぐ隣家は井戸境になつてゐて先刻から逞しい裸の男が、洗濯板のあばら目に浴衣をこすりつけては何枚も何枚も洗濯をしてゐたが、犬屋にさういふ催しがあるに少しの興味もないらしく絶えず背後向きになり、下の着付一つになつてゐた。洗濯屋の夜仕事にしては品物がすくないから、或ひは獨身者が、夕食後に溜つた着

物の洗濯をしてゐるのかも知れない。

何時の間にか家の中にも人が一杯になり、裏庭に八九人のかたまりができると、誰かが電燈の線を一束手に持つて自轉車で出かけて行つたが、すぐ空手で戻つて來たところを見ると場所は案外近いところにあるらしかつた。

先刻から私は人を代へて場所はどこなんでせうとたづねて見ても、何でもこの上の分譲地らしいが、實は私もよく知らないとか、まだところは定つてゐないとか云ひ、誰一人として教へてくれさうもなかつた。犬の數もそろひ、人もそろつてゐて場所が定つてゐないことはない筈だ。こいつ私をあやしいと睨んでゐるのか、それとも最後まで會場を祕密にする周到な警戒をしてゐるのか、私は何だか莫迦莫迦しくなつてそろそろこの家をはなれ、路次のそとに出ようとした。すると自轉車に乗つた男が自轉車から飛び下りると、二三人の仲間にやつと一組濟んだところだと云つた。ではもう始まつてゐるのかと、私は益々莫迦らしくなつた。かういふ祕密に闘犬をするときは豫め責任者を二人決めて置いて、若しも手入れがあるときにはその責任者がつかまへられることになつてゐた。會費といふものは犬の傷代くらゐであるらしい。

路次の角にいつまでもその位置をはなれないハツピ姿の男が待つてゐたから、場所をた

づねるとやはり云つてくれなかつた。のみならずその男は注意深く私の風態を観察してゐるので、ははんこいつ張番をしてゐるのだなと思つた。坂の上から自轉車がまた一臺馳つて來てばたと下りると、その張番に何か早口にしゃべつて路次の奥にはいつて行つた。

二三軒先の煙草屋の時計をのぞいて見ると、もう八時を二十分すぎでゐて七時にはじまるといふのも嘘であるらしかつた。まだ犬屋にゐた連中も犬も出てこないところを見ると、そのあとを跟ければ自然會場にゆけるわけだからと、私は未練がましく今まで辛抱したのだから見て行かうといふ氣に立ち直つて、坂下の溝ぶちにしゃがんだりしてゐたが時々自轉車が坂の中途からぼかんと浮ぶと、すぐ火のやうになつて下りてくるのを見るだけであつた。坂の途中で右にまがる道があるにちがひない、そこをさがして行けば會場に出られるのだらうと、私は坂をのぼりかけた。

その時左の坂下の道から三四人の人が出て來たが、先頭に立つてゐるのが私の家から表通りに出るところにゐる、立派な犬屋の主人だつた。夜は黒の眼鏡をかけて喫茶店などをほつつき廻る男であるが、あとに跟いてゐる二人の男はお得意の旦那方であるらしく、此宵の催しに参加する相當な人物らしい目星を私はつけた。しかし此の連中はやはり先刻の長屋の方にはいつて行くところを見ると、まだ初まつてゐないのだ。それだのにもう一組

濟んだといふ先刻の男の言葉を考へ合せると、何が何やらさつぱり分らなかつた。あるひは祕密に一組あて鬪合くみあはせてゐるのではなからうか、犬屋の路次の奥から拔道があつてそこから私なぞに分らないやうに出かけてゐるのではなからうか、それにしても今から路次までもどるのも變だ。とにかく坂を右へまがる道を行つてしらべて見ようといふ氣になつた。

坂の中途に出ると道路があつて新築の家がならび、大森谷中の町すぢの電燈が見過かされたが、そこから下は町になり分譲地らしいものはあつたが、暗い空地に大谷石が積んであるきりであつた。それから上は屋敷町になつてゐて鬪犬の場所になるところなぞなかつた。下へおりて行けば谷中通りになるのだ。

やはり此處ではないらしい。元の坂に出て上つて行くとすつかり屋敷町を形づくつた通りが見え、それを行き止まりまで行つて見たけれど、人のけはひもしなければ鬪はせてゐる犬の唸り聲などもしなかつた。暗い夜涼をふくんだ町すぢが私にふしぎな變つた感じで見えられた。

私はもとの道に出たついでに、何氣なく路次の奥をもう一遍行つて見る氣になつたが、路次の角には張番の男がゐなくなつて奥の方はしんかんとし、薄ぐらい長屋の電燈の明り

が路上に洩れてゐるばかりであつた。

犬屋の前に行くときみんな今しがた出かけたばかりらしく、玄關から座敷の間にある灰皿に消えのこりの煙草のけむりがのぼつてゐるだけだつた。

あとで聞くと、私の尋ねた坂の中途の道を下つたところに、殆人の氣のつかない片方に崖、片方は材木倉庫のかけに空地があつて、そこは晝間でも誰も相手にしない地面であるらしかつた。その空地の裏側から犬屋との隔離は直線を引いて見ると、三分間とかからないほどの近い處にあつた。だから自轉車は坂の方に出なければならぬが、徒歩の連中は路次の拔道から又路次をぬけて出ると、その空地への崖下に出て、そこから二分間とかからない位置にあつたのだ。

私がおしまひに皆の出拂つたあとをたづねたときは、おそらく一分間と經つてゐないところであつたであらう。

小諸の町

信州小諸にある小諸城は石垣と濠だけしか佛をのこしてゐないが、大手門はそのままにのこつてゐて、潜りのところに昔の狼烟が一本竹の輪をはめた儘もたらしてあつた。石垣を迂曲してゆくといかにも田舎の城らしい小ぢんまりとした感じがして、加賀の尾山城のやうな大規模がなかつた。あちこちに城石が捨石のやうに亂在してゐた。

二の丸に藤村庵といふ東屋風の建物があつて、島崎藤村さんの眞蹟を幅や額面に仕立てて憩ふ人あれば、お茶をふるまうてくれるやうであつた。島崎さんの愛讀者がさういふ東屋をつくつてゐるのかも知れない。藤村碑の拓本繪葉書などもひさいであつて、温厚な島崎さんが寫眞のなかに微笑んで額の中に居られた。一年ばかりお目にかからないが、島崎さんはいつ見ても、老臻つて愈志厚しといふ感じを受けるし、僕も老境にはいつたらああいふ静かな暮しができるか知らと、心ひそかに畏敬の情にたへなかつた。幼少の折に讀んだ「破戒」の著者と一人前の顔をして、膝つき合して話をしようとは、無名の僕なぞ夢にも思はなかつたのであ。文壇といふところに位階の區別がなく、白髪の先輩を向うに廻して

後進が好きなことをいへるのも、決して文壇以外には見られない自由さであつた。

この藤村庵に腰をかけてゐると、麥茶を持つて中年の女の人が出て來られた。小がらな、年のわりにふけて見えるやうなこの女の人は、柔和な驚くばかりの美しい顔立であつて、母親とか、姉とかに見る美しさであつた。僕は茶のみながら更めて畫帖に署名をし、折から、半ば落葉した櫻の枝にひとしきり金切聲をあげて鳴く秋の蟬に耳をかたむけた。そして同行の幼な友達である田邊孝次君に却々美しい人ではないかといふと、いや犀星はむかしから蒼白き人を好いてゐて、女は蒼白くなければならんといふ自説をもつてゐるので、そんな人さへ見れば褒めるんですと、もう一人の同行の美術蒐集家の仁木君に説明して聞かせた。

三人は藤村庵を辭して、藤村碑の建つてゐるところから、千曲川を見廻かされる城内のきりぎしに立つて見たが、なるほど、この城は水利の地をえらんでゐると思はれた。そこから足のむづがゆるくなる濠の上を渡つて、公園になつてゐるあたりで孔雀がいま羽根をひろげて、めすに媚態をつくしてゐるのに出會した。をすの孔雀はひろげた羽根のさきを震はせると暴風のやうな凄じい羽根と羽根とがすれあふ音がして、それでもその美しい羽根を見てくれぬめすを憎々しげにけんをふくんで、挑みかからうとしてゐた。みにくいめす

の孔雀はそんな色気よりも子供の投げる煎餅のかけらを金網の間から嘴を入れて物憂げに啄つてゐて、いかにも厭さうな風情であつた。厭なときはあんなものだよ、と誰かが言つたが、間もなくをすの孔雀はその重い扇型にひろげた羽根をたたんで了つた。喉もとの天鷲絨のやうに深い紺碧色が、白い敷砂の反射のなかで一そう美しい輝きを見せてゐた。この小諸公園には熊もゐたし、鹿もゐた。しかもどの動物も頷けてもよいとのことであつた。

小諸の町へ出ると、繭問屋があつて近在から搬んだ繭の山が眞白に盛り上つて見えた。秋繭を袋に入れて天秤でかついだ農家の人たちがその目方をはかつて貰ふと、帳場で現金で支拂ひを受とるらしく、東京の大賣捌へ持つてゆく書物のやうなものであつた。ことは繭の値がやすく何貫賣つても幾らにもならないらしく、僕らは農家の人だちが聽てさびしさうにかへつてゆくのに、途中で何人も出會うたが、かれらは肴屋で肴を仕入れ、蓆屋で、蓆を買入れてゐるのを見入つた。

小諸銀座といふ大通りがあつた。どこまで銀座がよいのか知らないと見ると、ここにまた銀座會館といふのがあつた。まだ日ぐれに間もあつたが僕らはここでビールでも喫まうといふことにした。銀座會館の女給は四人ばかりゐてビールをついでくれたが、樽がけでよこ

れた浴衣を着てゐて、近在の娘だらしく、我が銀座會館の女給としては遜色のある女たちであつた。僕らは間もなく町に出て一軒の骨董屋にはいつてあさつて見たが、あやしげな阿蘭陀渡りのぎやまんが何十圓といふ値段でひそかに舌をまいてゐた。どの品物もどつちつかずの物ばかりで僕は古い百姓家の炭取りを一つと、小抽出シ附の箱を一個とを購めたが考へると持つて歩かれぬので、暫時置いてもらふことにした。謠本の版木でつくつた火鉢があつたが、これは下手物ではあつたが却々面白があつた。しかし、これに銅の落しをつくつたりしたなら、相當に高いものになるので止めて了つた。

町は夜にはいと田舎らしくひつそりと静まり返つて、そんなところに懐かしさが灯のいろを見ても感じられた。僕らは飯をくはなければならぬので、捜して歩いてゐるうちに又別のカフェの前に出た。こんな小さい町にこんなにカフェがあるとは思ひがけなかつたのだ。

僕らはそのメロンといふ家でビールをのむことにしたが、此處は銀座會館よりか落着いた趣きをもつてゐて、眼鏡をかけた令人がのそつりと暢氣者らしく、そろりそろりと何かしゃべつてゐた。蓄音機にドン・ホセがかかり外に草場でもあるのか、きりぎりすが追ひ風に羽根をならして鳴いてゐた。「あんたがたはどこから入らしたんですか。東京でござい

ますか。」と先刻ののつそりさんがたづねた。「さうや、東京者や」とこたへると、ここは輕井澤に避暑してゐる人がよくお見えになります。東京の方はようございますねと云つた。僕はそとに出るとこの町の名物のうなぎを食べたが、うなぎは質がいいので焼きは下手であるが、旨いことは旨かつた。こつくりとして味ひに奥があつて舌の上でしばらく叙情を感じさせた。

「このうなぎは旨いぢやないか。」

と友達がいつた。

僕もへんに旨いうなぎだなど思うてゐるうちに、いつの間にかみんな食べてしまつてゐた。

僕らはまた町に出て田舎の軒深い灯のいろを見て歩いてゐるうち、僕はちよつと國の町のことを頭にうかべた。

一、山

子供達は信州の山から歸京すると、當分は山の話ばかりしてゐた。栗がもう實つてゐるだらうとか、あけびや山ぶだうが食べられるやうになつてゐるだらうとか、山には東京の人ももう一人もゐないだらうとか、さういふ話で持ちきつてゐるのである。

僕も山の秋のことを考へるやうになる。山を引きあげる時分は九月の初めではあつたが秋かぜは山一杯に吹きすすんでゐて、夜中にぶらんこがひとりで軋むやうなことなどがあつた。

山の中の風は一どきにさつと吹いて、大きな波のやうに引いてゆくのである。その音が遠のいてゆくのがとても淋しい。夜具が肩さきからはづれてゐる子供にそつとかけてやると、子供もうそ寒さにほろりと眼をさますことがあつた。季節のはじまりかけるころに子供もさとりやすい頭になつてゐた。

——、何時？

子供はさう云つてまた深くねむるが、僕は一人で眼がさめてしまつて、却々寝つけないのである。秋の夜はねむつてゐても心が落着いてゐてそれが一度さめると却々ねむれないのである。

二、簞 筒

姉が子供であつた時分の僕に燐寸の空箱を二ツならべ、その上を四段にしきつておもち

やの筆筒をつくつてくれたことがあつた。引手は糸をつけてどう見ても本物の筆筒のやうにしてあつた。

けふ子供たちの部屋にゆくと、秋晴れの縁側で女の子が六ツ重ねた筆筒をつくつてゐて、引手は糸でかがつて外がはは色紙で張りつめてあつた。僕は昔姉がしてくれた筆筒を頭にかべ、やはりこんな遊びがのこつてゐたのかと思うた。

——、これは學校で教へて貰つたのかね。

——、いえ、自分で考へてつくつて見たの。

——、何を入れるのかね。

——、何も入れることができないわ。

僕はむかしかういふおもちゃの筆筒に何を入れたか知らと考へて見たが、思ひ出せなかつた。或は姉から布の屑をもらつて入れはしなかつたであらうか。

僕はどういふものか、女の子の持つおもちゃ遊び事が好きだつた。とりわけ更紗やちりめんや友仙ぎれなどを貰つては、自分のおもちや箱にしまひ込んで楽しんでゐた。

三、キ ス

晝飯の時に十二の女の子と九ツの男の子とが、キスのことを話してゐた。キスといふのはどんなことかと尋ねて見ると、二人の子供は可笑しいことなんだといひ、その説明をしない。やつとのことで女の子が、「キスといふことは可愛がることなんですよ。」とまじめ顔をして云つた。ふん、可愛がることか、と僕は感心したやうな言葉つきで返事をして、旨いことをいふと思うた。

僕はちよつとまじめな顔つきをして、それとなく父親らしい言葉を云つた。

——、そんな詰らないことをいふものぢやないね、どこから聞いて來たの。

——、學校でおほえたわ。

——、お友達から。

——、ええ、みんなが云つてわらつてゐるんですもの。

僕はすつと昔の僕のことを考へ出して、この子供たちの言葉を頭にうかべた。僕は早熟であつたが、それは境遇がよくなかつたからである。境遇さへよければ同じい知ることでも、すつとあとから知るやうになるものだ。やはり注意して聞いておくことは注意してゐた方がよいと思うた。それにしても「可愛がること」がそれであるといふことが、いかに無邪氣でうまく表現してゐるかに僕は舌を卷いたのである。

四、暇のないひと

僕は日曜日ごとに二人の子供に五十錢あての小使錢を與へる習慣になつてゐて、僕が忘れてゐても彼女たちは忘れなかつた。彼女たちはそれを學校の貯金帳につけてもらひ、自分でつかふことをしなかつた。運動會があつたり外出することがあつたりして、僕は彼女たちへの小使を日曜日三回ぐらゐ溜めたことがあつたが、彼らは或る日曜には朝それを云ひ、おひるにそれを云ひ、晩にまたそれを言つて請求するのであつた。その場ですぐ渡せばいいのに細かい金がなかつたり、客があつたり湯に行つてゐたりして忘れてしまふのであつた。そしてまた僕の財布にもそれがなかつた。子供はそんなことを信じてくれないであらう。子供は親の善いことばかりしか考へてくれないからである。

僕は子供の成長を一番よく感じるのは、静かなけふのやうな秋晴れの日曜日の朝、女の子がピアノを弾くのと、次ぎの男の子が只今と言つて毎日學校からかへつて來る時とである。女の子はそなちねを習うてゐて少しくらゐ旨くひけるやうになり、却々やるわいと思ひ庭に出てうまいよとどなると、女の子はわらつて了ふがそれでも嬉しいらしく、一そう元氣になつて弾くのであつた。男の子は口笛を吹いてかへつて來るので、垣根ごしに姿が

見えてくる前にもう學校が済んだなといふことが分るのである。子供たちは歸つてくると、すぐお母さまはとたづねる。居ないとどこへ行つたか、何時ごろに出かけ何時頃にかへるかといふ。その次ぎに女中がゐないとどこへ行つたかとたづねる。けれども父である僕をさういふふうに細かくはたづねない、銀座とか宴會とかへ行つたといふと、では晩食にはかへらないねといふきりである。晩食にゐなければ早寢の子供たちとその日は逢へないわけになるのだ。この間女の子がうちのお父さまは散歩に一しよに連れて行つてくれないがよそのお父さまは動物園とか汐干狩とか玉川園とかへ日曜になると子供をつれて行くが、うちのお父さまは一人で散歩してばかりゐていけないと苦情をいひ出した。

——、僕はそとに出てご飯をたべるときは家にゐるときのやうにお酒をのむから、きみたちを連れてあるけないのだよ。

——、わたしたちがゐても召しあがつたらいいぢやありませんか。

——、きみたちを連れてゐて飲むのは見つともないものだよ。それに氣忙しいきみたちと一しよにお酒をのむと、どうもお酒がまづくなつてね。

——、さうお、まづくなるの。

と、ふしぎさうな顔をした。そしてやつと考へついて、

——、きつと煩さいのでせう。

と云つた。子供をつれてご飯をたべに行つて、お父さんがお酒をのんでゐるといふものは、そこから見ると厭なものだ。だからきみたちと一緒に出ないのですと云つた。

五、二本のラケット

或晩珍らしく僕は子供をつれて町を歩いて、白い帽子とラケットを二本購つて與へた。

子供はふと思ひついたやうに、

——、お向ひのお父さんはずるぶん甘いお父さんね。

——、あまいお父さんとはどんな譯かね。

——、このあひだお父さんと散歩してゐると、お向ひの芳子さんがあれを買つて頂戴といふと、すぐ買つておやりになるし、また別なものを買つて頂戴といふとそれも買つておやりになつたわ。

——、さうだよ、お向ひのお父さんはそりや甘いんだ。

と弟まで同意した。つまり子供の言ひなりになることをあまいといひ、言ひなりにならないことをからいといふのであつた。僕はその區別をおもしろく思つた。

——、では僕はあまい方か、からい方かどちらになるのかね。

——、さうね、うちのお父さまはからいときもあるが、あまいときはうんとあまいところがあるわ。

——、からいときもあるなア。

弟は笑ひながらさう云つた。では今日は帽子とラケットを買つたから、あまくなつたのだねといふと、けふはあまいわと女の子が云つて、二人でくすくす可笑しさうにわらつてゐた。

——、では、あまい時とからい時とどちらがいいかね。

——、さうね。女の子は考へながら云つた。あんまりからくてもいやだし、あまくても

可笑しいし、……

曖昧なことをいふと、九ツの弟の方が思ひ切つたやうな調子になつて、大きな聲でそれが本當にさうであるやうに云つた。

——、あまい方がいいさ。あまいにはどんなにあまくてもいいよ。

さう云つて笑つた。

六、子供を怒つていいか

子供を怒つたあとには淋しい気がする。あれほど怒らなくともよかつたのにと、後悔してしまふ。子供が顔いろを變へたりすると、あとで顔いろを變へたことが應へて來て自分を不愉快にする。だからそんなときに僕はかう言つて見るのである。

——、先刻するぶん僕は怒つたね。

——、あ、怒つたわね、でも氣になんぞしないわよ。

——、でも怖かつたらう。

——、怖かつたけれども何んでもない。

——、これからあんな怒り方をしないから、きみも怒らしちやいけないよ。

——、わかつたわ。

そして僕はその當座はなるべく怒らないやうに心がけるが、いつのまにか怒つて了ふ。また怒つたなと思ふ。どうも仕方がない。怒るときは怒つた方がよく、黙つてゐると却つて内攻していけない、こんどは大びらに怒つてしまふ。けれども母親が怒ると腹が立つ、きつと僕はそれを止めるやうになるのである。怒るなら自分一人で怒りたい、母親に怒つ

てもらふことが厭である。怒るならおれが怒る、きみなんて怒らなくともよいといふやうになる。——

それから僕などは父親の資格があるかどうかすら疑はしい、品行とか素養とかが父たる本分をつくしてゐるかどうか、子供の前で立派な顔をして物をいふほどの人間かどうか時々そんなことを考へるけれど、父親を辭めるといふ譯にはゆかないのだ。かういふ嚴肅な意味で誰でも父親や母親の資格があるとは云へない、恥かしく後めたいことばかりである。しかし茲まで考へつめると誰も親になりたくなくなる。誰でも子供さへ生めば親になるのであるが、本物の親になるときは子供が小學へ通ふころでないと、父親や母親の本味が出て來ない、慎しむべきことを謹しみ、にがい顔が心からのにがみを表はし、巫山戯たり戲談を言つたり氣狂ひじみたことをしなくなるのである、尠くとも性慾的にもちやんとした觀念のもとで、殆ど、體質的に整理されるやうに行はれるのである。この時代にあつては大てい父親が一人寝るやうになるのだ。それは何人もさうあるべきであらう。雜居的に一家がせまい家に寝るやうな家庭の子供が、何となくひねて見えたり、知らなくてもいい事を知つてゐたりするのは、大抵、一つの部屋で寝起をするからであつて、そこに保たれる筈の秩序が失はれるからである。かういふ些細なことが悲劇の原因をなすことが多い

のである。

五位鷺

輕井澤の町はづれが碓氷峠の登り口になつてゐる橋の袂に、白樺細工を賣り茶をももてなす一軒の茶店があつた。秋近い日に私はその床几の上に小さい箱があつて、藁の間から三羽の小鳥の雛の顔が覗いてゐるのを見つけた。ちよつと鶉くらゐの大きさがあつて、荒々しい産毛を逆立ててゐたが、眼の光はまるで鷲か鷹のやうに粗暴だつた。あるひは鷲かも知れないと思つた。

私は茶店のあるじに尋ねた。

——鷲の子ですか。

——いや五位鷺ですよ、すぐうしろの山でつかまへたのです。

——へえ、五位ですか。

黄ろい臉裏に輝くまんまるい眼のひかりは、粗暴な、立木でも巢をつくと枯らすといふ五位鷺をつくりだ。三羽とも縄り合うて立つことをしないで、柔らかな嘴を一杯に開け

て、ああ、と腹れたこゑで鳴きつづけてゐた。これは子飼ひにすると面白いぞ。一羽分けてくれんものかと考へ、口に出かかつてゐるのを我慢してたづねた。

——食べものは何です。

——トマトを少しと鯛をやつてゐるんです。

あるじは炬燵から出ようとせず、炬燵櫓にあごをこすりながら云つた。まだそれほど寒くないのに寒國の人の習慣からか、少し寒いとすぐ火にあたるのである。私はまだ鼠の子のやうな赤肌をしてゐる五位鷺をうつとりと眺めてゐたが、三羽ゐるのだから一羽くらゐ呉れてもよささうに考へたが、どうにも分けてくれとは云へなかつた。

翌日通りかかつて見ると、小さい巢箱は庭の方の床几の上に乗せてあつて、五位鷺の頭は二つしか見えなかつた。一そう氣をつけて見てもやはり二羽きりしかゐなかつた。折柄の霧雨に頭の産毛をぬらしてゐたので、霧雨では雛鳥が冷えて發育にわるいでせうといはなくともよいことをいつたが、あるじは依然炬燵にあたつたまま暢氣さうに顔だけこちらに向けて云つた。

——野の鳥だからかまひませんよ。

——一羽足りないやうだが誰かにわけたんですか。

——是非にといふので分けたんです。

それきりあるじは勝手の方へ向いて、野菜のことでお内儀さんと喋り合ひ、もろこしはもう一本一錢ぐらゐだとかいひ、裏にもろこし賣りの百姓でもゐるらしい様子だつた。

僕はすごすと引き返した。すぐに分けてくれといへない事情が僕にあつた。それはこの白樺で作つた細工物が大嫌ひだつたので買つたことがなく、むしろ輕蔑の感に堪へなかつたのである。パイプ、繪葉書、茶托、琴、短冊、盆、といふふうには白樺材で作つた細工物は、白樺どくとくのけげばしい安つぽいものであつた。ほかに土産物もあるのに詰まらない子供だましのやうなものを賣る店だと思ひ、平常はむしろ不機嫌な顔つきで店の前を通つてゐた。その氣持があるじにも通じてゐたものか、どちらからも朝はお早うとも、晩はお晩になりましたとも挨拶などは一さい取り交はさなかつた。却つてどちらかといへば少しくらゐ睨み合ふやうな氣はいさへあつたのだ。それだのに五位鷺を一羽分けてくれとは、なかなか言ひ出しにくかつたのだ。言ひ出して斷られでもしたら全くいい面の皮だつた。だから私はほしいことはほしいが口に出して云はず、誰か別の町の人にたのんで貰はうと考へてゐた。

その翌朝早くに通じかかると、れいの巢箱は軒下の下駄箱の上のせてあつたが、五位

鷺の頭は今朝は一羽しか見えなかつた。ひとりになつたので少しせはしい聲で、ああ、ああ、と悲しい鳴きをつづけてゐた。

私は果して一羽きりかどうかと店先に近づいて見ると、さびしさうな五位鷺の頭が一羽きりこちら向きになつて鳴いてゐるのを眺めた。早くいへば貰へたかも知れないのに残念なことをしたと、この炬燵にあたつてゐるあるじを小憎らしく感じた。

——、五位鷺はたうたう一羽きりになりましたね。

——、一羽あげた家で、こどもだから一羽きり放して飼ふのが可哀さうだと言つて持つて行かれたんです。

私はだまつて残つた一羽の五位鷺のあたまを撫でてやつてゐると、

——こいつは家で飼ひたいと思つてゐるのです。

と、云はなくともいいことをあるじは喋つた。なに、ほしいなんかといふもんか、そんな氣持で私はひどく不機嫌になつてこの茶店を出たが、もちろん挨拶もしないで、そしらぬふうで出て行つた。

私は家にかへると五位鷺は二羽そつくり持つて行かれた。惜しいことをしたと自分の鳥のやうに残念がつたが、そんな小鳥や猫や犬を好きな家内や子供たちまで、二羽とも持つ